
嘘以下の回想

蝉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘以下の回想

【Nコード】

N4593N

【作者名】

蟬

【あらすじ】

具体的に言えばこの物語の主人公、峰条真黍という少年はいたって普通だ。普通に異常で、普通に異質で、異能ではないが、畏憚なる異端であることは自明の理であり、生きている以上に死んでいる存在、それが峰条真黍という人間の本质だった。そしてこれは、終わりの続きの物語だ。いや、物語自体に終わりと言う概念が欠陥欠落している以上、これは終わりの続くの物語なのかもしれない。概要は、まあ、諸君らの目で確かめてくれ。いやはや、にしても前置きが長くなるのはいけないな、毎度のことながら。それでは、はて

さて参ろう願ひましては！ 狗も歩けば棒で殺され、猿も木からは
転落死、鳴かぬ雉さえ道連れに、笑う黒猫溺れ死ぬ。ではでは、さ
あさあ、今宵の宴は始まらない。

これはプロローグでもありエピローグでもある

「他人とは違う、他人とは異なるということを君はどういう風に考える？ 一般的に、個人の個性と言えば正解だろうけど、ボクは偏にこう考えているよ。それはすなわち一種の『悪』である、ね。人は誰しも違っている。当たり前のように一人一人が個人であり、完全まったく丸つきり同じ存在の人間なんていやしない。まあ、これはボクの私見で述べたものだからね、もしかしたら探せばいるのかもしれないけど。そこはまあ、いないと仮定しておこう。それであつても人っていうのは、誰しも似通つたようなものなんだよ。生まれも育ちも違う初対面の他人同士であつても、絶対どこかしら共通する部分はあるものなのさ」

対面した彼は、無駄に長い口頭を滔々と語った。

「さあ、話を戻すけど、どうして他人と違い、異なることが『悪』であるか。いや別に、僕は他人と違うことを否定してる訳じゃない。他人と異なる、他人と違う、大いに結構。むしろ推奨したいくらいさ。だけどね、行き過ぎた相違とは既に個性とは認められず、もはや異端と見做される。歴史を見ても、異教徒の迫害然り、魔女狩り然り、いつの時代も異端という存在は『悪』とされてきた、いや、悪役に回されてきた、と言うべきか」

何となく不愉快にさせる苦笑を漏らし、その彼は、自分と目を合わせた。どことなく荒廃とした、どこまでも虚構とした、どうしようもなく混沌とした、驚く程にどうもしない、救いのない、救いようのない、死んでまた生き返ったような魚の目よりも、気持ち悪く、気味が悪く、直視でもし続けたら間違ひなく発狂してしまうようなとにかく、厭な目だった。

だから、彼との視線をずらす。

「ははっ、そうとは思わないか？ ホワイトアウト生まれながらの悪役、親愛なる偽悪者、畏憚にして異端の《白鴉》の異名を持つ君としては」

まったく酷い言われようだ。別に最後のは持ちたくて持った訳じゃない。勝手に名付けられたのだ。

まあ、確かに腹が立つくらい彼の言ったことは正鵠を射ている。自分でもその自覚はあるくらいに。

「人は生まれながらにして善人で、悪人だ。心の中にいつだって天使と悪魔が共存しているように、誰しもどちらかに偏るなんてことはない。ところが、どこから見ても、誰から視ても悪であり、敵とされる、言い換えれば、人間にとっての悪。世界にとっての敵——そういう存在であることを決めた君の人生というものは、推して量るも想像の余地すらないよ。歴代の『論外児』達を並べて見ても、君みたいなのはまさしくその名の通り、異例だよ」

たとえば《死線領域》^{パニックルーム}のように。

それとも《汚染通告》^{ペイントベイン}のように。

もしくは《永久不変》^{アンリミテッドコモン}のように。

あるいは《夢魔》^{スリープウォーカー}のように。

はたまた《無殉教者》^{アンビヴァレンツ}のように。

自分はこれまでの彼ら彼女らとは明らかに異例だと、このふざけた人物は飄々とのたまう。

「彼ら彼女らは間違いなく、異常であり、異質であり、異能だった。そして、人間というパーソナリティに関しては、彼らは決して類別出来ず、分類出来ない一種の絶対的な『個』という確立した存在だったのと同時に、彼らは人間、否、人類の誰しもが共通に抱える感情や思想や本能といった、言わば最終的な人間モデルだった訳だ。でも、君はどうだい？」

どうだい？ と聞かれても、もはや自分は最初っから完全に聞きに徹しているので、こちらに回答を求められても困るだけなのだが。「君は狂った異常でも、壊れた異質でも、イカれた異能でもない、ただただ、歪んだ異端であるだけなんだよ。だが、そこが問題だ」何が、問題だと言うのだろう、彼は。この、間違い続けてきた——恐らくこれからも間違い続けるであろう自分に、今更何の問題が

あると言うのだろう。

間違つて。

間違い続けて。

問題という問題すら埋もれてしまうくらいに問題な自分に。

彼は。

「感情などではなく、『異端』という概念の人間モデル。ふふふつ、確かに面白い存在であるよ、君は。ま、『災害』たる現象の人間モデルのボクが言うのも何だけどね」

目の前の彼——果たして《名探偵》^{バッドネーム}の彼は。

「ボクはね、君にこの上なく期待しているんだよ。世界を揺れ動かすことしかできなかったボクだが、君なら、畏憚にして異端の《白鴉》^{トアウト}たる君になら、世界を揺り起こすぐらいのことは出来るんじゃないかなって」

吐き気がする程優しく、涙が出るくらい嬉しそうに。

「さあ」

目を細め、口元を引き、思わず殺したくなるような笑顔で。

「精々、ボクの暇潰しになってくれよ」

思わず死にたくなるような戯言を吐いた。

これはプロローグでもありエピローグでもある（後書き）

登場人物一覧（前書き）

キャラ多くてすみません。

あれ、こいつ誰？ ってなった人用です。

もし混乱されたら、こちらのほうをご参照ください。

登場人物一覽

【峰条真泰】
ほうじょうまきび

……高校二年。『新聞部』部長。『白鴉』
ホワイトアウト。

【掛井菊子】
かけいきくこ

……高校一年。後輩。カメラ担当。通称『キク』

【現上乃姍】
うつがみのあ

……高校二年。同級生。『現上財団』令嬢。

【各務奈直】
かがみななお

……殺人鬼。『殺戮嗜好』
ノットリタイン。

【鳴神千曲】
なるかみちくま

……叔母。養護教諭。

【円居円】
まどいまどか

……精神科医。

【神支那千五百】

……お隣さん。酒豪。OL。

【真葛ヶ原愛義】

……天敵。生徒会長。通称『ASH』。『

真葛ヶ原財閥』令愛。

【滋野井選】

……生徒会役員。副会長。

【峰条小麦】

……妹。入院中。

登場人物一覧（後書き）

【彼】???.??.?

001 (前書き)

この物語は是非ともたて読みを推奨いたします。

珈琲を飲んだ。我ながら不味かった。

「ふむ」

ほうじょうまさび

峰条真黍は遺憾に思う。

立ち上る湯気をそのままに見飽きた室内を眺める。

広さは普通の一般教室と変わらないが、その雑多な荷物と資料の山やダンボールなどで埋め尽くされ、元の広さの二分の一程度まで狭まっていた。しかし、単にそれは雑多に物が多いというだけで、決して乱雑な訳ではない。そこには歴とした秩序と整理整頓がなされ、どこに何があるのか完璧に把握出来るようになっており、その部屋の主の神経質さが伺えた。

つまりは真黍の性格が如実に現れていた。

品行方正の几帳面で真面目な性格、ではない。

自分の知らない、手が届かないという事実が、我慢ならない。

そんな歪に振れた、不可解な欲望じみた性質である。

「……………」

解放した窓からは、金木犀きんもくせいの甘い匂いが風にのって室内を縦横無尽に蹂躪する。まだ秋になりかけてすらいらないというのに、随分とお早い開花だ。

確か、金木犀の花言葉は「謙遜」だの「真実」だの「初恋」だのと、これまた随分と自分とは数ミクロンも関係関与しないものだと真黍は窓の外を見て思った。

そう真黍が当て事も無く考えていると、背後で最近立て付けがご

機嫌斜めな戸を開ける音がし、誰かが入室した気配があった。真黍はそれがいったい何者なのかは十全に熟知していたが、一応は礼儀なので振り向いて挨拶をする。

「お疲れ、キク」

「どうもです、真黍先輩」

そう気だるそうに返事をした彼女――通称キクこと掛井菊子かけいきこは、革張りのソファに鞆を投げ捨て、どきりと沈み込んだ。その際に、彼女の唯一のチャームポイントである結い上げたポニーテールが怒ったように揺れた。

「ちゃんと撮ってきたか？」

「ええ、そりゃもう」

菊子はごそごと自分の鞆の中から数枚の写真を前の背の低いテーブルへと並べた。

「ふむ、上出来上出来。よくやったぞ、キク」

真黍はよしよしと満足気に頷き、菊子の成果を労った。

「あたしはただ先輩に言われたとおりの時間と、場所で、シャッター切っただけですけどね」

「それでも、お前の功績だよ。褒めてんだ、素直に受け取っとけ」
「でも先輩の言い方には、いつも何か含んでるような気がするんですよねー」

と菊子はじと目で真黍を見つめるが、当の真黍はまいったなど全然困ってなさそうに苦笑した。

そしてローテーブルに晒された写真には、中睦まじそうな二人の男女が寄り添いながら写っていた。一方は大人びてはいるが、実際はこの学園の男子生徒であり、女の方もまたこの学園の教員である女性だった。時刻は深夜。場所はモータールの駐車場搬入口付近からの撮影である。

「まったく、あの時間帯にあんな場所に女の子一人行かせるなんてどうかしてますよっ」

「だから護身用グッズ渡しただろ？ スタンガンやら警棒やら何や

ら」

「それでも襲われたらどうするんですかーっ？」

「それはまあ、こう」

真黍はお手ての皺と皺を合わせてなーむーといった感じに合掌した。

「ご冥福お祈りですか!？」

「化けて出るなよ？」

むきーっ！ と菊子がソファの上でじたばたと暴れ、真黍は「まあまあ、珈琲でも淹れてやるから」と菊子の宥めに取り掛かった。

「先輩のコーヒーは不味いです」

しかし後輩からの反応は冷たい。それでも、最後まで残さず飲み干してくれる菊子のそういう所が、真黍は好きだったりした。



ここ神無森学園はモンスター校である。

一学年につき九クラス以上あり、全校生徒は総計で軽く千人を超す。普通科、理数科は勿論、ありとあらゆる分野、専門、技術の各コースがあり、生徒の層、種類や傾向なども多岐に亘る。そして校舎の大きさも馬鹿らしくなるぐらい広大無辺で、もはや大学のキャンパスすらも超越する巨大さとなっていた。真黍にしてみれば、それは肥大し過ぎた醜い怪物のような印象を受けるだけであつたが、その怪物の口に飲み込まれるように年々生徒数は増えつつある傾倒にあつた。その中には俗に『お嬢様』や『お坊ちゃま』と言われる人種も少なくなかった。

創立七十年を迎えるここ神無森学園がこのようなモンスター学校にまで至ったのは、ほんのつい二十五年前くらいからだったという。

契機としては、『現上』^{うつつがみ}や『真葛原』^{まぐずがはら}と言った有力者の一族が後援者としてバックに付いてから始まり、徐々にその頭角を現していった。土地の買収、校舎の建て増し、政界やらのコネやら何やらで、ここまで大きく成長してしまったとか。それを成し得たのが第六代目学園長——つまりは現学園長（御歳六十五歳である）な訳だが、彼の御仁のことについては『情報屋』を自称する真黍でも、知らないことの方が多かった。

否、知らなくていいことの方が多かった。

元々、学校という場所は閉塞的である。閉鎖され、封鎖されているとも言ってもいい。養成機関とは名ばかりの、どこか謎に満ちた一面が数多くある。

殊更特に、この学園もそうだった。

怪しいオカルト教団の温床になっていたとしても、地下に人体実験が行われている研究所があったとしても、軍隊紛いの迷彩服を纏った組織が日々訓練に励んでいたとしても、何ら可笑しくはなさそうに思えるのだ。

「あくまで、想像だけだね」

真黍は苦笑気味に己の妄想の暴走に歯止めを掛ける。

やや強めの風が、髪全体を乱す。真黍はうっとおしく前髪を掻き揚げながら、下界に視線を向ける。

真黍がけっこうな割合で訪れるこの屋上からの景色は、当たり前だがいつもと寸分も変わらぬ光景で、今日も今日とで校庭では部活動に勤しむ者達で溢れ返っていた。

まるで神様にでもなったみたいだと、真黍は俯瞰する風景に感想を抱いたが、

「まるで神様にでもなったみたいだ」

と、横から声が飛んで来たので、心でも読まれたのかと少し吃驚した。

「何、いきなり？」

「いや、単にそう思っただけ」

「それじゃ、シンクロニシティだ。千曲おばさん」

「おばさん言うな。ここでは先生と呼び」

屋上のフェンスに凭れかかったその女性は、真黍の言動を窺めつつ、煙草を銜えた唇の端から、ぷかーと紫煙を吐き出した。

「分かりましたよー、鳴神なるかみせんせー」

「それでよろしい」

頷く代わりにもう一度気持ち良さそうに煙を吐く彼女の名は、鳴な神千曲るかみちくま。この神無森学園勤務の養護教諭である。

詰まる所、保健室の先生であった。

そして、真黍にとっての伯母である。

潔白極まる白衣とフレームの無い眼鏡とを身につけ、喫煙をする姿は何ともミスマッチな光景だったが、もう随分と見慣れた姿だった。

「マキ、お前も暇だな」

「こうして屋上で煙草ふかしてる時点で先生も同だろ」

「私はこうやって日頃の鬱憤を晴らしてるんだ。決して暇なんかじゃないさ」

「保健室空けといていいのかよ」

「開けてあるから大丈夫だよ」

傷薬でも絆創膏でも好きなだけ持っていけー、と千曲はセルフサ―ビス精神旺盛な主義で言っただけだ。

「患者が不憫だ」

「どうせ滅多に来ないよ」

と二人は互いに無意味と知っての会話を打ち切り、再び自分だけの時間へと戻る。

真黍は、ただフェンスに向き合い、校庭を俯瞰して、神様の真似事をし続ける。

千曲は、ただフェンスを背に凭れ掛かり、空を見上げてぼおつとダンヒルライトをゆっくりと吹かす。

『セブンスターやマルボロなんかの平凡で代表的なものいいが、私

はこの心地良い重みが気に入ってるんだ』とはいつか千曲が真黍に話した内容だ。その時は確か、自分が伯母の吸っている煙草が、あまり見ない銘柄だと思って何となしに尋ねた時のことだったはずだ。少し懐かしく思う。

「この学園の十二不思議を知っているか？」

唐突に千曲が視線を天に向けたまま、口だけを動かして言った。

「そりゃ、まあ」

いくつかは聞いたことはあるが、どこにでもあるような陳腐で在り来たりな内容だったので、大して興味はなかった。

「その一つに、この屋上から落ちて消えた男子生徒の話は？」

千曲はちらりと視線を横にずらし、ある一点を見据える。そのフェンスだけ、他のとは微妙に新しい色合いをしていた。

「何年か前に、この屋上で私刑をしていた男子が、苛められていた奴らから逆襲にあって、丁度あの辺りのフェンスが外れて、突き落とされてしまったにも関わらず、落下死体は見つからなかった。以来、時折自分を突き落とした奴らを探して屋上に出現するとか、って話だっけ？」

その噂の効果もあってか、普段からこの屋上を利用しようとする生徒はほぼ皆無だった。

「ふうん………今はそんな風に伝わってるのか」

千曲は吸い切った煙草をポケット灰皿に押し込み、再度ダンヒルライトに火を点した。

「先生、何か知ってるの？」

真黍は千曲のそんな思わせぶりな態度に疑問を抱き、訊いてみた。「ん、まあ、な」千曲はそう前置きをして「その男子生徒、私の知り合いなんだよ」

知り合いなんだよ。

だった、ではなく。

あくまで現在形なことに、真黍は異様な違和感を感じた。

「へえ。ああ、そうか。丁度、先生がこの学園にいた頃だったけ」

「うん、そうだな。アイツは、そんな化けて出るようなしつこさは無かったよ。アイツの唯一の長所が、病的な潔さだったからな。まあ、逆に短所でもあるんだが……でも、私としてはアイツはまだ死んでない気がするんだ」

「あ、死体が見つかってないって本当なんだ」

「そういう意味で言った訳ではないんだが。まあ、そうだな。その理由もあるけど、一応は葬式も済ませたんだよ。一応は。でも、ね。何だかな、アイツが死んだとは思えないんだよ。いつかひょっこり帰ってくるんじゃないかって、そんな気がしてならない」

「ねえ、おばさん」

それは、ただの知り合いじゃないよね？

真黍は彼女の言動からそんな雰囲気を感じた。友人よりも、恋人よりも大切な誰かを語るように、それは懐かしむようでもあり、悲しむようでもあり、そんな彼女の紫煙を吐き出す様子からは哀愁すらも匂わせる。それを喫煙で誤魔化している節も見受けられた程に。だが、千曲は、

「おばさん言わない」

と毎度の如く同じ調子で同じような台詞を言った。

話はこれまでとばかりに、千曲は白衣をはためかせ、煙草を灰皿に押し入れ、静かに出口へと歩き始めた。

「たまには授業も出ろよー」

と最後の最後に教員らしいことを言い残し、鳴神千曲は屋上を去っていった。

ポツンと一人残された真黍は、ブレザーの内ポケットからマルボロのメンソールを取り出し、百円ライターで点火する。ゆっくり吸って、のんびり吐き出した。メンソールのきつさに少々胸焼けを起す。仕方がないから後は銜えたままで、さっき千曲の同様の姿勢で突き抜けるような蒼穹を仰いだ。そこは雲一つ無くまっさらで、嫌味な程に晴天だった。

「……………ッチ」

本当、
嫌味な程に。

「……………おお」

雨が降っていた。といっても小雨であるが。

ソファに寝そべった体勢で、つい今開いた視界には、外でしんと静かに窓を打つ雨音が映っていた。

「……………おお」

壁にかかった時計を確認すると既に八時を回っていた。真黍はまだ少し寝惚けたままの頭を抱え、のろろと動き出した。仮眠のつもりがどうやらうつかり熟睡してしまっただけ。面倒なので、どうせなら、このまま学校に泊まっててもいいのだが、いかんせん腹が減った。それに風呂にも入りたい。

生徒用玄関は当然閉まっているので、靴を持って行って職員用の方に向かい、ついでに誰の物か分からないが、傘を一つ拝借する。どうせ教員のだろうから、気にする必要もない。

傘を開いた真黍は、湿った冷たい空気に身体を引き締められ、ついでに頭も完全に覚醒したようだった。

そして、ロンドンもびっくりなほどに、これまた随分と霧が立ち込めていた。前方十メートルは何も描かれていないカンバスばりに真っ白であった。夏の騒々しい暑さも落ち着きを取り戻し、秋の静かな輪郭を肌でひしひしと感じる十月初旬。秋の雨が降れば猫の顔が三尺になる、という諺があったが、ありゃ嘘だな、と真黍は思った。雨が降っていた方がより寒い。そんな道すがら、真黍は頭の中で時刻表を広げ、この時間帯の電車の来る時刻を確認する。

そう言えば、この前ここから二、三離れた駅で、刃物による殺傷事件があったわけ、と真黍は昨夜見たニュースを思い出す。朝の混雑している時間帯を狙って起きた事件で、その混雑さ故に誰が犯人

なのか分からず、犯人は混乱に乗じてその場から去り、行方を眩ましたという。

まあ、何ともシンプルな手口であろうか。

やったら逃げる。ヒット&ウェイだ。

刃物、ね。

いつだったか乃姢が、

『ナイフはいい。まるで思春期の少年をそのまま形容したかのような、初々しい禍々しさを感じるよ』

と自前のバタフライナイフを弄びながら、うっとりして語っていたっけか。そう、だから。

だから、決して唐突ではなかったのだ。

驚きよりも、むしろ下手に物騒なことは考えるものではないなという自省の念の方が強かった。

いつの間にか、小さく傘を打つ小雨は終わっていて、今はただ濃厚な霧の気配だけが変わらず充満していた。

刃。

と、言うべきなのだろう。前方、濃い霧の中で街灯の光を浴び、そのシルエットだけを露にした次の瞬間には、より明確なその正体を見極めることが出来た。

【ソイツ】は、人を殺すにはもってこいの、もしくはそれ以上に最適な物はいくらに大振りな刃物を握っていた。

ランボーナイフみたいだ、と真黍は率直な感想を抱いた。

いや、形はどうあれ、あんな刃渡りが三十センチ近いナイフがそんなじよそこらに存在している訳がない。故に、いつか見た映画で、シルヴェスター・スタローンが振るっていたあのナイフを連想したのだ。ああ、怒りのアフガンまた見たいなあなどと、真黍はこの場において到底そぐわないであろう暢気なことを平然と思った。

はて。

さて。

果たして目の前に凶器をぶら提げた相手に自分はどう立ち回れば

いいものやら。大体相手は何者なのだろうか。まさかのまさか、本物のベトナム帰還兵でもあるまい。

今、はっきりと視認出来るのは、夜の白い霧の中に浮かぶ辛うじて分かる人のシルエットと、街灯に照らされたランボーナイフの鈍い光沢だけだが、それもまた時間の問題で、次のコンマには、そのランボーナイフの持ち主の正体が確認出来た。

「―――！」

若い――否、正確な歳は把握出来ないが、少なくとも自分と同じか、少し上のようにも見えた。

服装については、色褪せたダメージジーンズに、靴紐が解けたままの履き古されたスニーカー（靴紐がほどけているが、結ばなくていいのだろうか）。ミュシャの絵がモノクロプリントされたシャツを着ていて、その上から灰色のジャケットパーカーを羽織り、フードは目深に被っていた。このことから、性別の判断は存外難しかった。中性的で、女のようにも、男のようにも捉えられた。

いや、捕えられるのは自分の方か。

「……………」

「……………」

互いに言葉は発しない。いや、この現状でいったいどんな言葉が必要で、どんな言葉が必要ではないのだろうか。ストリートファッションな彼？（彼女？）は、物々しい凶器を携えてはいるが、実際こちらに危害を加えるつもりはあるのだろうか。否、そもそもあのナイフ自体が本物だとは限らないではないか。細かい部分まで精密に作られた単なる玩具の可能性も捨て切れない。偶然、玩具のナイフをぶら提げて（理由は知らないが）いた所であったり自分と邂逅しただけなのかもしれない。ならば、このまま素通りしてもならん問題はないのではなからうか。悪戯な運命の巡り会わせで事なきを得る結果で終わるのではないだろうか。

そう楽観的な思考をしていた真黍の妄想を打ち砕くかのように、対面していた人物が、世間話でもするかのような軽い調子で、言っ

た。

「ねえ、僕に殺されてみる気、ある？」
まったくもってございません。



「というか君、殺してもいい？」
「……………っ！」

真黍は差していた傘を投げ捨て、無意識に半歩下がり、こっさりバレないように学生鞆の中に手をつ込んで、鞆の中に常備しているスタンガンの感触を確かめ、いつでも出せる体勢にした。

何だ。

何だ、こいつ。

明らか、普通じゃない。これがただの電波なアイタタタッーな奴であつたならどれだけ良かったか。しかし、違う。こいつは、違う。何かが、壊れてしまった人間だ。そういう、目をしている。

イツちまつてる。

「ふふ、ふふふ……………いいよ、いいよ、その顔。ふふふ……………ふ？
あ？ え……………あ、あれ、れ？」

と、目の前の人物は自らのフードを剥ぎ取り、どうしてだか動揺した様子で自分を、視た。

「……………え、いや、あ、は、はは、あははははは！ そうか、そうか！ そうだよね！ はははは！ うん、やっぱりそうだ。ふはは、じゃあ、さっそく殺そう、殺そう。あはははははは」

その人物——いや、彼女は、高らかに狂ったような笑いを上げた後、独り納得したように頷いて、手に持ったナイフを目線ぐらいの

高さに持つてきて構えた。

髪は、肩に届くか届かないか。一言で表すなら、ボーイッシュ。少年のような少女。よく注視すれば胸の膨らみも僅かばかりだが確かにあり、加えて随分と綺麗な顔立ちをしていた。切れ長の瞳。病的な白い肌。薄い唇を舐める赤い舌。まるで舌なめずりをする獣のよう。危うく惚れてしまいそうだった。

……………冗談だって。

「ふふっ、それじゃー、いくよー」

はっ、と真黍は我に返った。いかん、いつもの人間観察の癖が出てしまったと刹那的に後悔し、臨戦体勢に突入する。

相手はまっすぐ突っ込んでくる。武器は大振りのナイフ。こっちは迎え撃つ体勢で、武器は改造スタンガン。雨は既に霧雨程度に治まっていたので、なんら問題なく使用することが出来るとはいえ、勝てる見込みは分からなかった。だが！ と真黍は鞆の中に入れたままの手を、こちらの唯一の武器を握り締めた手を素早く前に突き出した。

これが普通、一般人に行われた攻撃方法だとしたなら、突然鋭く突き出されたスタンガンに面食らい、容易にその電撃を食らわせることが可能だろう。しかし、これが喧嘩慣れた奴ならば、そんな愚にも付かない安易なフェイントには決して引っかからないであろう。だから、真黍はあえて相手を油断させる形でそのフェイントを躲させ、その隙をついて第二段の攻撃を与える作戦だった……………だったのだが。

凶器を振りかざす彼女は、一直線にこちらに向かってくるかと思いきや、いやまあ、事実猪突猛進の如く突っ込んできた訳だが、その、文字通りの意味で。

靴紐。

真黍は短くそう思った。

彼女はこういう訳か、滑稽にも自分の靴紐を踏んでしまい、しかも自身が走ってきた勢いを殺せずについて、そのまま真黍に向かって

倒れこむように雪崩れ込んで来た——が、真黍には所在なさ気に突き出していたままの改造スタンガンがあり、出力最大のスイッチにも指が掛かっていた。

「あ」

「え」

前者は彼女。疑問という名の驚きを漏らしたのは真黍である。

バチィツバジバジバジバジバジィジジィツ！

駅まであと少しだというのに。閑静な住宅街、という定型句を具現化したかのようなこの場所で、布が引き裂かれるような爆音が、あられもなく反響した。

002 (後書き)

はー、久々に更新。

すげー短いのですが、とりあえず行進。

作者のもう一つの世界、『魔王の息子』も見てね！ (何気に宣伝)

幸いにも雨は止んだようだった。しかし、依然として霧は辺りを白く満たしていたままだった。視界が悪い。

そして、

「……………重い」

背中に覆い被さるように背負ったこの人物を、真黍は非常に持て余していた。

「ああ、痛いよおー痛いよおーまだバチバチするよおー死んじゃうよおー……」

「……………」

「酷いよおー酷いよおー今更ながらこの鬼畜う……………」

「……………」

まことに遺憾ながら、すこぶる事情の説明をしようじゃないか否させてくれ。思わず反語法まで使ってしまう程に今の状況は複雑怪奇に単純明快だ。

自分があの時、前のめりに突っ込んでくる相手に、構えていたスタンガンは一直線かつモロに直撃した。そりゃもう一切合切完膚なきまでにクリティカルヒットだ。

そして、百万ボルト以上の電圧を食らった相手は、

「痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！」

「……………」

「うっわ！ マジ痛えー！ ガチ痛えー！ 死ぬっ！ ここで死ぬ！
確実に死んじゃう！ 痛いよー！ 太陽おー！ 遺体よおー！
うわあああああああ！」

ゴロゴロと、地べたを情けなく悶え転がりまくって、あたかも瀕死の重傷を訴えるかのようだった。

「うううっ僕がいったい何したってのさ。こんな弱い僕に、何でこんな酷いことするのさあ……………」

「色々とツツコミ所満載だけど、とりあえずアンタ、俺を殺そうとしたよな？」

「何言ってるのさ、僕は君を殺してない」

電圧を直に浴びた腹部を抑え、蹲^{うずくま}るそいつは、脂汗をダラダラと流しながらも言ってるのける。

「アンタこそ、何言ってるんだよ。俺は単に正当防衛に徹しただけだ」
「だったら君は、君を殺そうとする者全てにこんな仕打ちをするのかい？」

「はあ？」

「君は、君を殺そうとする者全てに、そのスタンガンを押し付けるのかい？ 君に殺意を向ける者全てに、正当防衛と称して暴力を働くのかい？」

「なっ！ アンタは、俺に刃物を向けただろうが！」

「そんなもの、僕はただ刃物を持って、君に向かっていっただけで、君には何もしなかったかもしれない。君が何もしなければ僕はこんな痛い思いをしなかったかもしれない。思考と行動は別物だよ、君」
「んなっ……アンタのは全部結果論だろ！」

「そう、結果さ。世の中結果が全てなんだよ。それとも何かい？ 君は結果よりがんばったという過程が大切なよ、とかいう善人面した糞教師みたいな暴論を持ち出すのかい？」

地面に横たわりながら、すらすらと淀みなく喋る彼女。おい、さっきまでの痛みはどうした。

「何なんだよ、アンタ、いったい」

真黍は、動揺する心を押し殺すように、勤めて冷静に言った、はずだった。蹲る彼女は、にやりと不敵に笑い、まるで今の今まで痛がっていたのが全て演技だったかのように、むくりと起き上がって胡坐をかき、言った。

「僕は各務。かがみなお各務奈直。昔に僕のことを殺戮嗜好だなんて呼んだ人もいたっけね。そんなしがない、素敵で不敵な殺人鬼さ」

やっぱり、あんた、俺のこと殺そうとしたろ。

そんな真黍の逃げ場のない思いは、空しく宙を舞った。



そして、この様である。

各務と名乗った殺人鬼は言った。被害を被ったのは自分であり、一方的な正義は自分にあると。その言い草がとある天敵の口癖に似ていて、非常に不快になった。

「なので、加害者である君には、免罪符として僕を保護する義務を与えてあげよう。故に、君は僕が全快になるまで看護する必要があるからして、どうーゆーあんだすたん？」

ノーウェイファックユー。

ではなくて、真黍が反対の意思を示すと各務は「そんなら僕は君に復讐を誓おう。何が何でも絶対殺してやる。殺す殺す殺す殺す」と呪術めいて呟き始めたので、これはもう面倒だが、引き受けるしかないのかと諦め始めた真黍だった。

「……それじゃあ、近くの病院まで運んでやるから、それで勘弁してくれよ」

「やだ」

ふんっ、と各務は拗ねた子供のように顔を背けた。

「は？」

「やだ」

「何で」

「病院は嫌いだ」

「は？」

「だから君の家で看護したまえ」

「は？」

は？

何を言ってるんですか、この不審者は。

……………と。そこで、スタンガンを用いらずとも、真黍の脳内に電流が駆け抜けた。この不審者の狙いに、気づいた。

「アンタ、金はあるのか？」

「うまい棒が百本は買えるくらいはある」

「行く当ては？」

「行き当たりばったり、という言葉を知ってるかい？」

「……………これで、あんたの意図が大体理解出来たよ」

人を、ホテルか何かだと勘違いしているのではないか、この自称殺人鬼は。要するに、金の掛からない宿が欲しい訳だ。ふざけるな。野宿しろよ。ホームレスな中学生でも見習いやがれ。にしてもこの野郎、その場のノリと流れて何とかなるとでも思っているのか？馬鹿なのか。それとも馬鹿なのか。実際、馬鹿なのか。

「救い難い馬鹿なのか」

「何だか無駄に四回も罵られた気がするよ」

「気のせいだ」

……………はあ、と脱力気味に嘆息する。真黍はどうしたものかと無意味に頭を掻く。しかし、頭皮をいくら掻き毟ったって現実からの逃避は到底叶わない。

真黍の現実主義に富んだ思想と性分がこの非日常的な局面にてダイレクトに災いした。

いや、あるいは幸いしたのか。
いずれにせよ。

「俺に選択肢はないってことなのか……」

「いやいや、あるとも。僕を君の家まで運んでいくか。もしくは、ここで僕を見捨てて、いつの日か僕に殺されるか――のどちらかだよ」

「……………なら、俺が今ここでアンタを殺すって手段も残っている訳だ」

「それはどうかな？」

ふふん、と何故か勝ち誇ったような上辺目線で、長い睫毛をぱちぱちと二回瞬く。真黍は懔然とした態度を崩さぬよう努力しながら、何故そう言い切れると反駁した。各務はやれやれと首を振って、仕方ないばかりに語りだした。

「君は、殺人の犯すリスクを知っているかい？ 多分、知っているだろうね。刑法百九十九条、五年以上の懲役または無期懲役、それが良くて死刑だ。少年法が適用される歳はもうとっくに過ぎただろう？ 犯行がバレた時点で、即人生がアウトさ。これまで築いてきた地位も名誉も金も信頼もゼーんぶオジャンだ。もう、まっとうな道は歩けなくなる。そんな危険性を背負ってまで、人を殺すことに価値があるかい？ そもそも人を殺すのにだって、途轍もない能力と労力が必要になる。仮に完全犯罪が成功したとしても、それは単なる一時しのぎにしかないよ。いずれ自らの罪は暴かれるものさ。《完全》なんて言葉が、虚構以外の何ものでもないことは、君も理解しているだろう？」

それでもどうだい？ 僕を殺るかい？

と、各務奈直は至極真つ当な見解を述べる。息をする間もなく、反論を挟み込む隙間もない、道徳主義の大人達が泣いて喜ぶような正論をすらすらと並べ立てる。

自分を、殺そうとした奴が。

恥もなければ、外聞もなく。

自称殺人鬼のくせに。

いけしゃしゃと。

「……………負け、か」

夜空を一度仰ぎ、諦観の眩きを漏らした。白鳥座が、何とものんびりとした調子で銀河を泳いでいた。

「ん？」

「分かったよ。アンタの要求を呑んでやるよ……仕方なく、な」

「ふふん、上出来だ。あと、君い。そろそろアンタ呼ばわりはやめてくれないか。僕は各務かがみなな奈直だ。是非とも各務と呼んでくれ」

「……アンタこそ、ヒトを君呼ばわりするのはよしてくれよ。俺には峰条真黍って名前があんだよ」

「ふふん、了解だ。じゃあ、真黍君。一つよろしくだ」

尻餅状態の各務が、すう、と手を差し出す。真黍は反射的にその手を握った。彼女の手は、驚く程に冷え込んでいた。自分の手の温もりと相対するかのように、互いの温度同士が相殺する。

「え、ああ、よろしく……各務……さん？」

「さん、はいらないよ。ふふん、各務でいい」

「……ああ。じゃあ、各務」

「カガミン、でもいいぞ」

「それは遠慮しとく」

各務はふふふ、と愉快そうに笑い、真黍は億劫そうに戸惑いながら苦笑した。

「……………なあ、いつまで立たない気なんだ」

互いに握手を交わしたままの体勢がしばし続き、真黍は痺れを切らして各務に問う。

「おんぶ」

「は？」

幻聴でもなければ、今とんでもなく面倒極まりない発言が聞こえた気がしたが。

「だから、おんぶだって。真黍君、君って奴はヒトに電撃を喰らわ

せといて、黙って歩けとか言わないよねえ？ さあさあ、おんぶだよ、おーんーぶー」

おーんーぶ、おーんーぶ、と手拍子まで加えて、各務は地べた上でじたばたと、駄々を捏ね始めた。

「……………うがあっ」

ヤケクソ気味に、真黍は頭を抱えて夜闇の月に吼えた。俺の人生はどこへ向かおうとしている、明日はどっちだ、やっぱ黙って逃げればよかったか、と早くも後悔の念が襲い掛かった。

「おーんーぶー」

各務は変わらずじたばたを止めない。

そして、現在に至る。

003 (後書き)

一ヶ月ぶりの更新。もうこっからは月一ぐらいで進めることに決めます。

三人称だけだとやっぱり難しく感じる。

語彙が圧倒的に少ない作者の弱点。

作者のもう一つの作品の「魔王」の方はおかげさまでナカナカの人氣をいただきました（作者は少し調子にのってます）。

こちらの「うそいか」もあわよくば軌道に乗って欲しいなあーと望望望の極みであります。

では、また来月。

「やあやあ真黍^{まさび}くん！ この日この時この場所で私達が出会えたのが神の采配なのだとしたら私はその神に再拝を送らねばならないのだがそんなことはさておき気分はどうだい私はとってもハッピーだよ何せこうして君に会えたのだからそれ以上の私にとっての至福がありえると思うのかい？ ああそうそうそう言えば私は昼食を君と共にしたいのだが隣に座ってもいいかな？」

「お前は最後の台詞だけを言う為に、いったい何行使う気だ」

それから乃^の婀娜、あとせめて読点だけは打ってくれ。

いきなり過ぎて誰もついていけない。

話の序盤から飛ばし過ぎである。

「あはははは、すまないね。こんな、感じ、で、いいのかい？」

「ああ、頼むよ」

まったく、と真黍は嘆息する。

ふん、ふふん、と乃婀娜は機嫌良さそうに真黍の隣に座る。その手には薄布に包まれた二段重ねのコンパクトな弁当箱。それに対して真黍は購買で買った菓子パンと、唯一の持参は水筒に詰めた熱い珈琲だけだった。

二人が並んで座っている場所は屋上。

人気のない、静かなスポットである。

風はやや強いが、昼食をとる分には何ら支障はない。

真新しい色のフェンスが、今日も他の錆びたフェンスとの格の違いを見せつけている。

「さあ、真黍くん。今日はきみの為に腕によりをかけさせて作った

ものばかりだ。好きなものを食べてくれ」

「それ、お前の弁当だろ。しかもなんだ、腕によりをかけさせてというのは」

「ふふん、昼食なら昼休みになる前にもう私は済ましている」

「後半の問いには答えてないぞ」

「……むう、確かに、これは私が作ったものではない。家政婦の紗枝子さんが朝早くにこしらえてくれたものだがしー！ この弁当のフィニッシュには真黍くんをこよなく愛する私の気持ちが仕込まれているのだから、もーまーんたーいだよ」

「んまあ、何でもいいけどさ」

ここで今更だが、真黍の隣に居座る彼女————現上乃姍^{うつがみのあ}についてのプロフィール及び考察。

無駄に饒舌。男のような散切りショートカット。何かとボーイッシュ。危険思考の持ち主。峰条真黍という自分のことを好いているらしい。よって、頭がおかしいとは思えない。そして実際に頭がおかしい。授業には自分と同じくあまり出席していない。しかし成績は常にトップの辺りをふわふわとふらついている。頭はすこぶる良いらしい。

『現上財団』^{うつつがみざいだん}。

という、この学園のパトロンたる組織の縁者。加えて『現上財団』そのものも、かの有名な『後三家』たる『覇ヶ峰』^{はがみね}の分家であり、その権力は絶対。なのであまり学園側もこの少女に関して干渉してこない。というか無干渉を決め込んでいる。

いつぞや前に彼女が学園の生徒男女含め八人をナイフでめった刺しにした事件があるのだが、そんな殺傷沙汰を起こした際にも、彼女には何の処分も処罰も下ることはなかった。

というか事件そのものが、揉み消された。

無かった事にされた。

そして真黍本人も、その現場に居合わせていたのだが、

『真黍くんの悪口を言う奴は、許せなかったんだよ』

と、彼女は返り血を浴びたままの姿で、真黍に微笑んでいた。

『論外児』なんてロクでもない称号を持つ真黍としては、自分なんかよりも彼女の方が断然『論外』なのではないかと思わないでもないのだが、その危険人物たる乃姢を平気で飼い慣らしている峰条真黍というのが、この学園での通説となっており、真の危険対象はその猛獣の飼い主たる真黍であるというのが共通認識になっている始末なのである。

まったくもっていい迷惑である。

「ん……んんん？」

「な、何だよ」

乃姢が、ずいっとこちらに顔を近づけてきた。くんすかくんすかと鼻腔を広げて、唸っている。

「真黍くん、なんだか女の臭いがするね？」

「っ」

ちびちび飲んでいた珈琲を危うく吹くところだった。でもって、嫌な汗が浮かぶ。

目敏い、というか鼻敏いというか。

犬か、お前は。

「ふんふん、恐らくまた例の後輩くんのかな？ それとも、あの真^ま葛原^{がはら}の奴のかな？ どちらにしても、あまり私に隠れて浮気は良くないよ？ 真黍くん。マナとカナを間違えるくらい、良くない」

「浮気って……」

いつから俺とお前は恋仲になったというのだろう。

あと比喻が分かりにくい。それってどっちでもよくね？

真黍はそれらの言葉を飲み込んで、ボロが出ぬよう努めて言い繕った。

「お前の嗅覚のすごさは解ったから、落ち着けよ。世界の半分は女なんだから、電車に乗った時にでも臭いが移ったのかもしれないんだろ？ そう一々変な嫌疑をかけられるのは、正直、うんざりだよ」
乃姢は、はっと息を呑んだように慌てて、

「あ、わわわ、悪かった。そう怒らないでくれたまえよ、真黍くん。私は君を信じているよ。疑うようなことを言って、気を悪くしたのなら謝るよ。何なら気が済むまで私を踏んでくれたって構わない。いや、むしろすすんで踏んでくれたまえ！」

乃姍が何故か息を荒くして、いきなり変な方向に目覚めてしまったので、事態の收拾には幾ばくかの時間を有したが、真黍は密かにほっとした気持ちだった。

まさか、な。

自分を殺そうとした自称殺人鬼を、まさか自宅に泊めているだなんて、とても言えるはずもない。



「おかえりーフカエリーモハメドアリー」

「下らんツマランさっさと出てけ」

真黍が自宅のドアを潜ると、勝手に自分のベッドで寝転がりながらテレビを悠々気ままに観賞なされている殺人鬼に、鞆を投げつける。

「ぎゃい！」

放り投げた鞆はちょうど彼女の脛に当たったらしく、殺人鬼――

――各務奈直は膝を抱えて痛みに悶えていた。

「鬼か！ 君は！」

「自称殺人鬼が何をほざく」

あと出てけ、と真黍は付け足した。

ブレザーを脱ぎ、ネクタイをしゅるりと解く。

「狂ってる奴が、自分は狂っていない、って言うのと同じ理屈さ」

くるん、とひとのベッドの上で毛布に包まって、何かの蛹のように成り果てた各務。顔だけを亀のように覗かせて、そう言っている。

「何をしている」

「空気サナギ」

「うるせえ！」

最初の台詞で嫌な予感のはしてたけどさあ！

真黍は頭を抱えつつ、嘆息し、さっそくも後悔の渦に呑み込まれていた。

何で。

何故に。

どうして。

こんな正体不明で意味不明な不審者を、自分の部屋に招き入れてしまったのか。

あの後、仕方なく各務をおぶって（途中で嫌気がさしたのでタクシーを使ってしまった）住まいに帰還した。自分の住居であるアパート——といってもそんな洒落たものでもなく、築二十年以上のバブル期に今の大家が酔狂で建ててしまったという物件で、あちこちに塗装が剥げており、元は乳白色だったらしいが、年月がそれをセピア色に変えてしまい、加えて、壁の側面には甲子園球場みたいに蔦がびっしりと這っている。ボロイ、というよりは、不気味といたった方がしっくりくる。そんな大家が酔狂で建てたアパートに住み込む酔狂はいないだろうが、いかんせん、家賃のあまりの安さから今のところはどの部屋も住居者で一応は埋まっているらしい。かくして真黍もその一人だった。

余談であるが、真黍はもうかれこれここには二年以上も住んでいる訳だが、実のところ真黍がこのアパートで知っている住人は二人しかない。大家と、隣人の神支那^{かみしなちいほ}千五百だけである。その他の住人とは会ったことも見かけたこともなかった。

けっこう謎だな、このアパート……。

と、自身のねぐらのミステリー具合を心配している場合ではなく、真黍は現状の深刻さを身に染みて感じていた。ああ、あの時、何故か諦観観念を催してしまったのか。過去の自分を殴りたい。

そんな風に、さっそくもって後悔の念が沸々と湧いてくる模様の真黍は、ぐっと拳を固めてから、脱力したように肩を下げ、息を吐いた。

「なあ、正直アンタいつまでここに居座るつもりだよ」

「さーてね」

「……………」

「そんなあからさまに絶望的な顔をしないでくれよ。気が向いたら、その内ふらっと出てくって」

「ふら、っとね」

「そう。ふらっと」

ひらひらと寝転がりながら手首を振る各務に、真黍は諦観の意を表明して、台所に立ち、ポットをガスコンロにかける。

「珈琲かい？ だったら僕はブラックで」

目敏く要求された各務の注文を、真黍は無言で承諾した。

峰条真黍ほうじょうまきびについてあまり知られていないこと、その一。

ずばり、実はけっこう家庭的な面があることである。

一応、一人暮らしはもう実質的には三年以上のキャリアがある為、一通りの家事や料理といったスキルはある程度取得していた。おまけに少し主婦臭い一面も覗かせ、タイムセールスの広告を逐一チェックする真黍の目は、ある種の狡猾さと寧猛さを兼ね備えた、鷹のような威厳を放つ時もあった。

「っと」

今日は休日だが、真黍が休日の午前中を惰眠で費やすような愚かなことはしない。何故なら、朝からやることは山ほどあるからだ。ゴミ出しや洗濯といった家事もそうだが、真黍が資金の収入源としている『情報屋』としての職務もあるのだ。複数所持している携帯電話に受信されているメールの確認から始まり、その中身は、依頼の内容や、他の業者に頼んだ情報の引き渡しなどもあるので、逐一確認をとらなければこちらが大損になってしまう恐れがあった。

部屋の扉を開け、ゴミの詰まった袋を掴み、敷地の外のゴミ捨て場まで行くこうとして、真黍はそのまま敷地を出ずに隣の部屋の前に移動し、拳を振り上げ、

「ち、い、ほ、さーんっ」

ドン、ドン、ドン、と呼鈴が無いので、代わりに手動で隣人を呼ぶ。

「……………」

反応はない。

再度借金取りの如く叩いてみたが同じだった。

もう一度叩こうと思ったが、それ以上の横暴を抑制するかのよう
に扉は怠惰にゆっくりと開かれた。

「やめてよおマキくん……………死んぢやう」

ぬらーと明らか顔色の悪い女がドアに寄りかかる形で出てきた。
酒臭い。

「こんにちは、千五百^{ちいほ}さん」

「こんにちは、マキくん……………って今それどころじゃあ……………うぷっ」

酒臭さを振りまきながら顔を土気色に変えて、神支^{かみしなちいほ}那千五百は手
で口を押さえた。今この場で胃の中身を放出してもおかしくはない。
というか大いに困るので真黍はすすす、と安全圏まで退却した。

「おうえ……………はあ、はあっ……………で、何か用？」

「千五百さん、前に布団が余ってるとか言ってますませんでした？」

「ああ、うん。あるよ」

昨夜、『いい加減床に寝るのは勘弁してよー』とひよんなことか
ら同居人となった各務^{かがみ}奈直^{ななお}から、居候の分際で厚かましくも不平を
訴えられたのである。確かに、これ以上この殺人鬼を床に転がして
おくのは床があまりにカワイソウであると思い立ち、こうして隣人
を頼った次第である。

「それ、しばらく貸してもらえませんか？」

「うん、いいけど。どしたの？」

「えっと、まあ……………」

自称殺人鬼がしばらく自分の部屋に寝泊りすることになったので、
とは口が裂けるチーズになっても到底言えることではなかったので、
とりあえずは、

「知り合いが、突然やって来まして」

「ふうん。きつと女の子だー」

「ち、違いますよ」

確かに性別は女っぽいけど、何だこの勘のよさは。

このように、真黍は時折彼女のことが恐ろしくなる。

「えーと、結局貸してもらってるんですか？」

「うんいいよー。勝手にもってって」

「はい？」

「確か、一段目に入ってると思うからー」

どうやら本当に勝手に持っていくことらしい。セルフサービスである。

「では、お邪魔しますよっと」

「はーい、いらっさーい」

千五百はフラフラと真黍を先導していく。途中、足元には紙屑、カップ麺の亡骸、コンビニ弁当の残骸。絞り尽くされたビール缶。雑誌類。脱ぎ散らかした衣類、下着……ブラジャー……痛っ。洗濯バサミ踏んだ。などなどが短い廊下を彩るが如く、無造作かつ無秩序に展示されている。真黍はそれらを視界に入れた瞬間、ムズムズぞわぞわーと何とも耐え難い衝動に駆られたが、何とか平静を保った。けれど、彼女の居間に入った刹那、もう駄目だった。

「千五百さん……」

「なにい？」

真はわなわなと震える拳を固め、言った。

「俺に、少し時間をください」



真黍を部長に置く新聞部の部室の雑多さは他に類を見ないものであるが、それはただ雑多に物が多いというだけで、そこには明らかな秩序と、依然とした整理整頓がなされていて、どこに何があるか

把握出来ている状態にある。何も散かっているわけではないのだ。それは真黍の生来からの性質の影響な訳なのであるが、だからといって真黍の性格までキチンとしているかと訊かれれば、いかんせん言い難い。そういう事例がままあるので、人は表面だけで中身までは窺えない。クラスの人気者が必ずしも善人とは限らないし、冷酷な殺し屋が必ずしも悪人とは限らない。つまりはそういうことである。

うーんうーん、と掃除機をかけながら、はあー、と真黍は嘆息した。

結局、要するに真黍が真に言いたいことというのは、

「マキくうーんみずうー」

美人は内面までそれに比例すると思ったたら大間違いだということ。むしろこの人に限っては反比例だ。

掃除機の電源を切り、後の細々としたゴミやら何やらをまとめ、自分の分と一緒にゴミ捨て場に置いてくれば、いったんは清掃終了である。

「まったくしばらく異臭してこないから安心してましたけど、本当油断ならないですねえっ」

真はぶつぶつと文句を垂れながらも言われた通りに千五百に水を運ぶ。

「むふふふ、マキくん、いい家政夫さんになるわー」

「あんま嬉しくないです」

「あたし専用の」

「さらに嬉しくない!」

真黍はもう関わりたくないとかばかりにさっさと布団を持って千五百の部屋を出ようとしたら、千五百の「またねー」という能天気な声が追いかけてきたが、それには荒っぽく閉めたドアの音で応えておいた。



午前中に粗方の雑務を終えた真黍は、昼近くになってようやく目覚めた各務に、ハムエッグを焼き、トーストを用意してから、財布を持って部屋を出た。各務に、お出かけかい？ と尋ねられ、いつてきます、と誤魔化すように答えた。さして何の反応も示さなかった各務は、皿の上のトーストをもそもそと齧りながら、いつてらーと手を振っていた。

真黍は徒歩十分とかからない近場の駅に着き、定期券で改札を通って、ホームに降り立つ。携帯を弄りながら電車を待っていると、突拍子もなしに肩を叩かれた。

「えいつ」

しかも、振り向き様の人差し指によるつつかえ棒が、右頬にめり込んだ。

「……………どういうつもりだ」

小学生か。いや、そんな小学生じみた手にまんまと引っ掛かった自分も自分であるのだが。

「いやあ、奇遇ですね、先輩」

自身のことを『先輩』だなんて呼称で呼ぶ奴は、真黍が知っている限り一人しかいない。

「とんでもなく奇遇だな、キク」

コノヤロウ…………と真黍は引き攣った笑みを返した。

我が『新聞部』の忠実なる後輩、掛井菊子は、にこにこ破顔した。

今日の菊子はいつもの何の面白みも無い学園指定のの制服ではなく、カジュアルな私服だった。当たり前だ、今日学校は無いし、それにここは学校ではない。私服であることに、不自然さはまったく

もつての皆無である。

いつもは結ってある髪を下ろし、白いワンピースとそれに合わせたかのような白いシヨール。下は穿いていないのかと一瞬ギョツとしたが、チラリとワンピースの裾からホットパンツが覗いた。可愛らしい小振りのシヨルダーバックを肩から下げていた。

対する真黍は半袖のプリントシャツにチェックの上着。極めつけの何の加工もしていないジーンズ。ザツツユニクロ。上下会わせて四千円切っています。

「先輩、これからどちらへ？」

「菊子こそ、これから何かあるのでは？」

洒落た暖色系のブーツの恩恵か菊子の視線がいつもより高かった。「あたしの方はもう終わりました。だから、適当に少しブラブラしたから帰ろうかなー」と思い、こうしてばったり先輩と駅のホームに出会ったわけです」

目線が同列であることが嬉しいのか、あまりに心もとない胸を張って、現在の状況を嬉々として分かりやすくまとめた菊子。

「む。今なんか失礼な視線を感じました」

「気のせい気のせい」

「で、先輩は？」

「ん、まあ、ちょっと人に会いに」

「……彼女ですか？」

「何故そうなる……」

歯切れ悪く口をつく真黍を、菊子是不審げに見つめた。

「……何だよ、その目は。別に疚しいことなんてねえよ」

「どうですかね。先輩は嘔吐きですから」

家政婦キャラだったり、嘔吐きキャラだったり、キャラ設定が固定されていないなあ。

誰のせいだ！

「ホント、小用ってところだよ」

別にトイレってわけではないが。

「じゃあ、あたしも付いてってもいいですか」
「は？」

菊子の提案に間の抜けた声を出してしまった真黍はそのまま二、三歩後ろに下がる。

「だから、何故そうなるんだ」

「暇なんですよ、あたし」

「理由になってない」

「じゃあ先輩こそ、何でそう拒むんですか？」

今度は菊子がずいっと真に迫るように前に出た。「やっぱりなんか疚しいところがあるんじゃない……」

「だから無いっての」

「だったらいいじゃないすか」

菊子がずんずんと迫ってきたが、それに呼応するかのように真は後ろに下がる。

「お……………」

ホームの端まで追い詰められ、黄色い線の外側に出てしまった。

『黄色い線の内側までお下がりください』とお決まりの駅のアナウンスが聞こえた。

「いいですよね？」

「……………ああ」

有無を言わせない、ほぼ命令に近い感じで菊子の言葉に真は頷いてしまった。

あれ？ 俺ってまさか押しに弱い？

それは由々しき事実である。

「……………でも、まあ」

いいか別に。

さして問題があるものでもなし。

問題があるのは、むしろ自分の方だし。

「さ、連れてってください」

菊子は強気な姿勢を崩さないまま、真黍の肩を叩いた。

「……………」

菊子がこうやって強気に出る時は、自分が正しいと確信している場合か、何か無性にいいことがあったりした時だ。察するに多分後者だ。人のプライベートにわざわざ無理矢理同行してくる理由が「暇なんですよ、私」という言葉に正当性など微塵も感じられない。よって、後者である可能性が高いと思われる。

「キク、何かいいこともあった？」

「こうして先輩に会えたことでしょうか」

はあ。リップサービスも口ずさめるほどに上機嫌らしい。

「けっこうけっこう」

どうぞ、好きにどこまでもついてくるがいい。

きっかり十分間、電車で揺られ、降りた駅の北口でバスに乗る。バスでは二十分ほどドナドナされ、その間、菊子は大人しく真黍の隣にぴったりとくっついていた。どこかウキウキと顔を綻ばせていたのは気のせいだろうか。

果たして真黍と菊子が着いた場所は、病院だった。

隔離されたというか、隔絶されたと言った方が正しいくらいの郊外に位置する、広い敷地にぐるりと周りを雑木林に囲まれ、裏手にはシロナガスクジラが三頭ほど納まりそうな巨大な池があった。

一言で表すなら、自然で溢れていた。

思わず咽かえりそうなほどである。

だが病院自体は、清潔かつ最新の設備を兼ね備えており、周りの自然とは不自然じゃないくらいに見事な調律を保っていて、そして何より都心の病院も顔負けの大きさを有していた。四階建ての二つの病棟が、中央棟を挟むように建っている。駐車場も十分にスペースがあり、中庭なんかも完備されていた。

「菊、行くぞ」

「は、はい」

長い中庭の道程を経て、入り口の自動ドアに辿り着く。入ると、目に痛くなるような白一色で統一された病院内のエントランス。正面の受付に行き、顔見知りの看護師と挨拶を済まし、面会カードにサインしていたところで、

「おやあ、峰条くん。こんにちは」

玄関付近のラウンジにある長椅子で、大型テレビを視聴していた

老人が立ち上がり、車椅子を押してやって来るのが見えた。

「こんにちは。お元氣そうで——茜ちゃんもこんにちは」

「はは、おかげさまで……おや、そちらは？」

「後輩の——」

「掛井菊子です。どうも」

真黍が言おうとした先を菊子が続けた。

「そうですか。いやいや初めまして。ほら、茜もご挨拶なさい」

老人は車椅子の方を向き言ったが、反応は無い。

「……………ははは。すいません、とても人見知りなものですから。それに母親が出ていってからとんと喋らなくなりまして、どうかお気を悪くなさらず」

「い、いえ……そんな」

「あ、どうも診察の時間ですのでこれで」

ほら、行こうか茜、と老人は会釈しながら車椅子を押して去っていった。

「……………ねえ、先輩」

菊子はい、と真黍の袖を掴んだ。真は菊子は何を言いたいのかわかっていた。

「どうして、先輩もあの人も……誰もいない車椅子に話しかけていたんですか？」

「どうしてだと思う？」

真は逆に訊き返してみた。

「え、えと」

菊子は困ったように視線を泳がした。真黍は意地悪し過ぎたかな、と苦笑して、老人の去っていった背中を見送った。

「キクも大体勘付いてると思うけど、ここは一般の病院じゃなくて、サナトリウムなんだ。それも、普通のサナトリウムとは少し理念が変わってるんだけど。まあ、さっきのお爺さんも……実は……まあこれもあまり他人に話しちゃいけないんだけど。あの人、何年も前に自分の娘と孫を殺されているんだ、娘の夫にね。それも目の前

で。だから、あの人は……いや、ここのほとんどの患者さん達は皆、自分に都合のいい夢を見ているんだ」

「夢、ですか？」

「そう」

都合のいい妄想を信じ、心の傷が癒えるまで、ここでの生活を送る。ここは、傷つき、壊れ、欠けて、失われた者達の集う終着駅。ここ『医療法人壊道サナトリウム^{かいどう}』は、他のサナトリウムと比べて、精神疾患の患者が多く集中し、その分野においても数多くの研究が重ねられている場所であった。

「じゃ、じゃあ、先輩は誰かのお見舞いにここへ？」

「いや……」

菊子は得心いった風な口調で言ったが、真黍は静かに首を振って、菊子の言葉を否定した。

「俺も、ここの患者なんだよ」



菊子には一階のラウンジで待ってもらうことにした。菊子も空気を察したのか、聞き分けよく返事をして了承した。

「……………んー？」

「どうした、キク？」

「あの、なんかずっと見られ……いえ、何でもないです。きっと、気のせいです」

「ふうん？　ならいいけど」

まだ少し不思議がっている菊子をラウンジに待たせ、リノリウムの長い廊下を進む。しばらく歩いて、とある診察室の前で立ち止ま

った。一度軽くノックしてからスライド式の扉を開ける。

真黍が診察室に入ると、花畑に放り込まれたような芳香が、鼻腔を搔き回した。

「やあ、いらっしやい」

部屋中に木霊するように、その艶かしい声は真黍の耳に残響した。

「こんにちは。円居先生」

白衣を着た若い女性が、真黍に笑いかけた。

真黍の担当医でもある円居円は、黒縁の眼鏡をかけ直しながら、柔和に微笑みつつも、キャスターをくるりと回転させてこちらに向き直る。その際に軽くウェーブのかかったアッシュベージュの長髪が揺れた。

年の頃は、叔母である鳴神千曲なるかみちくまとそう大して変わらない。二十代後半に差し掛かった、妙齡の綺麗な女性であった。あくまで人の良さそうな顔をしているが、眼鏡を掛けた瞳の奥には、深淵を覗くような暗い闇が静かに横たわっているようだった。

「また、匂い変えました？」

スツールに腰掛けながら真黍は言った。

「あ、わかる？ 前のバラはどぎつくてね、ポピーにしてみたんだよ」

どうかな、と親に褒めて貰おうとする子供のような感じで、円居は上目遣いを寄越した。

「アロマなんてインチキですよ」

「あー、アロマをバカにしちゃいけないよ。もう科学的にもちゃんと証明されてるし、古くは古代エジプト時代からあったんだってんだから」

それが嫌なら箱庭でも創ってみるかい？ と、今度は逆に親が子供を嗜めるたしなような口調で人差し指を立てる円居。真黍は、こーさんですよ、と肩を竦めた。

「ふふっ。じゃあ、さっそく始めようか」

そう言って、円居はカルテを手に取り、真黍にいくつかの質問を

浴びせる。

ここ一週間の内に夢は見たか。見た回数は。見たならその夢の内容は。

「三回ほど見ました。もうよくは覚えてないんですけど、確か昨日に見たのは、真っ赤な林檎に黒い蛇を模した馬鹿でかいナイフで突進していく夢でした」

「ふざけないで」

「いえ、真面目です」

「そう？　なら、若さのせいにしてあげろ」

円居はカルカルカルカル、とカルテの板にシャープペンシルを走らせた。

「じゃあ次の質問。最近猫を投げたことは？」

「ふざけないでください」

自分はノイローゼか。

「いえ、真面目に」

「……投げてません」

「なら結構」

ふむふむ、と円居はしきり頷きながら、カルテに何かしらを記入していった。

質問の応酬は続く。

この頃よく思い出す昔の記憶は。その頻度は。思い返してみても、どんな気持ちになったか。朝食は食べているか。差し障りのない程度で、誰かとの会話のやりとりを思い出せるか。近頃やたらと肩が凝るのだけれど、君はどうか。というか私って色気に欠けるのだろうか。ん？　そんなことはない？　ああ、ありがと。そう言えば君は目玉焼きには醤油か、ソースか。なるほど、ケチャップ派か。私はマヨネーズ派だ。よく同僚に奇異の目を向けられるよ。

「そんなことよりも、うんこは元気か？」

「……………」

「悪かった。言い方を訂正しよう。毎朝元気な糞は出るか？」

「健常です」

この人、至って真剣に訊いてくるから反応に困る。

などと、精神的なことから、日常のプライベートなことまで、しばらくそんな他愛のない内容の問答を繰り返して、診察は終了した。

「先生、これで何度目かになる質問か分かりませんが、本当にさっきまでの診察は、料金の内に入らないんですか？」

「私もこれで何度目かになる応答になるか知らないけど、いいんだよ、別に。これは私が独断専行の得手勝手にやっていることで、私自信が興味本位で君を診察しているだけに過ぎない。だから、心配しないでいい。君は心が壊れているわけでも、精神を病んでいるわけでもない。ただ、私が君のことを知りたいだけなんだよ。それに、君のことを知れば、君の『妹さん』のことだって、おのずと知れてくるんだ。小麦ちゃんこむぎちゃんは、今でもあの調子だしね。よって、兄である真黍くんが、代わりに私の診察を受けることによって、小麦ちゃんの治療の手助けになるわけさ。つまり、君の診察は小麦ちゃんの診察でもあるわけだ」

円居は、眼鏡を縁を中指でくいつと持ち上げて、滔々と語った。

故に、君が心配することは何もない、と。

「なら、いいんです」

真黍はほっとするように小さく呟いた。

「……時間を掛けさせて悪かったね。ほら、早く小麦ちゃんの病室に行ってやんな」

はい、とだけ頷いた真黍は、最後に一札を残して、診察室を立ち去った。

円居はまた何かカルテに書き込みをしながら、真黍に手を振っていた。

診察室からの去り際、真黍には聞こえないほどの声量で、円居はどこか諦観したように、それ故に真黍を心配するかのようにな、

「幻に囚われてはいけないよ、真黍くん。それから、夢に惑わされ

「でもない」

それはむしろ自分に言い聞かせるように、自嘲が込められた呟きだった。

「僕のように、ね」

006 (後書き)

キャラで一番悩むのはやっぱり名づけ。

真黍Ⅱとうもろこし

小麦Ⅱそのまま小麦

穀物繋がり。ちなみに苗字の峰条Ⅱ豊穰ほうじょうから。

掛井菊子Ⅱカ行の名前がなんか欲しかった。かけいきくこⅡかきく
けこ、みたいな？

現上乃姁Ⅱ感性の赴くまま。深い意味はない。

円居円Ⅱなんとなく。上に同じ。

神支那かみしなちいほ千五百

神支那Ⅱ実際にある苗字。千五百Ⅱ数字の名前ってなんか好き。

関係ないけど、千五百には九十九つくもという妹と、八十八やそやという弟がいる、らしい。

『峰条小麦』とだけ銘打たれている病室の扉に、真黍は一度ノックの前置きをしてから、ゆっくりとドアを横にスライドさせた。

「小麦、入るよ」

一步踏み出せば、世界が変わったのだと感じた。廊下に立っていた空間と、この個室の病室の空間は、明らかに何かが違うと。

殺風景なくらいに何もない部屋。窓際にあるベッドと、パイプ椅子が一つずつあるだけで、あと強いて言うなら、添え付けの台にリナリアの花が花瓶に活けられていた。多分、円居先生の趣味だな、と真黍は思った。

ベッドに近寄り、パイプ椅子に腰を下ろす。

「元気か、小麦」

真黍は、ベッドの上で上体を起こして窓の方を見つめている少女に、話しかける。刈り上げたおかつぱ頭に、眠たそうな瞳で、一心に窓の外の風景を眺めていた。表情は抜け落ちたように無く、虹彩の色もどんよりと濁っているように見えた。肌は病的に白く、余分な肉付きのない細い身体に、潔白な病院服を着込み、身体は常に一定の清潔さを保っている。

「……………」

少女からの反応は、ない。

それでも真黍は、絶えず話しかけた。

「今日は、後輩に途中で捕まっちゃってさ、まいったよ。ついていきたい、なんて言うからさ。菊子、っていうんだけど、面倒臭いからキクって俺は呼んでる。妙に明るい奴だけど、その分口が減らない奴でさ、たまに扱いが分からなくなるよ」

「……………」

相変わらず、目の前の少女は無反応だった。だが真黍はめげることもなく、ひたすらに話し続けた。学校のこと。身の回りのこと。自分のこと。天敵のこと。今朝知った、近所でひそかに起きていた撲殺事件のこと。世界情勢のこと。つまらないこと。面白いと思っただこと。マナとカナの違いのこと。ひょんなことから家に居座らせてしまった殺人鬼のこと。どうでもいいこと。どうでもよくないこと。色々な、こと。

一時間ばかり口を動かし続けていたせい、少々顎と舌が疲れてしまった。真黍は入室してきた時とまったく姿勢の変わらない妹を目をやる。小麦はただじっと窓の外に視線を固定したままだった。籠の鳥が、空に憧れを持つように、小麦は広がる青空を見据えていたままだった。

真黍は妹の手を握る。それでも小麦は意思のない人形のように微動だせず、黙止を貫いていた。真黍は一つ息を吐くと、諦めたように立ち上がった。円居からは、例え反応を見せなくとも、声を掛け続けてやってくれと言われていた。動きや変化がなくとも、彼女はちゃんと君の言葉に耳を澄ましていると。だが、今日のところはこのくらいにしておこう、と真黍は退出の意を小麦に伝えた。小麦自身にも、あまり無理をさせ過ぎてはいけない。真黍は最後に軽く妹の頭を撫でると、部屋を立ち去ろうとした。

出入り口の扉に手を掛けたところで、

「兄さん」

真黍ははっとして振り返った。一ヶ月ぶりに聞く、妹の声。二週間前に訪れた際には、聞けなかった、ちゃんとした単語としての、小麦の発声。

「気をつけて」

小麦は依然として窓の方向へ顔を向けながら、抑揚のない声音で言った。だから、本当に小麦自身が喋っているのか真黍には分からなかった。

「選択の余地はまだある。あなたは岐路に差し掛かっただけ。進む道を間違えないで。帰る道も誤らないで」

機械じみた動きで、小麦は非常にのんびりした動きで首を百八十度回転させた。

「だから気をつけて。兄さん」

久しぶりに、妹と目が合った。真黍は金縛りにあったように、一切の動作を封じられ、小麦の発する声だけに全神経を注いでいた。

――気をつけて。

いったい何を？

――選択の余地はまだある。

どうということだ？

小麦は、たまにこんな風に謎めいた言葉を呟くことがあった。警告なのか忠告なのか。神のお告げなのか予言なのか。何一つ理解には及ばなかったが、真黍はそんな妹の言葉に何かしらの意味があると知っていた。

気のせいかもしれないが、小麦は一瞬だけ微笑んだように見えた。しかし、次の瞬きの後では、目蓋を閉じ、意識が遠のいていくかのように、ぽすんと小さな音を立てて、ベッドに身を沈めた。まるで今の発言にエネルギーを全て使い果たしてしまったかのように、小麦は微かな寝息を響かせていた。

真黍はようやく硬直から立ち直り、小麦のベッドへと近づいて、布団を肩までかけなおしてやった。

「おやすみ」

一言だけ、そう言い残すと、真黍は小麦の病室から引き下がった。



「……ふうーむ」

私こと円居円は『峰条真黍』と書かれたカルテと、貼り付けられた彼の写真を見比べ、消化不良を起こしたライオンのような唸りをあげた。過去の診察の過程も見返してみても、次回の診察はどうしようかなーと考えを巡らす。やっぱり箱庭でも創らせてみようかなーと計画してみたり。きっと面白い作品に仕上がるに違いないだろう。

「う！ うなあああー……」

無意識に手を伸ばした珈琲の苦さにも、一頻り唸り声と謎の踊りを披露してみたり。角砂糖は一個。ミルクは二杯。これ私の鉄則。なのに入れ忘れていたとは、私の不覚。舌がムズムズするのを堪えながら、せっせと角砂糖を溺れさせ、ミルクを二杯調合させる。そして飲む。ほーら、デリシヤス。

「さっきの恥ずかしいリアクションを誰かに見られていたら、それは私だけの羞恥」

なーんて嘯いていたら、背後の扉が開いたもんで、まことにビツクリした。

今日の分の診察が終わった私は、真黍くんが戻ってきたのかなあ
と思い、マグカップを持ったまま振り返ってみて、

「……………」

ガシャン、とマグが手元から滑り落ち、床に転がった。マグ自体は砕けはしなかったが、中身の褐色の液体は盛大に辺りに飛び散った。私の踝にもいくらか跳ねた。キャスターから立ち上がり、よろよろと二、三步後ろに下がる。驚愕に満ちているであろう私の顔を見て、相対したその人物は、口元が裂けたような笑顔で、言った。

「あはっ。やっぱり噂は本当だったんですね」

久方ぶりです、百鬼^{なぎり}さん。

と、いつか自分が名乗っていた名前で、彼女は私を呼んだ。

「各務^{かがみ}、奈直……………」

私は、いつか後輩だった彼女の名を呟いた。



「キク」

真黍が呼ぶと、菊子はラウンジの長椅子から立ち上がって、嬉しそうに近寄ってくる。主人の帰りを待つ子犬みたいだと真黍は思った。

「悪かったな、時間とらせて」

「いえ、あまりに暇だったので、そこら辺一回り散歩してきましたですよ。撮り甲斐のある被写体があちこちにあったので、不自由はしなかったです」

これ見よがしに、持っていた一丸レフの自慢するように掲げた。

「何故、今それを持っている」

「先輩がいつでも常備しておけて言ったらからじゃないですか」

「そうだっけ」

「そうですよ」

そういえばそんな気がしないでもない。菊子は一通り見せ付けてから、レフをケース入れて、シオルダーバックの中にしまった。確かに、ここら一帯は自然に満ち溢れているというか、むしろ自然しかないような所なので、被写体には困らなかっただろう。撮影係として、去年から菊子にカメラを持たせていたのだが、いつの間にか本人の趣味へと昇華してしまったらしいのである。

それじゃあ帰るか、と真黍は菊子と連れ立って壊道サナトリウムかいどうを後にした。ほらな、ついてきたって何も面白くなかっただろう？と諭すように真黍は菊子に言った。

「いやいや。休日に先輩と過ごせるなんて、あたしは果報者です」

現上先輩に殺されちゃうかも、と菊子は悪戯っぽく笑った。

「……………いやいや、マジで殺されるなよ？」

リップサービスも大概にしとけ。乃姍のあなら本気でお前を殺しかねん。真黍は乃姍の嫉妬に狂った瞳を思い出して、ぞわっと寒気がした。

「その時は、先輩が庇ってください」

菊子は上目遣いで、意味ありげな視線を送る。

「出来る範囲で、な」

勢い余って自分まで殺されてしまうかもである。菊子は、頼りにしてますよ、と無邪気に目を細めた。しかし不意に表情を曇らして、
「あの、先輩……………さっきあたし、あそこで変な……………」

「変な？」

真黍が歩きながら聞き返すと、菊子は無理矢理作ったような笑顔で、首を横に振り、

「い、いえ……………へ、変な猫を見たんです」

「ふうん」

「変な……………黒い、猫でした」

菊子はそう言い切ったまま、はぐらすよう顔を赤くしながら、はにかんで真黍の歩く先を一人で勝手に走っていった。

「……………なんだ？　いったい？」

それとキク、バス停はそっちじゃない。

そう呼びかけるが、菊子の背中中は、ずんずんと着実に離れていった。

007 (後書き)

円居Ⅱ惑い
そう言えば、ちゃんと彼女の名づけに意味があったことを思い出した駄目作者。

「各務、ど、どうして、君が……」

「ふふっ。さて、どうしてでしょーねえ」

さも可笑しそうにその人物——各務奈直かがみななおは、お上品に口に手を当てて含みのある笑みを零した。

酷く驚愕の淵にいた私は、どうにか平静を取り戻して、まず相手に自分の疑問をぶつけてみる。

「……………九年前を最後に、行方を眩ませていたお前が、何故ここにいる？」

警察のブラックリストの筆頭に、でかでかと名前があるような、《殺人鬼》が、今頃になって、姿を現した。私は理解が追いつかない。

「九年前、か。もう、そんなに経つんですね。あの人が、消えてから……」

「ああ……」

各務は、愛おしそうな眼差しで虚空を見据え、過去に謎の消失を迎えた《彼》を思い浮かべているようだった。

「ああ、そうそう、堺崎さかいさんはどうしてるか知ってます？ あの人

——先輩を探しに行くとか言ったまま、それっきりじゃないですか」

堺崎さかい仙女。仙人みたいな、彼女。必ず連れ戻してくるから、と言いつ残していったきり、只今消息不明の真っ最中であった。

「君も、人のこと言えないでしょうが。堺崎ならあの日以来、連絡もなにもついてないよ。各務、君と同じくね」

だが、君のように殺人までは犯してないよ。

と私は付け足して、かつての後輩を見つめた。

「一つの街につき、一人ずつ。合計十三人を殺害した、あの事件。当時は随分と騒がれたものだけど。各務、君は、いったい何を考えていたんだ」

各務は腰に手を据え、ああ、そのことですか、と至極つまらなそうに呟いて、かったるそうに後ろの壁に寄りかかった。

「別に、単なるアプローチですよ。ああすれば、先輩がきつと僕を止めに来てくれるはずだって、そう思ってたんですけど、失敗でした。先輩は、約束を見事に破ってくれました。必ず止めてやる、ってあの時、僕に言ってくれたのに。あーあ、苦い経験です。まったく、『人間失敗』なんかには、失敗されちゃいました」

そのあと、『夜鷹』ナイトホークに目えつけられるわ、『処刑人』パニッシュメントには追われるわ、『空戯一座』うつろぎいちやうだにも殺されかけるわで、もう散々でしたよ、と。

オーバーに肩を竦めて、各務はやれやれ、と言わんばかりに息を吐いた。私は各務が呟いた語群の中に、ふと聞き覚えのあるワードがあることに気づいたが、そのまま黙っておく。あえて掘り下げることもあるまい。

「……そういや、ここって、『壊道』かいどう系列の病院なんですね。『五行機構』ごうぎきこうの一角である『壊道』に勤めていらっしやるなんて、百鬼さんなざりこそどういうつもりなんですか？ ついに自分の身体を研究資料として売っちゃったりでもしたんですか？」

「君には、関係ないことだ」

『五行機構』。

絶対の権力を持ち、絶大な勢力を誇る、古くよりこの国の表裏を牛耳り、海外諸国の根幹にまで多大な影響力を持つとされる三つの家系。『覇ヶ峰』はがみね、『蟲塚』むしづか、『三界院』さんがいん。これを総じて『後三家』ごさんけと称す。だがしかし、『蟲塚』だけに関して言えば、裏社会のみだ

けの存在であり、色々と面倒臭い説明があるのだが、今は関係ないので割愛。

その内、『三界院』には自身を支える五つの分家がある。『朽咲』、『舞泉』、『熾原』、『鏡宮』、そして『壊道』。これら五つの家系を総称して『五行機構』と言われている。

私はその中で、『研究』を第一に専門とした壊道が経営するこの病院で、とある複雑怪奇な事情から、あくせくと労働に身をやつしている。

「へえ？ まあ、確かにそりやそうです。『男』だった百鬼さんが、どうして『女』になっているのか、なーんてことも僕にはいっさら関係ないことです。別に興味もないですしね。今時、性転換なんて珍しくないですし、百鬼さんが……いや、今は円居円でしたっけ？

あなたの性別がどうなろうと知ったこっちゃないです」

各務は開き直ったかのように、相変わらずの可愛げのない調子で喋り、そして不意にまじまじと私の顔を覗き始めた。性格に可愛げは限りなく皆無だが、顔の作りだけは果てしなく可愛いので、何かムカつく。あらやだ、まつ毛長い。おまけに二重だ。まるで少年のようでもある中性的な各務の容姿に、僕——じゃなくて、私は少しドキマギ。

「性転換、というか、顔のパーツとかも全部整形したんですか？
にしては、手術をした痕跡がまったくない。まんま別人じゃないですか、これ。いったいどこで手術したんですか？ やっぱり壊道系列ですか？ 今度紹介してくださいよ」

「や、止めてくれ。これは、そういうんじゃない！」

私は彼女を振り払うように、怒鳴った。三年前の忌まわしい記憶が、脳内に反響する。もう、あれは終わったことだ。無理に思い返す必要はない。

「……ま、いいですけどね」

各務は訝しげにキャスターに座った私を見下ろし、再び後ろの壁に背中を預けた。

「それで、君の用件をそろそろはつきりさせたらどうだ。ここに現れた目的を言え」

「やだなあ、古い後輩がこうして会いに来たってだけですよ。あなたと遠い昔話にでも花を咲かせようかと思ひまして」

「嘘をつけ」

「まあ、嘘なんですけど」

「……………」

本当、可愛げの欠片もない。《彼》に一等心酔していたせいもあるのだが、彼も彼で後輩にはすこぶる甘かったので、それにも原因は大いにある。

「ははは。じゃあ、本音を言っちゃうと、単に偶然通りかかっただけなんです。とある人間を、暇潰しに尾行してみたら、たまたまここに辿り着いたんです。で、いつか聞いたあなたの噂を思い出しましてね、ちょっと顔でも出して、あなたを驚かそうかと」

「とある、人間———?」

私はそこで、はっとして、目の前の各務を凝視した。彼女はニヤリと口元を持ち上げた。

「まさか、真黍くんか……………」

「ビンゴ。大、正、解です」

各務はにこにこ満足そうに、人差し指を立てた。なんだ、ひとしくん人形でも貰えるのか。

「いったい何を考えている、各務。速まった、真似はするなよ」

「速まる? 何のことですか? 僕はやっと見つけたんです。僕の……………僕という目的を、探し当てた」

嫌な予感が、私の脳裏をチラついた。各務の? 彼女自身という名の目的? 分らない。だが、ろくなことにはならないということとだけは、予見や予測といった以前の段階で、本能的に感じてしまった。

《最悪》の前兆。

「やめろ、各務……………真黍くんは、《彼》じゃない! 君の求め

ている《彼》は、もうどこにもいないんだ」

そこで各務は甲高く腹を抱えて哄笑し、私がいかに愚かな発言をしたかということ突きつけるように、

「あなたこそオカシナこと言わないでくださいよ。先輩はもういい。分かってますよそんなに。先輩は世界でただ一人の先輩だった。そんなの当然じゃないですか！ あはははは！ だからこそ、僕は僕の目的を見つけたんだ。誰にも邪魔はさせない。百鬼さん——いや、円居円。あなたが僕の邪魔をしようというのなら、知り合いだろうと何だろうと容赦はしませんよ」

なら、まず見せしめに、ここの患者数人を無惨に虐殺してきてあげましょうか？

と、各務は手を後ろに回し、お辞儀するようなポーズで言った。視線は、絶えず私に固定したまま。その目は明らか常軌を逸したものだ。

私は止むを得ず立ち上がり、威嚇するように片手を前にかざし、いつでも能力を発動出来る状態を作った。

「ふふっ、ふふふ、お得意の『幻惑』ですか？ けれど残念ながら、あなたの幻は、僕には効きません」

ふっふふふふふ、と気味悪く笑いながら、各務は背中に回した手の片方を、私に見せつけるように差し出した。

まさか、そこまでやるか。

「どうです？ つまりこういうことです」

各務の右手には、深々と大振りのナイフが貫通していた。ナイフが栓の役割をしているからか、ドバドバとした出血はないが、ポタポタ、と小さな赤い雫が涙のように零れていた。

「ふふん、痛いんです。半端なく痛いんです。あまりの激痛で、頭の中は『痛み』というワードでいっぱいなんです。あなたの『幻惑』が、僕の中に入り込む余地などないほどに」

「くっ」

「しかしながら、流石は元『論外児』。いまだに『夢魔』の異名は

スリープウォーカー

健在ってわけですか」

ふふふはははっ、と狂気じみた笑みの各務に、私は酷く戦慄した。純粹に、この人間が理解出来ないと思った。否、これほどまでに人間を失格した彼女を、私は恐怖という感情しか抱けなかった。

「出ていけ」

私はせめてもの虚勢で睨みつけ、低くドスをきかせた声で、言った。

「言われなくても、こんな人間が破綻したような奴らが集まる場所になんて、進んで長居したくありませんよ」

まあ、人間を失格した僕が言うのもなんですけどね、と各務は皮肉に自嘲してから、催促するようにナイフの刺さってない方の腕を私に向ける。

「包帯。さすがにこの有様じゃあ、帰りに不便ですので、包帯をください」

私は慎重に用心しながらも、机の引き出しから包帯を取り出すと、各務に荒っぽく放り投げた。各務は器用にキャッチすると、「どうもですー」と礼を言いながら、診察室を出ていった。去り際に彼女の鼻歌が聞こえた気がした。

シーンといきなり静まり返る室内。各務がこさえた小さな血溜まりが、強烈な紅を放っていた。まったく、誰が掃除をすると思っている。

「……………っはあー」

十年分の疲労が一気に降りかかってきたみたいに脱力した私は、深くキャスターに腰を下ろした。目頭を軽く揉む。前髪をうざったくかきあげ、つまらない白い天井を仰いだ。

「真黍くん—————気をつけて」

今の私には、ただそれだけしか弱々しく呟くことしか出来なかった。

008 (後書き)

中二！ 爆発！ だー！！！

うっほほほ、世界観設定かけてテンション高めな蝉です。

一応、自分が書く物語は世界観一緒ですので、全て否が応でもつながっています。

作者のもう一方の作品「魔王」なんか、リンクどころの話じゃないですしね。そっちも読んでくださると嬉しいなーと思ったり。

感想待ってます！

「――さて、我が『新聞部』へようこそ。一応、部長を務めている峰条真黍だ。え？ 知ってるって？ そりゃそうだな。むしろ知らなきゃオカシイってもんだ。アンタは……えーと？ 三年九組の出席番号27番、村江――ん？ ああ、心配しなくてもいい。守秘義務はちゃんと守るよ。で、今回アンタが依頼したのは、とある男を半殺しにして欲しいというものだったか。ふうん。まあ、金さえ貰えりゃこっちは文句はないよ。んまあ………例えばアンタが、その男の四人目の彼女だったとしても、先週ばったりその男と別の女が連れ添ってホテルに入っていったところを目撃したとしても、自分が遊ばれていたのだと今更ながらに気づいて復讐を誓おうとも、俺にはなんら関係はないことだ。……ん？ どうした？ そんな青褪めた顔して。え？ なんで知ってるかって？ そりゃ伊達に『情報屋』名乗ってるわけじゃないんでね。依頼主について知っておくのは情報屋としちゃ基本中の基本だぜ？ まあ気にすんなよ。アンタは俺に依頼する。俺はアンタの依頼を果たす。そういう契約が結ばれるだけだ。ほら、さっさと金だしな。きっちりかつちり十五万。それでアンタの悲願が達成されるんだ。なあに安いもんだよ……あ、キク、彼女からそれ受けとって――へえへえ、ふんふん。確かに、依頼金は頂いた。だが、それにしても、よく普通の高校生がよくこんな金額用意できたな。どうせ、親の財布からくすねたか、加齢臭のする汚い親父にまたがって稼いだ金なんだろう？ なあおい？ ……へえ？ 睨むねえ。いい顔してるよ。俺を前にしてそんな顔が出来りゃあ大したもんだ。気に入ったね。ああ、一週間以内にアンタからの依頼は達成される。その色男は、少しだけ

恐い思いをして、僅かな心的外傷を刻み、ちょっぴり人格も歪む程度に痛めつけておこう。さあ、打合わせはこれまでだ。さっさとここから出ていきな。じゃないと、ウチのおっかない生徒会長に目え付けられるぞ。それでは、一週間後の報告をお楽しみに。またのご利用をお待ちしております」



「……………いやあ。相変わらず、先輩って悪役にしか見えないですよ」

依頼主との談合が終わり、いつも通り雑多に物が多い部屋にて、先程まで依頼主と真黍が向かい合って座っていたソファで、顔を顰めながら苦そうに珈琲を飲む菊子。

「知らなかったのか？ 俺は《正義の味方》って奴が大嫌いだね」
真黍は窓際の机に足を乗せ、行儀悪く椅子をゆらゆらと漕ぐ。

「暗に、生徒会長のことを言っているようにしか聞こえませんが…」

「なら明るく言って欲しいのか？ 俺は、アイツが、大っ嫌い☆」
「はあ……」

菊子が困ったような反応を尻目に、真黍は携帯電話を取り出し、電話帳の欄を開く。目を瞑り、数ある連絡先の中から適当にカチカチといじって、通話ボタンを押す。

さーて誰が選ばれたかな、と目蓋を上げ、名前を確認する。

なんだ、堀江田^{ほりえた}か。どうしようもないクズだが、まあ、妥当と言えは妥当か、と真黍は携帯を耳に当てる。

数秒の呼び出しの後、相手の携帯に繋がった。

「……よう、堀江田。俺だ。いつにも増してラリってるか。さっそくだが死ぬほど感謝しろ。仕事だ。……ああ？ テメーの都合なんか知るかよ。黙って指示に従えこの葉中。テメーがヤクザに追われた時に、慈悲深くかくまってやったのはいったい誰だ？ 脳味噌がまだマリファナにすり替わってなきや覚えてるはずだろ？ 俺はいつだってお前の居場所をコワイおじさん達に売り渡してもいいんだぜ？ そうだな。やっぱり人間素直じゃなきゃな」真黍はケラケラと面白くもなさげに笑う。「詳細はまた追って送る。報酬は三万……はあ？ 正常レートだバアカ。高校生一人砂にするだけで三万だぞ。破格だと思え。つーかよ、お前四ヶ月前の工場倒壊事故でチーム失ってんだろ？ 資金繰りは少しでも欲しいだろが。まあ、ちよつとした小遣い稼ぎだと思ってやれ………あん？ 事故じゃない？ 化物お？ まだそんなキチったことほざいてんのかよ。注射の打ち過ぎだったの。っていうか、そんな調子でしくじりやがったら、お前んとここに刺青入れたパンチパーマおっさん達派遣するからな、分かったかー？」

ピッ、と荒っぽく通話を切る。何だか無性に煙草が吸いたくなつた。

「……先輩。本当に、やる気ですか？」

「実行役は俺じゃない。別の奴だ」

「で、でも……人を、傷つけるんですよ？」

「あのな、キク。俺はあくまで中継地点でしかないんだ。俺はただ依頼を受ける。それ相応の対価を得て、結果を出す。それだけの、ことだ」

そう、ただそれだけのこと。

この流れの誰が悪かと言えば、実行犯役の奴でもないし、中間地点の自分でもない。下流でも中流でもなければ、源泉たる依頼主が主な諸悪の根源である。

「求めに応じ、望みに答え、願いを叶える………それと相当の対価を貰えれば、大抵どんなことでも、だ。今更、キクもそんなオド

オドしてんな。もう入部して半年以上経つだろうが」

入部、というのもオカシナ表現だな、と真黍は内心苦笑する。この『新聞部』は、学園側からは表面的には認められておらず、ほぼ暗黙の了解として存在しているに等しい。すなわち、《在って無いような》部活であるのだ。否、そもそも部活とすら言えない体裁をなしている訳だが。

「そう、ですけど……」

まったく、ちょっとした荒事ですぐこの調子だ、と真黍は少々うんざりし、これは本格的に一服せねば、と席を外そうとしたところで、

「失礼します」

立て付けの悪い扉を開けるのに少し手こずってから、部屋に一人の男子生徒が入ってきた。短髪のごく平凡な顔立ちの少年。これといって格好良いというわけではないが、特筆して容姿が醜いという訳でもない。マルオ君みたいな縁のない丸眼鏡をしていた。

「これはこれは、副会長様。いったいこんな場末に何用で？」

足を卓上に投げ出している傲慢無礼な態度と姿勢の真黍が、来訪してきた少年に声をかける。

「真葛ヶ原会長より、預かってまいりました。これ、生徒会通信です」
まくずがはら

「……へえ？ 何だか知らんが、ごくろうだな」

「いえ。これも仕事ですから」

生徒会副会長——滋野井選しげのいすぐるから渡されたA4のプリントには、

近く、生徒会役員が夜七時から十時までの三時間、自主的なパトロールを開始することになったと書かれている。

「はあ？ ……なんだよこれ。聞いてないぞ」

「そりゃそうです。今さっき会議で決まって、試作的に刷ってきたものですから」

しれっとした済まし顔で答える滋野井からは、どこか誇らしげな雰囲気伝わってきた。

「……………相も変わらず行動早すぎだろ、生徒会」

「一週間前、こちら駅近くで殴殺死体が発見されたでしょう？ そのことから、会長が周辺地域の治安維持の為、自ら名乗り出たという次第です」

「……治安維持って、どこぞの漫画の風紀委員でもあるまいし」

ここ、神無森学園にはそもそも風紀委員なるものは存在しない。いや、存在する必要があるのである。何故なら、あのバケモノ会長率いる愉快な生徒会が、風紀委員の役割まで担っているからである。しかし、ここまで来ると、いささかあの暴力生徒会の自由度が目障りになってくる。即急に対応策を考えねばならない、と真黍は頭を掻いた。

「それでは。僕はこれで」

滋野井は最後までキリッとした表情を崩さずに、一度眼鏡のズレを中指で調整すると、すたすたと退出していった。まるでこれ以上この部屋の空気を吸い込みたくないと言わんばかりのスピードである。だが、しっかり扉を閉めていく辺り、純粋な意味での几帳面さが窺えた。自分とは大違い。

「……………噂をすれば、って感じでしたけど、いったい何で副会長がわざわざ届けにきたんでしょう？」

菊子は、真黍が投げ捨てたプリントを手に取り、しげしげと文面に目を通した。

「そりゃ、単独でここに乗り込んでくるような奴なんて他にいないからだろ。その点、副会長はしっかりしてる。流石は、あの女の後釜なだけのことはある。それに、これはアイツから直々の警告でもある。治安維持とかほざいときながら、つまりは俺の動きを縛りたいんだよ」

「さい、ですか」

やれやれ、と真黍は腕を後頭部で組み、天井を仰いで、いったて事も無げに呟く。

「こりゃあ、生徒会がウロチョロする前に終わらせた方がいいかも

な」

「そ、それじゃあ……」

「ああ、目標を襲うのはそうだな……今夜中にでも」

もしかしたら、あの腐れ生徒会長が、面倒臭い何かを嗅ぎつけているのかもしれない。

菊子が眉毛を下げて戸惑うのを、真黍は視界から外すように、視線を窓の向こうにへと移した。空は、今日も今日とて嫌味ったらしい程の快晴。

今宵は、星が綺麗に眺めるだろう。



『慣れ』というものは非常に恐ろしいものであって、いついかなる時でも、それらが異常であり、異質であることを常に認識しておかなければならない。戦場に長くすぎた兵士が、元の日常生活に戻れなくなるように。ふと気づいてみれば、常に携帯を握っていないと平常心を保てなくなっているように。いつの間にか、『慣れ』てきた事実が異常に変容していたり、異常に『慣れ』たことで、自分自身が異質となり果てるということが、残念ながらもまあることのなのだ。

故に、気をつけておかなければならない。

自称殺人鬼を我が家に居候させているという、異常事態を。

「真黍くん、おかわり」

「さも当然のように茶碗を差し出すな」

と言いつつも、真黍は各務の茶碗に炊飯ジャーからご飯をよそいだ。

「いい加減食うなら食うで金払え。こっちだってタダじゃないんだぞ。善良な一般市民かつ懐の薄い一介の高校生に何日も何日もたかりやがって。食費をよこせ食費を！」

真黍は焼き鮭の身をほぐし、ご飯と一緒に豆腐とワカメと葱のシンプルな味噌汁で流し込んでから、箸で各務を刺すマネをする。ちなみに、今朝の献立は、白飯、味噌汁、焼き鮭、卵焼きの四品。全て真黍の手作りである。ああ、泣けるほど家庭的。

一方の各務はズズズと味噌汁を美味しそうにすすってから、ちゃんちゃら可笑しそうにせせら笑った。

「善良？ 一介の？ ふふふっ、笑わせるね。見たところ、君だつてろくなことしてないんだろう？ 複数の携帯電話を使い分けている用心深さなんて、きつとさぞかし《危ないバイト》なんだろうねえ？ まともな稼ぎ方をしていないってことは十全に分かるよ」

「うるさい穀潰し。アンタには関係ないことだ」

真黍は忌々しそうに舌打ちをしてから、気分を変えるようにリモコンで、テレビのスイッチを入れた。二十インチの液晶テレビ。地上デジタル化が全国で開始されて早くも数年が過ぎる昨今。当初はこのデジタルの鮮明さに日本国民どころか、海外でも高い評価を得たが、これもまた、『慣れ』てしまえば同じこと。この明暗はつきりとした鮮烈な鮮明さにも、目が肥えてしまえばどうってことはない。

かの有名なSF作家、アーサー・C・クラーク曰く、『充分に発達した技術は魔法と見分けがつかない』。いやはや、まったくもってその通りである。例えば、江戸時代の侍がテレビという絵が動く薄っぺらい箱を見たら、面妖な！ 妖術だ！ と顔を陰しくさせて叫ぶに違いない。技術の進歩とは——歴史の歩みとは、偏にひんにひんにひんにあるのかもしれない。

しかして自分達は、科学に騙されてはいけけないのだ。
飼い馴らされては、いけない。

「あ、ブランチ見たかったのに」

「ドラマの視聴率ランキングなんてどうでもいい」

真黍は各務の口惜しそうな表情を無視して、土曜日の朝からやっている数少ないニュース番組に切り替える。まるで能面のようなニュースキャスターの口が告げる悲劇喜劇の内容。大物俳優の薬物所持。警察官の無断発砲事件。十歳の娘を虐待の果てに絞殺した母親の初公判。ミリオンセラーの盗作疑惑。中東某国の内戦。米国の介入。表示されるのは米兵の被害者数だけ。相手側の死者の数がいくつに上ったのかは知らない。あと、割と近場で起こっていた撲殺事件の続報。

「ふん、どこも——いや、いつだって同じだね、世間は」

各務が真黍の分の卵焼きに箸を伸ばそうとして、あえなく真黍に阻止された。

まったく、油断も隙もあったもんじゃない、と真黍はチャンネルを変えようとして、ポカンと硬直した。各務が、どうしたんだい？と不審げに真黍の顔を窺うが、とうの本人は啞然と口を開けて、四角い画面の映像を凝視していた。

撲殺事件——第二の被害者。

映し出される、被害者の顔写真。

昨晚、依頼達成の連絡報告がなかったのも、もしかや失敗したのでは、と危惧していたのだが、なるほど。これは成功も失敗もあったものではない。

「……おいおい」

堀江田が、殺されていた。

009 (後書き)

ジャンルをなんとなく学園に変更。

久しぶりの更新です。アイヤー遅くなってすみません。そう言えはなのですが、自分の作品って実はすべて繋がっております、（と言いつつも三作品しかありませんが）色々見ていただけると、ありがたいです。

「今回で三件目ですか……怖いですね」

菊子は棚の書類整理に明け暮れながら呟いた。真黍まさびに至っては、そうだなーとどうでも良さそうに相槌を打ってから、手元の新聞を捲った。その記事の中にも、菊子が不安そうに話題にする例の一件が大きくもなく小さくもなく載っていた。

二週間程前からここら近辺で一般人が立て続けに襲われるという事件が起きた。夜道を歩いていると、いきなり鈍器のようなものでひたすら殴打されるという単純な手口で、一人目と二人目は死亡。そして今回起きた三人目は意識不明の重体。被害者の共通点はいずれも十代ばかりで、まあ言っちゃあなんだが、深夜まで遊び惚けている札付きということだった。

不良ばかりを狙う連続通り魔事件。

その犠牲者の一人が、堀江田ほりえだという十九歳の無職男。真黍が請け負った依頼から、一人の色男を半殺しにして欲しいと仕事を回した相手。あの夜、真黍は目標の色男についての事前情報と行動パターンをまとめて堀江田にメールで渡した。事がうまく進んでいれば、色男は《少し》だけ痛い目にあって、《ちよっと》だけ心的外傷を刻み、しばらくの間病院生活を送ってもらうつもりだった。

しかし、通り魔犯の手にかかり、殺害された。

真黍にとってその男は数あるうちの手駒の一人に過ぎなかったし、連絡のやりとりもほぼ携帯電話だけで、直接会ったことは一、二度程度だった。であるからして、これといって特になんの感傷もなかった。加えて、堀江田という、自体が俗悪を体現したかのような人間で、真黍はそもそも彼を嫌悪さえしていた。

だが真黍にとって重要なのは、依頼を失敗してしまったことだ。

受け取った依頼料も今回の場合、返済を余儀なくされた。また別の誰かに頼み、同じ轍を踏まれても面白くない。故に、真黍にとつての最優先事項は、自分の仕事を邪魔した犯人を捜すことであった。

この《ホワイトアウト白鴉》に喧嘩を売るとは、賞賛に値すべき度胸である。必ず、草の根分けて捜し出し、ついでに息の根も止めてやろうじやないか。

まくずがはら「真葛原会長も流石にこうも人死にが続けば、夜中のパトロールは控えるんじゃないでしょうか」

「いや、逆にもっと酷くなるはずだろうよ。あのバケモノ女なら、いっそ犯人を捕まえる勢いで見回りを厳しくするだろうな」

「はあ、でも学園側は何も言ってきませんね」

「そりゃそうだろ。あの熱血正義バカだって一応は、この学園のパトロンである『真葛ヶ原財閥』の令嬢だ。一般の教師は勿論、学園長だって下手に口出しは出来んよ。いや、あの学園長ならむしろ面白がって推薦しているような気もするがな」

真黍はこの学園の最高権力者である古狸の姿を思い浮かべ、忌々しそうに舌打ちした。

「今でも不思議に思うんですけど、なんで先輩って会長のことが嫌いなんですか？」

真黍は苦虫をほおばったかのような顔で押し黙った。

学園が正式に作成する公式危険対象目録の中で、ブラックリスト『名探偵』バッドネームから

直々に名指しされることによって任命される——通称『論外児』の歴代七人目である真黍が、最初にして最後にしたい程に天敵で、現在まくずがはらあいきは辛うじて生温い冷戦状態が続く宿敵な存在。

かんもり真葛原愛儀。

神無森学園生徒会長。

別名『ASH』。

無論、彼女の後ろには灰しか残らないという意味合いもあるが、正しくは、A（抗うな）S（逆らうな）H（歯向かうな）、の頭文字をとった略称である。地震の時の、押さない、駆けない、喋らない

いの「おかし」みたいなものだ。地域差によっては「おはし」なのかもしれないが、ともあれ。もはや彼女の存在は災害扱いだと言ってもいいだろう。

常套句は、

『喧嘩両成敗!』

口癖は、

『私が正義だっ!』

どんなキャラだ。

そんなキャラだ、ともはや説明のしようがない。

そして、真黍が彼女を苦手——否、むしろ忌避していると言った方がいいのか。それは、彼女には。

弱味が無い。

弱点が無い。

非の打ちどころも無い。

真黍は人の弱味を握り、弱点を突く。一見、汚く思える真黍のやり方もあまねく常人には有効だが、超人とも囁かれる彼女には一切合切通用しないのだ。弱味も弱点も、欠陥も欠点も皆無な彼女は、真黍にとって最大の天敵だった。

いや、天敵というよりも、真と真葛原との関係は対立し——対極する。

どうしようもなく拮抗する存在なのだ。

混じわることも。

交わることも。

ありえない。

互いに互いを嫌悪し、憎悪し、恐れ、哀れ、苛立って、腹立って、相反し、相対す。

「それ以上、あいつの話はするな」

真黍は吐き捨てるように、言った。

実際、吐いておかないと気分が悪くなるかのように。

『私という正義が貴様の存在を許すなど言っている』
『奇遇だな。俺の中の悪意も、あんたが気に食わなねえとよ』

あいつと初めて交わした会話が思い出された。

真黍と真葛原は対極に位置しながらも同一であった。いや、どちらかといえば表裏一体の存在といった方が正確であろうか。

どちらにしてもお互いは別類のものであり、しかし裏を返せばまた同類でもあった。

そう、別類であり同類——あるいは、もしかしたらあったであろう自分の可能性。
可能性。

真黍には人生を分かつ分岐点があった。九年前の、『芸術至上』
によるあの事件。真葛原にもそれ同等の人生の分かれ目があったらしい。

真黍は、悲観と絶望に苛まれ、ひたすらに自己否定を繰り返す道
を行き。

真葛原は己が正義であるとひたむきに自己肯定をし続ける生き方
を選んだ。

否定するか、肯定するか。ただそれだけの違い。けれども決定的
な相違。

真黍と真葛原の場合は、どちらが良いとも悪いとも言い難い。だ
が、どちらもどうしようもなく終わっていて、どうしたって救いよ
うのないことは明確だった。

ならばもし、二人が分岐する以前に出会えていたとしたなら、どう
だろうか。二人は敵対していなかっただろうか。

否、そうではない。

きっとそのような状況があったとしても、二人は気づかなかった
のではないだろうか、互いの存在に。何故なら、二人は同一であり
鏡なのだ。鏡の向こうに自分が映っているのを認識できたとしても、
その鏡の向こうの存在を認識出来るわけではない。

それなら、もし真葛原が真黍と同じく否定の道を行き、もしくは真黍が真葛原と同じ肯定のする生き方を選んだとしたら——やはり二人は相容れなかったであろう。今よりは酷くはならなかったであろうが、いかなせん、それはただの同属嫌悪に過ぎなかっただけだ。

結局、別種であろうが、同種であろうが、真黍と真葛原が相容れなかったことはもはや運命とも宿命とも捉え難いことなのだった。当然、理解し合うことなど——いや、互いに理解し過ぎているからこそなのかもしれない。皮肉なことに、一番の理解者は、一番の敵対者だった訳だ。

『私の正義で貴様を殺す』

『俺という全てを賭けてアンタを否定してやる』

『今から私は』

『今から俺は』

『『お前の敵だ』』

そう互いに宣戦布告してから、学園史にも残るような壮絶かつ凄惨な戦いの数々の始まりが、あの日切って落とされたのは、登校初日、桜咲く、春のことであった。



削除。

消去。

強制排除。

一人目は、別に殺すつもりはなかった。

二人目は、確かな意図を持って殺した。

三人目は、何となく生死の加減を理解した。

四人目は、どうしようか。

手順は分かった。ならば今度は、あいつを狙おうか。あいつは、死ぬべきだ。この世に存在しては駄目なのだ。

悪は、罰しなければならぬ。

粛清。粛清。粛清せねば。

この濁り、淀み、腐り切った世界を、元あるべき形に正さねば。

正義は、自分にある。

これは、正義だ。

自分が、正義だ。

正義の名の下に罰するのだから、問題ない。

正義だから、問題ない。

正義の味方は、ここにいるのだから。

この現代日本で一日に起きる事件数というのは、傷害、自殺、殺人及び未遂などの諸々を含めおよそ六百前後だと言われている。いくら日本の民警が優秀だからといって、この件数においては到底手に負えるものではなく、現に今でも未解決事件というのは約二万件にも達しているのだとか。ニュースなどのメディアを通じて報道される事件というものも、ごくごくその一部に過ぎず、氷山の一角どころか、影すらも出てきていない。ミステリー小説のように、探偵がその場で即座に事件の真実を暴くようなことは、説明するまでもなくフィクションであり、現実には実在はしない。大体は地味で地道な調査と捜査によって事件は解決に導かれるものなのだ。

——しかしこの場合、《名探偵》の存在は除外する。

ともかくにも。真黍は現在、とある人物を絶賛追跡中だった。

閑静な住宅街という使い回された表現がいかにも似合うような場所、真黍は一定の距離を保ちながら、その人物の尾行を続ける。

時刻は既に逢魔が時。辺りは不気味なくらい静かだった。

何が起きても、何が現れても、まったくもって不思議ではないような雰囲気、真黍の周りを取り囲んでいた。

「ぶははははは！ 藍くんよお、いや塩とかねーわ。ぜってートンコツに決まっるてんだろが」

「いや、瑠璃るりのほうこそ……トンコツとか、ありえない。絶対……塩」

何やら全体的にブルーなカラーリングの男女二人が通り過ぎてい

ったが、気にしないでおう。それよりも今は目の前のことに専念するのだ。

連続殴打事件の、犯人の追尾を。



事件を調査するにあたって、まず一番初めに考えることは、犯人の思考と嗜好の想定である。今回に至っては、被害者は四人。共通点といえば皆全て二十代未満ということを除けば、繋がりも関係も一切ない。犯行については、おおよそ場当たりのな通り魔として仮定しておいても問題はなさそうだと、真黍は断定する。

では、さっそく犯人の思考について考察してみよう。何故、被害者は十代ばかりなのか。単なる偶然なのか。まあ、犯行時刻が深夜近くだったことを踏まえると、夜遅くに散歩している人間は必然、夜遊びに呆ける若者に限られ、そこを通り魔のターゲットにされたという線も考えられなくはない。ということは、被害者達の共通点で、新たに不良というキーワードが浮上する（ただし、堀江田に至っては不良どころか、人間のクズの部類にも相当するが）。

そして次は、犯人の嗜好についても着目してみる。

とは言いつつ、他人をタコ殴りにして殺すような狂人の好き嫌いなど知る由もなければ、理解もしたくない。だが、想像することなら可能だ。

おそらく、犯人が人を襲う理由は。

「肅正行為、か」

——要するに、独善的な正義感における、自己本位な暴挙ではないかと、真黍は予測する。正義の審判。つまり、深夜にあぶれる柄

の悪い若者達を一掃する、ヒーロー気取りの道化の仕業なのではないかと。

あくまでも、想像の域は出ないが、こういった犯人の犯行動機というのは、大抵が似たり寄ったりだったりする。二年前、真黍もそういった人種が起こした厄介事に巻き込まれたことがあるので、今回もまた同じようなことなのではないかと危惧していた。

「仮にそうだとしても、ダルイことこの上ない」

何はともあれ、真黍は犯人と断定して間違いないその人物の後を追った。

歩く。止まる。歩く。止まっては監視するの繰り返し。確か、奴の自宅はこの辺ではないはずだが、どこかに立ち寄る予定でもあるのだろうか。そいつは次第に住宅街から低い雑居ビルがぼつぼつと姿を見せる人気のない地域へと足を踏み込んだ。真黍はその人物が背負った黒いスポーツバッグを目印に追跡を続ける。

「おい、^{ほいつき}箒。本当にこっちでいいんだな」

「うむ、だんだんと気配も近くなっておる。気をつけろよ、^{つかさ}司」

——何やら再びおかしなのとすれ違った。スーツにネクタイを締めたサラリーマン風の男が、背中に艶やかな赤い和服を着た少女を負ぶさり、真横をもの凄い勢いで駆け抜けていったが、いったい何だったのだろう。いや、とりあえずは気にするな。

というか集中しろ、と真黍は自分に喝を入れた。今はただ、目の前の人物だけに焦点を定めるのだ。

「って、クソッ」

そう言っているそばから、奴の姿を見失った。複雑に入り組んだ路地裏を縫うように、右折と左折の紆余曲折を経て、必死にその視野から失せた背中を追った。やがて、そびえ立つビルや家が犇き合う狭い迷路から抜け出し、真黍は急に開けた空間に出た。

公園。

時間帯のせいもあるだろうが、子供達が無邪気に遊んでいるような様子はなく、使用されていない遊具が暗い影を落とす、物淋しい

廃れた場所だった。例えば少しでも危険と認識された遊具が、弁明も釈明もないまま虚しく駆逐され続けている昨今。そういった事情ではないのかもしれないが、この公園もまた錆びた鉄棒、塗装の剥げたブランコ、低い滑り台といった必要最低限のものしかなかった。もう一つ付け加えるとするなら、公園内には桜や櫟といった多数の木々が無秩序に点在しており、それなりに広い敷地を有してはいるのだが、何となく閉ざされているような印象を受けた。

奴の姿は見回したところ、完全に消失していた。

しくじったか、と真黍はらしくもない自分の失態に舌打ちし、しようがない出直すか、と踵を返したところで、

「あれは……」

公園の入り口付近にまで来ていた真黍が目にした、それ。

「なんで、バッグが？」

燃えるように紅く世界を染めていた夕日も、そろそろ役目を果たそうに沈みかけていて、何となく視界も悪くなり始めていたが、真黍は確かに見たのだった。隅の方で一際大きい幹を誇る桜の根元に、今まで尾行していた人物のバッグが、ポツンと放置されているのを。

真黍は不審と警戒を抱きつつも、周囲を慎重に窺いながら、そのバッグが捨て置かれている桜の木まで近づいた。相変わらず、奴の影は見当たらなかった。

真黍はそつと膝を着き、バッグの中を見分する。バット一本分――いや、子供一人が丸々と入るくらいある、多少大きめのスポーツバッグで、ナイキのロゴが刻まれていた。中身は特に変わったものではなく、普通に教科書やノートの類が数冊収まっているだけだった。

これは、まったくなんであろうか。何故、ここにアイツのバッグが転がっているのか。この公園に奴が訪れたのは間違いない。だが、肝心の本人がいずこへか行方を眩ましている。いったい、この状況は何を意味している。

顎に手を添えて静かに思索して、ふとすぐに真黍はその真相へと

辿り着いた。

なるほど、上か。

真黍がそう思い至った瞬間には、既に身体は上空から襲来してきた金属バットの餌食になっていた。

脳味噌がマッシュポテトになったような感覚。猛烈に込み上げる吐き気。後頭部から波紋のように広がる鈍痛。真黍は思ったよりも事態を冷静に呑み込んでいた。なに、単純な手だ。所持していたあのバッグはフェイクであり、注意をそらす為の陽動。それにまんまと嵌った獲物を、待機していた木の上から飛び降り、仕留める。しかし、何という子供騙しだろうか。首尾よく引っ掛かった自分もどうかと思うが、まあ、こうなってしまうのは仕方がない。

どうせ、いつかはこうなってしまうはずだったのだ。

単に順繰りが入れ替わっただけの話なのだから。

むしろ、こちらの方が対話にもってこいだとさえ真黍は思う。

「アンタもそう思わないか？」

——なあ、副生徒会長さん？

自分の血で濡れたバットを肩に担いで、しげのいすべる滋野井選は歪な笑みを漏らした。

011 (後書き)

みじかくてごめんなさい。次回は読み応えのあるやつ書きます。

こっそりとバレぬよう、うつ伏せた姿勢のまま懐の胸ポケットをまさぐる。そのブツを指先だけのフィーリングで操作する。

カチカチカチカチ。

「学園では『ホワイトアウト白鴉』と恐れられているあの峰条真黍が、まったくもっていい様ですねえ？」

神無森学園副生徒会長ことしげのいすぐる滋野井選は、何とか手をついて立ち上がろうとした真黍に再び重い一撃を背中に加え、地面に沈めた。真黍は心中で軽い悪態を吐くが、表面上は余裕そのものの笑みで対する。

「はっ、副会長様とあろう者が、そんな物騒な凶器持ってパトロールですかあ？ まったくもって滑稽じゃないか」

相変わらず頭蓋の中ではぐあんぐあんど波を打つような激痛が、楽団を引き連れて素晴らしいファンファーレをかき鳴らしており、まともに思考出来る状態でもなかったが、真黍はほぼ無意識に近い状態で言葉を放っていた。

「三人の内の二人も殺しておきながら、よくもまあ今まで平然と日常してたじゃねえか。ああ？ この殺人犯が」

おそらく堀江田殺害の件については、あの時自分と菊子が交わっていた会話の内容を僅かに聞いていたのだろう。部室を出て行つたと見せかけて、こっそりとドアに張り付いてでもして。そう言えば、退室していった割には足音が遠のいていった気配がしなかった気がする。いずれにせよ、自分が迂闊で不注意だったことは否めない。

今回はとことんミス尽くしである。

「殺人犯？　いいえ、違います。僕は正義ですよ」

正義。なんだ、やっぱりどんぴしゃかよクソツたれ。

真黍は血の混じった唾を地に伏したまま吐き捨てた。

「はんつ、真葛^{まくすがはら}ヶ原の真似事か？　いや、人殺しの時点で既にお前は」

その台詞の先は、滋野井が真黍の腹部を蹴り上げたことによって遮られた。

「あなたみたいなクズが、あの人の名前を気安く呼ばないでくださいよ」

反吐が出ますから、と滋野井はもう一度だけ真黍の鳩尾に爪先をめぐりこませた。滋野井は、胃液と共に咽る真黍を侮蔑するように見下ろした。

「いいですか？　よく聞いてください。こうなってしまったからには、僕はあなたを殺します。元々、その予定だったので問題はありませんが、少々準備が整っていないので面倒です」

「……正義、正義って、もうそれはあのバ会長だけで十分だったの。そんな聞き飽きた言葉で、使い回され、使い古された概念で、殺人まで犯しちまうってのは、もうお前は手遅れだ。でも、今なら出血大サービスで俺が良い病院紹介してやろうか？　とっとと精神科か脳外科行きやがれ」

どくどくと割れた後頭部から冗談では到底済まされない量の血を流しながら、真黍はケラケラと笑った。

「口の減らない鴉ですね。あなたが……こんな奴が、あの人の宿敵ですか。ここで今、僕の足元で無様に倒れているのが、あの人にとつての天敵なのですか。そっちこそ、滑稽じゃあないですか。あの《白鴉》が、たった一撃でのされてしまうなんて。ええ、どうなんですか？」

そう言って、靴の踵で頭を踏み潰す滋野井。何度も何度も、繰り返して。

「こんな世の中、間違っているんですよ。分かりますか？　ただ声のデカイだけの奴が自分の思い通りになるんです。いくら賢くても、いくら善人でも、力がなければ発言する機会さえ貰えない。自己中心的な奴だけが好き勝手出来て、他の人はただ振り回され続けるだけの社会なんです。マナー知らずの、ルールを守らない奴らは楽しい思いをして、真面目に生きてる人間が逆に馬鹿を見る世界なんです。そんなのってオカシクないですか。だから僕は抗うんです。世の中を汚染する奴らを僕が粛清する。これは、僕なりの必死の抵抗なんです」

口端を歪に吊り上げて、滋野井は滔々と語る。

「……うるせえ、よ。ガキみたいな詭弁と……理屈こねやがって」
次第に朦朧と掠れていく意識の中、真黍は途切れ途切れに言葉をつむぐ。

「だから、なんだってんだよ。理由に……なってねえんだよボケ。テメェのくだらねえ判断基準で殺されたら……こっちもたまんねーよ」

正義。正義。正義。

これがトチ狂った部外者の犯行だったなら、と真黍は思った。最初からまどろっこしいマネをしないで直接手を下せたはずだった。気後れや様子見の前置きもなく、慈悲も容赦もいっさもなく、問答無用で秘密裏に処理することも可能だった。

だが、コイツだけは。

この人間だけは。

俺は、《間違え》を享受したまま生きることを選択したけれど。

「——お前は、《失敗》だ」

間違えを間違えだとも認めることが出来ない、《失敗》だ。

選択の相違。

そしてコイツもまた、俺が辿り着いたかもしれない可能性の一つなのだ。

「……………耳障りな、鴉が。お前なんか、何が言える。何が分か

る。ああ、そうだとも。これは僕の自己見識による行為だ。けど、
だとしたらいったい何なんですか。僕は、決して自分が《間違っ
ている》だなんて微塵に思っちゃいないですよ。先程、僕は抵抗とい
う表現を用いました。訂正しましょう。これは、僕にとっての
『復讐』なんです。反逆で、謀反で、仇討ちなんですよこれは。お
父さんもお母さんも、優^{ゆう}だってきつと、僕を肯定してくれる！」
アッハハハハハハハ！ と空を仰いで狂気じみて笑い上げる滋野
井は、頬に一筋の涙を引いていた。

「悲しいですよ………優は、まだ九歳だったんですよ？」

——そんなもの。

「……知る、かよ」

アハハハそうですね、と滋野井は額に手を当てて一頻り肩を揺
らしてから、改めて紅く血で汚れたバットを掲げた。

「それではさようなら、峰条真黍。あなたを殺して、僕はこれまで
以上に粛清を続ける。これは、まだ始まりに過ぎないのでから」

その時既に真黍の意識はほとんどなく、滋野井の壊れた笑顔をお
ぼろげに視界の隅で、ぼんやりと網膜に映すだけだった。不幸中の
幸いとして、痛覚やその他諸々の感覚も失せていたことで、特に苦
しまずにいられたことだろうか。

自分が殺されていく感触を、確認せずに済んだことだろうか。

別段、死ぬということに躊躇いはないけれども。

唯一、心残りとして、妹の小麦のことが気掛かりだった。

それにしても、小麦が言っていた『気をつけて』というのは、も
しかしてこのことだったのだろうか。ならば、『選択の余地』とは
？ 『進む道』とは？ 『帰る道』とは？

さて、分からない。



「……………」

薄い暗がりの中、見知ったような見知らぬような天井の白さをしばらくぼんやりと眺めてから、むくりと上体を起こした。ズキリ、と鋭い痛みが身体の内側に走る。後頭部の痛みは特に酷い。現在進行形で焼印を押されているかのような激痛に、堪らず眉間にシワを寄せるが、呻くことはなかった。ふと、頭に包帯が巻かれていることに気づいた。服装も征服のズボンとワイシャツだけとなっている。

周囲を見渡せば、そこは飾り気のない殺風景な部屋だった。自分の寝ているベッドの他には、小棚とクローゼットぐらいしか見当たらず、部屋に一つの窓を覗くと、どうやらここは高層マンションのかなり最上部に位置した場所だということが判明した。

不意に、ほの暗い室内に眩い光が差した。

「目が覚めたか」

どうにか痛みにも慣れることもなく、声がした方に視線を向けると、部屋の出入り口の扉にもたれかかるようにして、フレームのない眼鏡を掛けた妙齢の女性が、煙草を銜えながら人間味の薄い微笑みを浮かべていた。白い無地のタートルネックにガーゴパンツという出で立ち。ダンヒルライトの、嗅ぎ慣れた臭い。しかし、真黍は、

「あなた誰ですか」

「おい、自分の伯母を忘れるなよ」

「ああ、なんだ。千曲伯母ちくまさんか」

「……記憶障害、か？ やっぱ明日ちゃんと病院で検査しないと駄目かな」

面倒臭そうにストレートヘアーをくしゃくしゃと掻きながら、鳴神千曲は勢いよく紫煙を吐き出し、踵を返していった。それから幾許か経って、湯気のたったマグカップを二つ手に持って戻って来た。煙草は口から消えていた。

「飲むか？ コーヒー」

「貰います」

真黍は、千曲から褐色の液体が表面で波を打つマグを受け取った。熱いので、取っ手の部分を軸に支えて、太腿の上に乗せた。

千曲は寝台の端に腰を下ろしてから、近くにあった小棚にマグカップを置いた。そして首だけをこちらに傾けて、

「何か訊きたいことはあるか？」

と、ごく単調な声音で言ってきた。

「ここまでの経緯と状況の説明を」

真黍も至って事務的な調子で、両手で包むマグの温度とは正反対に冷めた瞳を千曲に投げかける。

「だろうな。で、傷はいいのか？」

「問題ないです。話してください」

「なんというか………お前は本当に兄貴とまったく似てないな。

こんな時ぐらい、面影の一片でも見せればいいのに」

「伯母さんとはそくりだって、よく言われるけど」

「それは、何だか稲穂さんに申し訳ないな」

千曲が苦笑するように真黍の母の名を口にとすると、

「死んだ人間に今更何を想ったって、しょうがないって」

視線を落とし、表情を曇らせながら、低く真黍は呟いた。



「まず、どうして俺が生きてるかについてです」

真黍は改めて千曲に向き直り、尋ねてみる。

「その質問に対して、私はいったいどんな解答を示せばいいんだ？」
運命論か、ロマンチズムか、もしくはカントかニーチェの思想

で答えてやってもいいぞ、と千曲はらしくもない冗談をかまして、そして心底つまらなそうに肩を揺らした。

「別に人生の壮大な命題を訊いているわけじゃない。俺は、なんで伯母さんの家で治療を受けているのか。そして、そこまでの過程はいつたいたいどうなっているのか。そういうことを、俺は聞きたい」

「……ふふ、分かっているともさ、甥っ子よ。そう焦らんでも話してやるよ」

もったいつけるかのように千曲はクススと小さく笑い、真黍が今もっとも求める情報の全てを公開した。

「まずさ、マキ。初めにお前のほうから私に連絡を入れてきたんだろうが」

その通りであった。真黍は滋野井から最初の一撃を喰らった時、とっさに千曲の携帯電話にコールを入れていたのだった。それ自体は真黍自身も理解している。

「それですぐに切れちゃったからさ、妙に思ってたね。お前の方から電話をかけてくるなんて珍しかったし、加えて、お前の携帯に内蔵されたGPSの反応がな、しばらく経ってもある地点からまったく動かないときたら、これは向かわざるを得ないじゃないか」

そこまでの経緯は単純明瞭。だが、その後には一番の謎が残る。

「で、到着したらそこには我が甥が血塗れで倒れていましたとさ」

真黍は、その場で他に人影はいなかったか、と千曲に確認をとるが、

「いや、お前以外誰もいなかった。お前から着信を受けてから、三十分後くらいには着いていたと思うが、人っ子一人見かけなかった」

千曲はそう断言する。真黍も、彼女が特に嘘をついているようには思えなかったし、そもそも虚偽を並べ立てる必要性も感じられない。だから、千曲が口にする説明は真実であると仮定しても問題はないだろう。

しかし、そうなると滋野井の存在はどうなった？

今回の件については、流石に身の危険を痛感し、内心気が気でな

かった真黍であつたが、とりあえず状況がよく掴みきれていない。自分の立ち位置は五里霧中の真つ只中であるのだ。故に、今の自分に出来るのは、限られた情報の中で事の次第を推察し、想像し、再構成することである。考えろ。考えろ。考えろマクガイバーだ。滋野井は何故自分を殺さなかつたのだろうか？ それとももしくは元々殺す気なんてなかつたのであろうか。痛めつけることが出来ればそれで満足したのではないか、と途中まで思考して、真黍はその甘つたるい結論を早々にボツシュートした。

あの狂氣じみた笑みも、ドス黒く歪んでしまった思想も、全てが殺意という悪質極まりない負の感情に転換され、自分を真摯に、真剣に、確実に、確信的に殺そうとしていた。それがいきなり自らの仕出かしている所業の重大さに怖気づき、止めは刺さずにその場を去ったというのも果てしなく考えにくい。

というか、あいつは既に二人殺している。超えてはならない一線を踏み外しているのだ。今更彼の行動に自省と自制とが利いてくるとは思えない。

いずれにせよ、情報が少なすぎる。推論については明日に持ち越すことにして、真黍は一刻も早い体調の回復を優先することにした。

「大丈夫じゃありませんよ、残念ながら。でも、一度家に帰らないと、色々やることがあるんで……」

「まあ、無理には止めんが。この件について、兄貴には報告しとくか？」

「……やめてください。あのヒトには、関係ない」

「関係ない、ってことはないだろ。『鳴神機関』の情報網を密かに乱用しているお前が、『鳴神機関』の総帥様に一言もないってのは。そもそも、その息子であるお前がこんなにされて、父親に何の知らせもいかないというのは……」

「やめろ」

怒気を含んだ低音に、千曲は特に気圧されたわけでもなかったが、やれやれといった具合に嘆息した。

「仕方がないね。だが、これだけは約束しろ。せめてお前の家まで送ってやるから。それで何か身体に異常があったらすぐ医者に診てもらえ。分かったな」

疑問形ではなく、有無を言わせない命令形で千曲は真黍を見据えた。

「……分かりました」

真黍は、ただ大人しく頷いた。



アパート前まで送迎させられた真黍が、千曲に礼と別れを告げ、自宅である部屋の玄関を開けると、まず初めに目にへと飛び込んできたのは、さる自称殺人鬼の笑顔と死にたくなるような宣告であった。

「おお情けない！　なんと男前になって戻ってきたか勇者よ！　随分とまあ遅かったじゃないか。僕は腹ペコで頭皮と踵がくっついてしまいそうだよ。だからさっさと僕のためにご飯を作るんだ！」

満身創痍の体で、真黍は渾身の右ストレートを各務^{かがみ}に埋め込んだ。

012 (後書き)

才子要員、かがみなお各務奈直

一週間が過ぎた。

あの一件から別段何かが続けて起きるといわけでもなく、日々はつつがなく流れていった。しかし頭部に巻かれた包帯は、もうしばらくは取れそうにない。

「平和、平和、平和だねえ、真黍くん。私の心はすこぶる安寧としたものに満ち満ちているよ。これまでに私達二人が乗り越えてきた凄惨悲惨な事件の数々がまるで嘘だったかのように思えるねえ。その中でも記憶に新しいのは、今年の四月頃、あの《名探偵》バッドネームに巻き込まれた山梨での殺人事件だったかね。あれは流石の私でも驚愕せずにはいられなかったよ。まさに『そして誰もいなくなった』って結末だったけど。しかしながら、最近になってふと思いつくようになったのは、やっぱり去年二人っきりで過ごしたクリスマスかなあ。まさか血濡れのサンタクロースがホッホーと高笑いしながら訪れてくるとはまったく予想だになかったけれども。真黍くんはどうだい?」

「……………」

時は放課後。場所は新聞部の部室。来客用に備え付けられたソファに腰を下ろしてくつろぐ現上^{うつがみのあ}乃姍は、奥の作業机に行儀悪くも足を乗せている真黍に声を掛けるが、返ってきたのは空虚な沈黙だけであった。

「真黍くん?」

決して寝ているわけでも、気を失っているわけでもなかったが、真黍はどことなく上の空で窓の外を眺めており、これといった反応を示さなかった。

「おーい、真黍くん。髪の毛の根元が白く染まっている真黍くん?」

「…………え、マジで」

はっと我に返ったように、真黍は机の引き出しから手鏡を取り出し、「あ、ホントだ」と呟いてから、今度は二段目の引き出しから白髪染め用のヘアカラー Sprey を登場させ、軽くつむじ辺りに吹きかけた。

乃姍はその光景を酷くつまらなそうに眺める。

「……むー、なんでわざわざ黒く染めちゃったのかなあ真黍くん。私的には真っ白だった頃の方がステキだったと思うのだけれど」

「アニメのキャラじゃねえんだ。日常生活で、白髪なんてものは目立って仕方がない」

「それでも、あの真葛ヶ原と争っていた時期は白髪だったじゃないか」

ホワイトアウト

《白鴉》の名が泣いちゃうよ、と乃姍は溜息を吐き、

「まあ、真黍くんが例えどんな風に変わり果てたとしても、私なら愛し続ける自信があるけどね」

えっへん、とそれなりに膨らみのある胸を張った。

愛する。

愛し続ける。

彼女がその言葉を自分に浴びせてきたのは、いったいいつの頃からだっただろうか。彼女との出会いは――否、出会いだなんて上等なものではない。最初は、お互いに利用し合った結果の対面であったのだ。自分は乃姍をただの駒の一つとでしか思っていなかった。反対に乃姍も、自分のことを単なる便利屋としてでしか扱っていなかっただろう。

それがどのような過程を得て、現在のような関係になったのか。自分でもうまく説明は出来ないであろうし、誰かに語ることもこの先ないのだろうと思う。

だが、彼女と共に過ごしてきた時間、対峙してきた幾多の事件。時には助け、または助けられ、自分達は生き抜いてきた。

だから、この地毛である白色の全てを黒に塗り潰したのは、一種のケジメであると思っっている。真葛ヶ原との戦争ごっこに

も終止符を打ち、《名探偵》バッドネームとの因果を断ち切り、この惰性によって紡がれる日常を謳歌しようと心に決めたこと。

その為に、今の自分に出来ること。

「……乃姶」

「ん、なんだい？」

「愛してる」

乃姶がその場でバク宙を決めた。

「みーとうー！」

ボスンッ、と軽やかにソファの上に着地した乃姶。スカートが見事なまでにめくれ上がって、中身のパンツが丸見えになっていたが、そんなこと知ったこっちゃないといった風である。

「それでさ、頼みがあるんだ」

「うんうん！　なんだって言うてくれたまえよ！　今の私に可能なことなら何だって頼まれてあげるよ！　さあさあ金の工面かい銃火器の用意かい場所の提供かい人手を集めることかい『現上財団』の総勢力と全権力をかけて君への協力は惜しまないよ！」

「そうか。じゃあ、しばらく俺につきまとわなくてくれるか」

「そんなのお安いご用さ勿論だよううええええ！」

乃姶はソファから勢い良くズリ落ちた。



「へえ、こんなしがない脇役のぼくにわざわざ《白鴉》さんが声をかけてくるなんて、果てしない感激と共に迷惑極まりないですねえ」
校舎裏に呼び出したそいつは、口ではそう言うものの、実際は愉快そうに口元を綻ばせていた。

「まあ、あなたが聞きたいというしげのいすぐゐる滋野井選のことですが、ぼくもそんなに彼のことに詳しいわけじゃないんですよ。一応は同

じクラスだったにしても、そんなに会話を交えたことはありませんし、事務的なこと以外は喋ったことなんてなかったですよ。『次の授業はなんだっけ?』とか、『そこに落ちてるシャーペン拾って』だとか、そんな程度です。もともと無口な奴でしたしね。けど、傍目から見ても、明らかな優等生然とした真面目な奴でしたよ。それに彼、あの生徒会で副会長やってきましたし、それなりの人望もあったと思います。ああ、そういや今日で失踪一週間目でしたね。噂じや、通り魔にやられただとかって色々飛び交ってますけど、はてさて」

道化じみた口調で滔々と語ってくれたそいつは、真黍から渡された五千円札を軽く指で弾いた。

「——と、ここいらでもういいですかね? 僕も僕で何かと忙しいんですから。鈴木さんとの約束もあるし……オッホエン、ともかくこれ以上、あなたとの『縁』を強めたくないんですよ、正直。だから、ここいらで失礼させて貰います。さいなら」

同学年のはずの彼は、最後までへつらうような敬語を一貫させて、軽く会釈しながら立ち去ろうとした。

「『似て非なる者』シュガーアンドソルト」

不意に真黍は彼の背中にそう呼びかける。振り向いた彼は、至極嫌そうに顔を歪ませて、

「……やめてくださいよ、ホント。そのバカっぽい呼称は、ぼくにとっちゃ迷惑千万でしかないんですから。大体そのネーミングセンス自体がぼくの名前にかけたオヤジギャグだし——いいですか、僕はね、あまねく舞台の脇役でありたいんです。諦観者あり、傍観者。そして今日の僕は、あなたを主役に置いた物語で、聞き込みを行ったとある少年Aでありたい。故に、そういった有象無象を選別するような固有名詞を吐かないでください。これ以上、僕を峰条真黍の物語に巻き込まないでくださいよ」

それだけを言い残して、今度こそ名前も明かされなかった少年Aは、視界の隅へと消えていった。



この一件について、乃姁を関係させるわけにはいかないと、真黍は頑なにそう思う。乃姁が関与してくれば、事は必然と大げさになってくる。そういった展開には何が何でも回避したい。

もう、悲劇には関わらない。

もう、惨劇にも加わらない。

この人目を引く白髪を黒に染めてから、そう固く誓ったのだから。

「……さて」

真黍は資料棚から抜き取ったファイルを開き、とあるページに目を留める。そこには、古びた新聞記事の切り抜きが貼り付けられていた。

——長男一人を除いた、一家全員が殺害された強盗殺人事件。その日、長男だけは外出していて、幸いにも事を免れたという。

幸いにも……いや、不幸にもか？

日付はちょうど二年前のものとなっているが、この事件の犯人が未だに捕まっていないことを、真黍は知っていた。

真黍はファイルを閉じ、元あった位置に戻した。机の上にある鞆を掴み、そのまま部室を後にする。

そして、真黍は玄関に向かう途中の渡り廊下で、酷く感情が心の奥底に沈下していくのを感じた。その場にいた何人かの生徒が、真黍の存在を認め、自然と中央に道を空けていく。真黍はただ正面だけを見据えて、歩き続けた。その歩調や歩幅は機械のように正確かつ均一で、気持ち悪いほどに乱れず、まるで真黍の内面をありのままに体現したかのようなだった。

そんな真黍の対向車線から、一人の女生徒が、こちらに向ってくる。

胸を張り、姿勢をしゃんと伸ばした凛々しい歩き姿。その風格はまさしく威風堂々としており、一分の隙も、一寸の気の緩みさえも見受けられない。彼女の威容は、無意識的に周囲の者達を厳かに畏縮させ、自ずから喜んで頭を垂れてしまうかのような、そういう支配的圧力を醸し出していた。

それは威容というよりも――むしろ異様と称するべきか。

本校の生徒は勿論、近辺の他校からも一部《鬼》とすら揶揄されている始末なのである。

抗ってはならない。

逆らってはならない。

齒向かつてはならない。

彼女の存在に対して囁かれるこの原則三条をローマ字に置き換え、頭文字の三つを繋げ合わせて――『ASH』。これがそのまま、彼女の通り名ともなっている。奴の背後には灰しか残らない、という意味合いもあるが、そんなことは至って瑣末事。

真黍にとっては、単なる敵。

宿敵であり、天敵。

天衣無縫の絶対正義。

まくずがはらあいぎ
真葛ヶ原愛義。

「――……」

「……――」

お互いのことなど眼中にはないといった様子で、二人は足を止めることもなくすれ違う――かと思いきや、どちらからともなく口裏を合わせたかのように、ピタリと動きを停止させた。相互に背中を見せ合ったまま、しばしの沈黙が過ぎ去る。不穏な空気を察したのか、渡り廊下に真黍と愛義以外の影は消え失せていた。

「先週から、うちの副会長の姿が見えない。峰条真黍。貴様、何か知っているな」

口火を切った真葛ヶ原から発せられたのは、疑問ではなく断定だった。

「さて、な。仮に知っていたとしても、テメエに教えることは何もない」

目線どころか、身体の向きすら合わせずに交わされる会話。暮れなずむ夕陽の茜色が二人に濃い陰影を落としていた。

「だろうな——とはいえ、私も貴様の力を借りるつもりは毛頭ない。そういえば、貴様。その額の包帯はどうした。私以外の者から遅れをとるとは、《白鴉》^{ホワイトアウト}の手腕もついに鈍ったか」

真葛ヶ原の嘲るように肩を揺らしている模様が、背中越しに伝わってきた。

「……言っただろ。テメエに教えてやることは一つもない」

「ふん、その通りだな」

自分で言っただのを皮切りに、真葛ヶ原は歩行を再開したようだった。真黍も小さく鼻を鳴らしてから、ほぼ同時に両脚を動かそうとして、

「ああ、そうだ」

と、真葛ヶ原のふと思いついたような軽い調子の声。

「行方不明の滋野井のことだが、あいつ、実は二年前に家族を失っているんだ。両親と、妹を一人……詳しくは知らんが、どうやら押し込み強盗だったらしい。貴様は、私に何も教えるつもりはないと言ったが、こっちは勝手に教えといてやる。いや、貴様ならとつくの昔に既知の情報だったか？」

——何せ貴様と滋野井は、少なくとも似たような境遇を背負って生きてきたのだから。

「……………そりゃ、初耳だ。驚きだね、まさかお前とは別の意味で、似たもの同士がいるとは。流石の俺でもそこまでは知らなかったよ」
へらへらと締りのない笑いを零しながら、真黍はその場を歩き去っていく。何となく背部に真葛ヶ原の視線を感じたが、特別気にすることでもなかった。

下駄箱からアシックスのスニーカーを取り出し、履きかえる。校門を掻い潜った辺りで、思いつきり下唇を噛んでやった。

知らない。ああ、知りたくはなかったさ。

他人の抱える事情や、過去だなんて。

滋野井選に関して、同情とか同族意識だとか、そんな面倒臭い感情を持ち合わせていたわけではない。

『あいつ、二年前に家族を失ってるんだ』

先程の真葛ヶ原の言葉が、ズキリと脳裏に蘇る。

だから何だというのだ。それで殺人が肯定されていいはずがない。滋野井が狂った正義感に目覚めたのは、確かにそれなりの理由があった。しかし彼の行動は到底賛同出来るものではない。畜生が。何が抵抗だ、復讐だ。結局は単なる八つ当たりじゃないか。

そんなことで、お前の家族が喜んでくれるとでも思っていたのか。

「……アイツは、俺自身だったんだよ」

だからこそ、出来ることなら《こちら側》に戻してやりたかった。自分と同じ道を選んで欲しくなかった。

似たような境遇を——痛みを背負い込んだ者同士だから？

それとも偽善心。違う。あるいは贖罪。否。もしくは罪滅ぼし。

まさか。つまりは酔狂。ほざいてろ。

これは、傲慢で、自分勝手なただの我儘でしかない。それも承知の上で、滋野井選の暴走を止めてやりたかった。傷口を掘り返されるような、見なくてもいい《失敗》を、まざまざと見せ付けられることから解放されたかったからだ。それにこれは、ただの嫉妬に過ぎなかったのだ。

絶望と悲しみに嘆いて、その果てに発狂出来る滋野井が、自分は心底羨ましかったのだ。妬み、嫉み、憧憬の念さえ抱いていた。故に、どんな手を尽くしてでも滋野井選の邪魔をしたかっただけなのかもしれない。

ほら、善意なんて脛毛ほどもない。自己犠牲の精神なんて欠片も有していない。そうだ、それでいい。

結局は、自分の為に過ぎないのだ。

「ああ……それでいいんだ、峰条真黍」

誰かにとつての敵であれ。世界にとつての悪であれ。味方なんぞいると思うな。孤立無援の忌むべき白い鴉たれ。

真黍はそう自分自身に暗示の如く言い聞かし、この不愉快な不可解さを舌の上で反芻させてから、

「クススッ」

容赦なく噛み砕いてみせた。



殺してしまった、か。

いくら彼を――峰条真黍を守る為とは言え、結果的に滋野井選を殺害してしまったことは事実だ。こちらとしても大いに誤算である。

まあ、いいか。

仕方ない。仕方ない。仕方ない。

やってしまったことは――過ぎたことをくよくよと考えても致し方ないことだ。自分は、ただ彼の傍にいらればそれでいい。

例え冷たく突き放されたとしても、遠く離れた場所からであつても。

憎まれても、嫌われても。

ただ、彼との繋がりがありさえすれば、それでいい。
しかし、それにしても。

さて、この死体……いったいどうしてくれよう？

013 (後書き)

あいぎー。

それからしばらくの間、事の次第を静観してみたが、警察は滋野井選の発見どころか、その足取りすら掴めていなかった。未だに地道な聞き取り調査を繰り返している段階で、次のステップに移行するまでにはまだまだ程遠い現状。というよりも、現在は先日起きた市街地での爆発事件に人員を割かれているのだろう、と真黍は心中で察する。ガス爆発だとか、新手のテロだとか、縦横無尽に情報が錯綜しているが、真相は特にハッキリしていない。

手元にある某ゴシップ週刊誌には、爆発する以前に『箒』を持った青年や、大槌を振り回していた女が目撃されており、それら事件との関連に注目している。何でも、軽トラ一台を吹っ飛ばしていただとか、ビルの上を飛び去っていっただとか、かなり眉唾モノな記事内容であったが、

「アホらし」

屋上のフェンスに背中を預けながら、真黍は独りごちる。

所詮は三流ゴシップ雑誌だ。到底信用には値しない。

こういった胡散臭い世俗的な雑誌が、意外に核心をついたネタを転がしていることがままあるのだが、やはり過度な期待は寄せない方が正しい。何気なくコンビニで購入したものだが、案の定財布から小銭が消えるだけの結果に終わった。

真黍は週刊誌を鞆にしまい、代わりに携帯を取り出して弄り始めた。

結局のところ、警察の収穫を気長に待っているわけにはいかない。こちら側が動かなければ、事態は一向に変わることなく淀んでいくだけだ。

ポケットからマルボロを手に取り、一本口に咥えた。百円ライターで点火し、のんびりと吸い込む。メンソールの冷たさが喉を潤した。

「ああ、やっと見つけた」

ふと声がした方を見遣ると、後輩が肩で息をしながら、屋上の入り口に凭れかかっていた。

「よう、キク」

どうにもご機嫌斜めな空気を肌で感じて、真黍はあえて優しげな声音を出す、

「よう、じゃありませんよ先輩。けっこう探してたんですから」
ブツブツと文句を垂れながら、真黍の傍まで近寄ってくる。

「ふーん。で、何か用か？」

「うわー！ この人自分で呼び出しておいて！」

彼女ご自慢のポニーテールが、ぷりぷりと可愛らしく左右に揺れた。

「放課後部室に来说って、今朝言ってたじゃないですか」

「え……あ、うん、言ったかもしれない」

「かも、じゃなくて言っただけです！」

「ああもう、分かったからそう耳元で怒鳴るなよ。元気だなあ、何かいいことでもあったのかい？」

冗談めかして言っただけだが、何故だか、菊子は息詰まったように沈黙した。訝しげに思った真黍は菊子の顔を覗きこむが、

「んー、キク？ おいキクちゃん？ なあ菊の字。キク次郎やーい」

菊子は真黍の視線を避けるように身じろぎした。

「菊子」

何気なく、久しぶりに彼女を本名を呟いてみると、

「い、いきなり名前で呼ばないでくださいよ」

気持ち悪い、と辛辣な台詞で真黍の心をメッタ刺しにした。

「かつはあ……今更ながら、クソ生意気な後輩を持って俺は幸せだ」
「ならもつと喜んだらどうです」

そんな皮肉の応酬をしばらく続けてから、不意に真黍は馬鹿らしくなって屋上のアスファルトに座り込んだ。

「ホント、先輩って性格悪い紳士ですよ」

「なら、お前は可愛くない淑女だよ」

そんな掛け合いを最後に、しばらく会話が途切れた。真黍は特に居心地悪そうでもなく、マイペースに喫煙し続ける。

「……煙草は、身体に悪いんですよ」

菊子が不機嫌そうに声を低くして忠告するが、真黍はケラケラと一笑に付して相手にしなかった。挙句の果てには「キクも吸うか？」と薦めてくる始末。

「馬鹿じゃないですか」

「確かに……お前を呼んだ用件も忘れちまうぐらいだし」

「忘れちゃうほど、大した用件ではなかったと？」

「かもなー」

「……まったく、先輩はいつもそうです」

菊子は気が抜けたように溜息を吐いてから、ごく自然な動作で真黍の隣に腰を落ち着けた。

「いつも不真面目で、斜に構えてて、人のこと見透かしたような物言いで、あたしのことだって、もうちょっとくらい真剣に考えてくれたって――」

「あつ」

そこで、真黍が間の抜けた声を出した。突然自分の台詞を遮られた菊子は少々ムツと顔をしかめながらも、「いったい何ですか」と応対する。

「用件、思い出したわ」

「はあ……今頃ですか。それで、今度はどこへ使いつパシリですか？」

ブスーと唇を尖らせている菊子に、真黍は虚空を仰ぎながら、ヘリウム並に軽い感じで。

「キク、俺とデートしないか？」



現上乃姍が屋上に足を踏み込んだ瞬間、掛井菊子は彼女と入れ替わるようにして早足で立ち去っていった。菊子は擦れ違い様に目を合わせぬようにして会釈し、乃姍も気まずそうに視線を返しただけだった。

「やあ、真黍くん。こんなところにいたのかい」
一瞬にして嬉々とした笑顔を咲かせた乃姍は、つかつかとこちらに向かってきた。

「今のは後輩くんだったね。なんだい？　こんな人気の無い場所で逢引とは、非常にいただけないな」
笑みを絶えずキープしたまま、乃姍はあくまでも明るい調子で言う。

「そんな風に見えたか？」

「否定はしてくれないんだね」

悲しいな、と乃姍は屋上の端まで歩き、例の真新しいフェンスを掴んだ。

「……それにしても、随分と私も嫌われたものだね、後輩くん」

「そうか？」

と何となく惚けてみるが、

「私の顔を認めた途端、脱兎の如く逃げていったじゃないか」
どうやら誤魔化し切れるものでもなかったらしく、真黍は肩を竦めて苦笑した。菊子が乃姍に対して過剰なまでの苦手意識を抱いていることは、前々から熟知していた。まあ、別段理由までは把握していないが。

「で？　いったい、何の話をしていたんだい？」

「……………」

乃姢の問いかけに、真黍は急に押し黙った。

「ふふっ、やっぱり、どうしても私を——今起こっている何かから遠ざけたいんだね」

「……悪い」

「謝らないでくれよ——それに、真黍くんは何に対して謝ってるのさ？」

「お前を、関わらせたくないんだ」

「それは優しさかい？ それとも単なるの偽善かい？」

「……いや、ただの独りよがりな自己満足さ」

「はてさて、君らしくもない」

いや、或いは最も君らしいと言うべきかな？

と、乃姢は嫌味ったらしくも微笑むが、反対に真黍は無表情のまま、二本目の煙草にライターの火をかざしていた。

「私にも貰えるかい？」

そう言うや否や、真黍が唇で挟んでいた一本を強引に奪い取り、自分の口元に運んだ。相変わらず彼女の口調や態度はブレることを知らなかったが、仕草の一つ一つにピリピリとした不愉快さが窺えた。胸の内では彼女に申し訳なく思いながらも、真黍がそれ以上の言及を示すことはなかった。

しかし、最後に一言だけ。

「……煙草は、身体に悪いんだとさ」

「何を当たり前なことを。だから吸うんじゃないか」

違う、と真黍が口端を歪めて自嘲する様子を、乃姢は不思議そうに見つめていた。



「ふ？ ふ、ふ……フランケンシュタイン」

「ンジャメナ」

「な、ななー南京？」

「ンゴロンゴロ自然保護区」

「栗きんとん！」

「ンジャジジャ島」

「う……うー、ウィークボソン」

「ンコモ」

「もう飽きた」

そう吐き捨てて各務奈直は、部屋でパソコンに向っている真黍の背に枕を投げつけた。退屈だということで仕方なくしりとりに付き合ってたやっただいというのに、まったく何という暴挙であろう。理不尽極まりない。上告して最高裁に訴え出てもいいくらいである。

「もおーつまんなーい。君のその反応もつままないよお。もっとユニークなリアクションをとったらどうだい？ 僕の先輩なんか、多少のボケでもゲロ吐くぐらいのリアクションはとってくれたよ」

ひとのベッドで子供のように駄々を捏ね回す各務。夕飯を済ませてからずっとこんな調子である。ふむ、食卓のおかずが、『ごはんですよ』オンリーだったのが依然として尾を引いているのだろうか。それにしても何だかんだで……いや、言い訳がましくなってしまうのは、我ながら情けなくもあるのだが、この自称殺人鬼との日常がとことん板についてしまった自分がある。まったくもって遺憾に思うのだが、不思議としっくり彼女との同居生活に順応してしまっただこの状況。ふざけてる。

仮にも年頃の男女二人が一つ屋根の下で生活を送っているわけなのだが、別段これといったドキがムネムネするような展開はいかんせん訪れていない。ハッキリ言って皆無である。各務は各務で一日中部屋にいるわけでもなく、はた迷惑にも真夜中になってから帰っ

てきたり、日の出と共に帰還することもあるので、真黍的には、気まぐれな黒猫にいつかれたような感覚だった。

「そういや、真黍くん。最近僕に出てけとか言わなくなったね」

と、いつ頃からか包帯の巻かれている手をヒラヒラと左右に揺らす。

言って素直に出て行ってくれるのなら、こんなに苦労はしない。

「こうなると、せめて家賃ぐらいは頂戴したいところだがな」

彼女が一文無しなことを承知で、真黍は嫌味を突きつけるが、

「ノーマネーノーライフ。というわけで、払えとしたら、この身体くらいなのだけれど」

ムフフフツ、と各務は艶かしくも目を細めるが、真黍は至極冷めた瞳で、

「あ、そ。なら知り合いの業者でも紹介してやろうか。腎臓か、眼球なら需要は高いし、それなりの収入にはなるだろ」

「……君ってば、歳相応のリアクションというものを本格的に学んだほうがいいと思うよ。磯辺のイソギンチャク並みに可愛くない」

全国のイソギンチャク及びイソギンチャクファンの皆様に大変失礼な物言いをしてから、ブスーと頬を膨らませる。

真黍にとって各務奈直は、悲しいぐらいに欲情の対象にはなり得ない。いや、決して各務に魅力がないと言っているわけではなく、むしろ彼女は余裕で美人の部類に属するだろう。元々酷く中性的な顔立ち故に、男女問わず彼女の美貌の虜になる者も少なくないと思われる。

しかし、真黍は知っている。この人間の本性を知ってしまったているのだ。

自称殺人鬼。平気の平左で他者に本物の殺意を向けられる人間だということ。

「まあ今更、出てけこの穀潰しの寄生虫野郎、とも言わずらいしな」
「滅茶苦茶言ってるじゃないか……まあ、そういう諦観染みた優しいところ、けっこう好きだよ。僕の先輩にそっくりで」

「……前々から気になってたんだが、アンタの台詞の端々に出てくるその先輩って何よ？」

「時に真黍くん。君に後輩はいるかい？」

真黍の質問をぶった切って、各務は唐突にも訊いてきた。

「後輩……？ んまあ、いるっちゃいるが」

脳裏で菊子のことを思い浮かべて、何となく苦笑した。

「それはけっこう。後輩は大切にしないとね」

「つまり何だよ？」

「つまり、僕にも後輩だった頃と、先輩だった人がいたということだよ」

——殺人鬼の先輩？

「ハッ、もしかしてそのお方も、人を殺して狂喜しちゃう奴だったのかよ？」

真黍は多少の揶揄を含んで言ってみるが、思いのほか、各務は朗らかに破願した。それは、彼女が見せる初めての表情だった。

まるで、大事にしまっておいた宝物を、再び手の平に乗せて愛でるかのように。

単に子供というよりは、純真無垢な幼い少女のようで。

ふと、妙な寒気が背中を駆け抜けた。

「いや——ただの『人間失敗』だったよ」

性別のはっきりしない彼女が、唯一覗かせた少女らしい笑顔で。

「僕がそう名づけて、代わりにあの人は僕を『殺戮嗜好』^{ノックトリターン}と呼んだ」
強くて。優しくて。かっこよくて。

「そして誰よりも、可哀想な人だったよ」

君みたいだね、と各務は胸糞悪い音程を漏らした。

014 (後書き)

更新遅くてすみませーぬ。

人ごみは嫌いだ。人の密集する場所が嫌いだ。

極端に言い換えれば、人間が嫌いだ。

真黍は込み上げる嫌悪感を堪えながら、駅の切符売り場付近で腕時計の針を気にしていた。

午前十時十七分。

真黍の目の前には、絶えることのない人の波が四方八方に流れている。時折、厚化粧をほどこした妙齡の女性や、姦しい少女達が真黍に色のある熱い視線を送っていたが、真黍自身は気づいているのかそうでないのか、まったく意に返した様子はない。

「せ、せんばあい！」

そこへ息を切らせて駆け寄ってきたのは、言わずもがな後輩の菊子である。歩き難そうなヒールサンダルで走ってきたせいか、その足取りは小鹿のように覚束なかった。

「まっ、待ちましたか？」

膨らみがまるでない胸元に手を当てて、呼吸を正常に戻してから、菊子はテンプレのような台詞を吐く。

「まったくもって十七分の遅刻だ」

「……そ、そこは、『いや、俺もちょうど今来たとこさハハハハ』みたいな返しを期待していたのですが」

「少女漫画の読み過ぎ」

「予定調和も、大切なんですよ」

「セオリーなんて糞喰らえだ」

そう投げやりに吐き捨ててから、一人でにさっさと歩き出してしまふ。

「ま、待ってくださいよお」

その背中を懸命に追う菊子。

休日であるが故か、大通りも人で溢れかえっており、二人が離れ離れになることは断じて難しくはないだろう。そんな可能性を抱いた真黍はおもむろに立ち止まり、一度軽く溜息を吐いてから、追隨してきた菊子の手をぐいっと掴んだ。

「うわ、わ、わ、せせ先輩……」

菊子は狼狽したように真黍と、真黍によって握られた手を忙しくも交互に見比べる。

「はぐれんなよ」

「あ、あたしそんな経験値高くないですっ」

「……はぐれたら殺す」

「ひい」

真黍の青筋を浮かべた笑顔に、菊子は思わず悲鳴を上げ、そのまま引っ張られるようにして連行されていく。

さて、ここまでの流れから誰もが察することが出来るように、二人はデートの真っ最中なのであった。



駅前から徒歩十分ほどの場所に、某大型ショッピングモールが新しく店を構えたらしい、という報せを小耳に挟んだのは先々週のこ。一日では決して見回れないぐらいの規模に、多種多様な店舗が収容されており、中には映画館やゲームセンターなどの娯楽施設なども完備してあるとか。今時ショッピングモールの一つや二つで別段騒ぐことでもないのだが、何度かテレビの取材も受けるほどにはそれなりに知名度も高く、菊子も前から『いいなあ、近場だし、あたしも行ってみたいな』などと零していた。

今回のデートスポットをこの場所に決めたのも、ひとえに真黍が菊子のそんなばやきを覚えていたからである。

「ねえ先輩、この花柄のワンピースとか可愛くないですか？」

「あーいいね、新世界とか目指せそう」

「……じゃ、じゃあ、このブラウスと、こっちのパーカーだったら、どっちがいいと思います？」

「それよりもあっちのポンチョがいいんじゃないかね、レディ・ガガとかが着てそうな」

「その……ズボンは、えーと……」

「むしろ何も履くなよ」

「もう、ちゃんと真面目に答えてくださいよっ」

「今の時期ワンピースなんて止めとけシフォン系なんてなおのことお前のガラじゃないしむしろ此間のショートパンツみたいな短いボトムとニーソックス攻めで美脚を見せつけろレギンス・トレンカなんかに頼るなダサイんだよあとフリルのミニスカだなんてムカつくの代物は絶滅させろそれから今年の流行色はクロムイエローだからそれに何か対応した白シャツなんかを――」

「的確すぎる回答をありがとうございます！」

若干涙目で頭を下げる菊子に、真黍は憮然とした態度で店外を指差す。

「そろそろメシにしないか」

携帯電話の時刻を確認すると、既に一時半を回っていた。

「あ、はい。そうです、ね」

どこことなく肩を落とした菊子であったが、マイペースに真黍は両手に紙袋を抱えて服屋を出た。現在地の三階通路の吹き抜けから、ぐるりとモール内を見渡してみる。バーミヤン、満員。マクドナルド、混んでる。回転寿司――いや、やめておこう。ラーメン『豚骨亭』……流石にがつつり過ぎる。

「キク、この際ミスドでもいいか？」

まばらに席も空いていて、小腹の減りを治めるにも都合がいい。

「あたしは別に何でもいいですけど」
後輩からの了承がとれたところで、真黍は彼女と連れ立ってドーナツ専門店の暖簾を潜った。



「……休日だけに、やっぱ人が多いな」

トレイに並んだ三つのフレンチルーラー各種を均等に食べ進めながら、真黍は窓際の席から、店先の通りを眺める。

「そうですね」

もしかもしゃ、と四種類のポンディングを栗鼠のようにかじっている菊子に、真黍はクスツと微笑ましくなった。

「南アフリカじゃ、ショッピングモールに武装した警備員がいるらしいな」

「でもアメリカじゃ、よくゾンビの集団が押し寄せてくるらしいですよ」

「――『ドーン・オブ・ザ・デッド』？」

「そっちはリメイク版ですよ。そこは素直に『ゾンビ』と言って欲しかったです」

「そりゃ失礼をば」

「走るゾンビなんて、ゾンビじゃありませんよ」

「そういやどうしてロメロは、『バイオハザード』の監督をやらなかったんだろうな」

「原作重視のロメロと、製作側の意見が割れたんですよ。まあ、彼の撮った『バイオハザード』も観てみたかったです、アレはアレで成功しているとは思いますがね」

来年には第六作目も公開することですし、と菊子は手元の珈琲を不味そうに飲んだ。自分でブラック頼んだくせに。

「観たいのか？」

「うーん……何だか情性っぽい続編なんですけど、それにミラ・ジョヴォヴィッチもいい加減四十代に突入寸前だし……まあ、観たいっちゃ観たいんですけどね」

一介のゾンビマニアとして、と菊子は苦笑しながら二つ目のポンディングに手を伸ばした。キレイな指だな、と何となしに真黍は思った。ネイルアートの類はしていない、ただ純粹に、白く滑らかな肌。何となく視線を上げると、胸元が大きく開いたブラウスから、ハート型のネックレスがひっそりと覗いていた。

置き場所に困った目を落とすと、紙コップに注がれた真っ黒な液体が、暢気に湯気を立てていた。

自分が大嫌いな飲み物が、そこにはあった。

「んじゃ、観にいくか」

「ふえ？」

モゴモゴとポンディングを頬張っている菊子からのそんな間の抜けた反応に、真黍はむすっと眉間にシワを寄せた。

「来年、一緒に観にいくかと言っている」

ジトツと睨んでやると、菊子は慌てふためきながらも「は、はい！」と力強く首肯した。

「それにしても、ホントお前ゾンビ好きなの」

「んー……好きっていうか、何か親近感わくんですよ」

どんな親近感だよ。

そう心中でツツコミを入れてから、真黍は自分の珈琲にも口をつける。そして、わざとらしいぐらい改まった語調で開口した。

「キク、もう俺なんかと関わらなくてもいいからな」

「……………え？」

半口をあけて、呆氣にとられたように瞠目する菊子。

真黍は、そのまま変わらぬ調子で続ける。

「そもそもさ、お前が俺のパシリ——もとい『新聞部』に入部したのは、入学したての無知なお前が、フラフラと校舎をさまよっていた折に、誤って『新聞部』の部室に入り込んでしまい、挙句の果てには俺が揃えておいた特殊機材諸々を、ものの見事にぶっ壊してくれた責任を負わせるためだった」

元々、自分以外の侵入を想定していなかったもので、棚の上に微妙なバランスで配置しておいた機材が、雪崩を起こしたのも無理からぬことであろうが。まあ、菊子自身にも幸いなことに怪我はなく、だったらキツチリと身体で払って貰いましょうかという次第になったのが、ちょうど半年前。

「俺もその時期多忙を極めてたからな、雑用を押し付ける手頃な駒が必要だった」

この学園の事情や、自分や真葛ヶ原についての予備知識がない、どこまでも一般人な使いっぱしりが欲しかった。

「しかし結局は、それも一時的なことではなくて、雑用係の必要性は薄くなった。お前が破損させた機材だって、もう弁償とやかくは言わない。この半年間の働きで、全てチャラにしてやる」

だからもう、俺の為に動かなくていい。

「……つまり、あたしはもう用済みってことですか」

「要約すれば、そうだな」

声を低くし、俯いてしまった菊子を見据えながら、真黍は畳みかけるように言う。

「なあキク。お前、友達とかいる？」

菊子は沈み込むように押し黙った。

「意地の悪いことを訊いたのは承知してる。俺みたいな悪い噂しかない奴とつるんでるだけで、ハブられる理由には十分過ぎる。大丈夫さ。お前の明るさなら、すぐにでも友達百人作れるから。その為の下準備だって全部引き受けてやるよ。もちろん、無償でな。事後処理ってわけじゃねーけど、キクが望むような学園生活を俺がすぐにでも用意して——」

パンツ、と唐突にも菊子がテーブルを拳で叩き、真黍はすうと感情を消した。

「あたし、何か先輩の気に障るようなことしましたか……？」

顔を下に向けながら、菊子の声調は若干その軸を失っていた。

「いや、お前はこれまでよく働いてくれたよ」

「……じゃあ、何で今更、そんなこと言うんですか。先輩は、あたしがいたら、迷惑ですか。あたしは今まで……先輩の為に骨を折ってきたんですよ？ 深夜の呼び出しにもちゃんと応じました。真夜中の街を一人で徘徊するのはとっても心細かったです。死の危険を感じるような目にも、いっぱい遭いました。だけどっ——」

「だからもう、俺との関係をリセットしてくれていい」

菊子の台詞を遮るように、真黍は温度を感じさせない声音で言い放った。

「……まったく、先輩ってばいつもそうですよね」

相手の気持ちなんて、ろくに考えてもくれないんですもんね、と菊子は俯いたまま目元を拭った。対する真黍は、冷めたような沈黙を貫いていた。

「あたしが……今までどんな気持ちで、先輩の手伝いしていたか分かりますか。友達とか、そんなのはどうでもいいんです。元よりあたしには、必要のない概念なんですから」

「……………」

菊子は、吹っ切れたようにゆっくりと面を上げる。その時見せた彼女の表情を、真黍は恐らく生涯忘れはしないだろう。

「この際ですからね、言ってしまうですが……あたし、先輩が好きです」

唇を小刻みに震わせながら、菊子は今にも壊れてしまいそうな儂い笑みで。

「ずっと、ずっと、先輩のことが好きでした」

知ってましたか？ と菊子は小首を傾げる。

「ああ」

知ってたとも、と真黍は小さく頷いた。

「だが俺は、お前に特別な感情を抱いたことはない」
きつと、これから先も。

「あたしだって——そのくらい知っていましたとも」

そう言つて、菊子は椅子を蹴つて立ち上がった。

「今日は……本当に楽しかったです。ありがとうございました。ええ、何となく予感はしてたんです。なので、思つてたよりダメージは少なくて済みました。というか、むしろ肩透かし喰らった気分です。だから、全然気にしないで——いや、先輩はそういうの平気な人ですもんね。なら、あたしも安心です」

「……言いたいことはそれだけか」

「——それじゃあ、最後に一つだけ」

足下に置いてあつた紙袋を掴み、菊子は一度浅く息を吸い、

「傍に、いたかったです。どんな形でもいいから、あたしは、先輩の傍にいたかった」

ただ、それだけでよかったんです。

物静かに去っていく菊子の背中を、真黍はぼんやりと見送った。

015 (後書き)

「のお、司^{つかさ}。見てみいあの男、連れとった女を泣かしおったぞ」
「バカッ、やめろ箒。お前の声や姿がいくら一般人には認識出来ないからって、他人をそう指差すな」

「かっかっか、そう怒るでないわ。わしも暇なのじゃ——あん？」
「ん、どした？ エンゼルクリームならさっき食っただろ」

「違うわたわけ。じゃなくての、あの男、今わしを睨んだような——
—気のせいかな？」

紅い着物の少女をギロツと一瞥してから、真黍は会計を済まし、某ドーナツ専門店を出る。親子連れやカップル同士で賑わう空間に背を向けて、真黍は出口を目指した。ショッピングモール。公用以外では、もう二度と訪れはしない場所であろうなあ、としみじみ思いながら。

そこで、ふと。

「……各務^{かがみ}？」

一瞬、視界の隅に見慣れた居候の後姿が映ったような気がして、何となく視線を追ってみるが、すぐに諦めた。彼女がこんな場所にいるわけがないし、いる意味も分からない。きっと目の錯覚か何かだろう。

「ついに、俺もヤキが回ったかな」

あんなタダ飯食いの残像を浮かべてしまうだなんて、まったくどうかしてる。

クススツ、と真黍は少々複雑な思いながらも、心の底から自嘲した。



どこからか焼き魚の香ばしい匂いが漂ってくる、夕暮れ時の住宅

街。真黍は両手をズボンのポケットに突っ込みながら、ぼんやりと今日一日のことを思い返す。

見失うことのないように菊子の手を引き、街中を突き進んだ。途中、クレープの移動販売車があり、せっかくなので二人して行儀悪く食べ歩きをした。デパート内の洋服屋では、自分が適当な評価を下すたびに、菊子はコロコロと表情を変えながら一喜一憂して、それで――

――ただ、それだけでよかったんです。

何が、よかったというのだろう。

こんなろくでもない男の傍にいて、お前にいったい何のプラスがあった？ 優しく接した覚えはない。むしろ冷酷に、不真面目に相對してきた。それなのに、どうしてお前は、俺にそんな浮ついた想いを寄せてしまったのか。

好きだの嫌いだの、惚れた腫れたなどいう、無意味で無駄な感情を抱いてしまったのか。

キク、お前にだって解っていたはずだろう。ならばいっそのこと、胸中に押し込むだけではなく、そのまま押し潰して――押し殺してしまえばいいものを。

どうせ、傷つくだけの破片であるのなら、躊躇せず道端にでも棄ててしまえばよかったのだ。

『お前を追い詰めるのは、いつだってお前自身なんだ。だから、もっと生きること之余裕を持ちな、マキ。でなきゃ、いつか大きな《失敗》を仕出かしたときに、自力で立ち上がることも出来なくなってしまう』

煙草を吸いながら、そんな訓戒めいたことをぼやく伯母の姿が脳裏に浮かんた。どうしたというのだろう、こんなまったく関係のない場面で。もしか、虫の知らせか何かだろうか。一応、あとで連絡を取ってみよう。

「って……匂いの原因はあんたか、千五百^{ちいほ}さん」

側面全てに蔦が伝っている不気味に寂れたアパート――もう随分

と見慣れてしまった我が住処。その庭先にて、お隣さんの神支那千五百ちいほがうちわを片手に七輪と睨めっこしていた。

真黍は溜息を吐きながら、彼女に近寄る。

「あ、マキくん。おっかえりーん」

「何やってんすか、こんなところで」

「何って、秋の味覚、さんま様ですによーん」

秋の刀の魚でっせダンナ、とパタパタとうちわで七輪を扇ぎ続ける隣人。金網の上では、二匹の秋刀魚が炭火の熱気にじゅうじゅうと音を立てている。彼女の足下には、未開封の缶ビールが暑そうに結露を滴らせていた。

まあ、今時には随分と粋な調理風景であるが。

「マキくんも一緒にする？」

しゃがみこんだままの千五百が、期待に満ちた瞳で真黍を見上げる。

「……遠慮します」

あらそう、と千五百は至極残念そうに眉を八の字に下げた。

「一人でお夕飯は寂しいなあー……」

なおも未練がましく追加攻撃をしかけてくる千五百の視線と呟きを無視しながら、真黍は自室のドアに身体を滑り込ませた。

コンバースのスニーカーを無造作に脱ぎ捨て、一息吐きながら短い廊下を渡る。辿り着いた先は、これ以上ないくらいに落ち着く八畳一間の空間。しかし、そこで初めて居候の姿がないことに気づいた。まあ、腹が減ったら帰ってくるだろう、と真黍はベッドに身を横たわせながら、今夜の献立を脳内で組み立てようとしたが、途中で面倒臭くなった。

けれども、自身の小腹の空き具合を見かねて、冷蔵庫の中身を確認しようと真黍が台所に足を運ぶと――一瞬にしてそこはかかない虚脱感が彼を襲った。

『今までお世話になりました。B Yステキな殺人鬼より』

冷蔵庫の扉に磁石で留められていた張り紙……というよりもチラシの裏。

嫌な予感を孕みつつ、冷蔵庫の中身を確認してみたが、果たせるかな最低限の調味料や生野菜などを残して、ほとんど空っぽだった。

「……俺のプリンが」

冷蔵庫を背に、尻餅を着いて笑う真黍。

立つ鳥跡を濁すどころか、漁って荒していきやがった。

しかしこれで、ようやく自分は独りになった。物理的にも、精神的にも、めでたく自分は孤立無援になったのだ。愉快、愉快だ。これでもう、自分を縛る繋がりは何もない。恋人を気取った『現上財団』の令嬢も、先輩、先輩と喧しくほえる生意気な後輩も、自称殺人鬼の居候も、皆自分の周囲から乖離していった。

全て、リセットだ。

案ずることはまるでない。ただ、元に戻っただけなのだから。

七年前と、同じく。

「……………」

ひとしきり乾いた笑い声を響かせた後、真黍は冷蔵庫の中から各務に押収されなかった数少ない生き残りである大根を取り出し、ゴシゴシとすりおろしてから、醤油を三、四滴垂らした。それから炊飯ジャーに残っていた白飯を全てにぎり飯にする。おまけに少しの漬物も添えて、真黍は千五百のもとに向った。

「夕飯、ご一緒してもいいですか？」

小皿に盛った大根おろしと、おにぎりを両手に抱えた真黍が、寂しそうな彼女の背中に声を掛けると、

「もう、マキくんのツンデレさんめっ」

怒った口調ながらも、千五百は嬉しそうに顔を綻ばせながら振り返った。



黒猫がニヤニヤとほくそ笑みながら、こんな情報を自分に漏らした。

どうやら、あの女も彼に突き放されていたとのこと。

ふん、いい気味だ。しかし、結局は同じスタート地点に戻ってきただけということ。決して邪魔者が自分の前から消えたわけじゃない。自分の周りには数多くの弊害と障害が睨みをきかすように囲んでいる。

そう例えば、先日受け取ったこのメール。

あのメス豚から送られてきた、陳腐な警告文。

大雑把に要約すれば、貴様がやったことの罪を公に認め、今すぐ彼から離れる、というような旨だった。つまりは自首しろということか。

「ふざけるなよ」

奥歯が磨り減るほどに、歯軋りを鳴らす。

自首しろだと？ ハッ、笑わせる。お前は、自分から彼を奪うつもりなのだろうが、そうはさせるものか。

自分に唯一残されているモノは何だと問われれば、それは使命であり、宿命であり、運命である。自分は胸を張って堂々と答える。

自分の存在意義も、存命理由も、全てがそれらに縋っているのだと。あのキチガイ共が住まう家にいた頃から、自分は彼を想い続けていた。ただ、彼が人類の悪として、世界にとっての敵として完結するその時を、この目でしかと見届けるために。

お前でも、貴様でもない。

父が成し遂げられなかったその完成を、他でもないこの自分が果たすために。

だから、彼の完成を邪魔する者は例外なく排除する。あの滋野井と同じように、だ。

みんな等しく殺してやる。

だがしかし、決して彼だけには悟られることなく。

ひとえに、彼の傍に続けるために。

人間の色覚はいわゆる光の三原色であるが、昆虫の場合は紫外線、青、緑を感じる三種類の細胞があるという。それはいったいどんな世界なのだろうとか想像を巡らしても栓のないことだが、ミツバチにいたっては『光の波』さえ視認可能で、それを頼りに帰巢出来るのだから大したものである。

だがいかんせん、自分のような人間には三原色どころか、世界は白と黒の二色でしか構成されていないのだ、と真黍は心中でやれやれと嘆息する。それも中途半端に単色で在り続けることから逃げ出した者に、救いようななどあるはずもない。

結局、白に染まることは難しく、かといって黒に戻ることも今更過ぎた。

だから、どっちつかずのグレーの層を理由もなく漂い、目的も定めずに彷徨っている。ただ思考がぼんやりと鈍っていくのを認識しながらも、ズブズブと自堕落に埋没していく。

人生を華やかにしたいのであれば、より刺激的な毎日を謳歌するべきだ、という意見がある。

経験則から物を言わせてもらえば、そんな日常が魅力的だとは微塵も思えない。幸福なんて代物は時期が来ればワゴンセールで叩き売りされる程度の価値しかなく、わざわざ危険を冒してまで求める必要はないのである。

これまでに数々の事件に遭遇してきたからこそ、真黍は断言出来る。

刺激に満ちた毎日よりも、惰性に埋もれた日常を。

何か得るために、また何かを失わねばならないのなら、そもそもそんな選択肢など必要ないのだ。ギャンブルを人生の主軸に適用してはいけない。

『それが君の哲学かい？』

どういった経緯からは忘れたが、前述のような話題に興じていた折の各務からの質疑。

『まあ、それが君の生き方であれ、生き様であれ、僕が口を挟むような余地なんてないわけだが、一言だけ物申してみるなら——そんな人生に意味なんてあるのかい？』

明らかな忍び笑いを浮かべつつも、各務は真黍の反応を注意深く見つめた。真黍はニヒルに口元を歪めて、居候の殺人鬼に反駁する。『なら自分の人生の意味ってのを語れる奴が、いったいどれだけいるかって話だ』

そこまで思い返してみても、真黍はゆっくりと周囲を窺ってみる。

最低限の遊具しか配置されていない殺風景な公園。

少し前に、真黍がしげのいすぐる滋野井選に殺されかけた現場。

同時に、それ以後の彼の消息がパツタリと途絶えた地点。

真黍はプカーと紫煙を吐き出しながら、塗装のはげたベンチの背に体重を預けた。せっかくの休日だというのに、子供の影すら見当たらない。

「まあ、物騒な世の中ですからねえ」

現に、こんなロクデナシが当てもなくブラついてるわけですから。と、自虐的に笑っていた不良学生の上着のポケットから、『天国と地獄』のメロディーが流れた。携帯である。真黍は表示された名前を確認してから、通話ボタンを押す。

「はい。『似て非なる物』こと、佐藤俊雄です」
シュガーアンドソルト

『聞いて二秒でばれるような嘘は吐く意義がないと思うよ、真黍くん』

声の主は、呆れたように笑った。

「円居先生こそ、いきなりどうしたんですか——まさか、小麦になにかありました？」

声の主——妹の主治医である円居円に、真黍は声を陰しくさせる。『いやいや、変に勘繰りすぎだつてば。小麦ちゃんなら今日は外に出て、気持ち良さそうに日向ぼっこしていたよ。だから安心しなよ、

お兄ちゃん』

さいですか、と真黍は浮かしかけた腰を再びベンチに落ち着かせる。妹のこととなるとつい冷静さを失ってしまうのは自分でも悪い癖だとは思っているが、どうしようにも矯正のしようがない。

「なら、用件はなんですか」

『もお、真黍くんはせっかちだなー。暇を持て余した精神科医とお喋りに付き合ってやるくらいの余裕を見せたほうが、人間としての器がうんたらかんたら』

「最後まで諦めないでください」

自ら説得力を放棄してどうするか。

『んまあ、真黍くんの声が聞きたくなっちゃった、みたいな？』

「はあ、そうすか」

『ふふっ。台詞だけ切り取ってみれば、なんだか恋人の台詞みたい？』

「どちらかと言えば、人を恋しがっているのは先生のほうですけどね」

『それではまるで、私が兎みたいな女だと言っている風に聞こえるんだけど？』

「兎が寂しさで死ぬとか、いつのネタですか」

あとあなたに兎みたいな可愛げはない、と真黍は心中で毒づく。

『それではまるで、私にバニーガールのコスチュームを着て欲しいと言っている風に聞こえるんだけど？』

「了解しました。あなたは今すぐ耳鼻科か、精神科の医者にも診てもらうべきです」

『私がその医者だが』

「そういえば、そうでした」

というかこの人、こんな不真面目トークを連発する性格だったかな。

ボケも何だか初々しさが感じられるし、もしかしたら会話を盛り上げようと気を遣ってくれているのかもしれない、と真黍はそんな

彼女の心遣い(?)に少しだけ申し訳なさを感じた。

『——とまあ、そんな具合に最近調子はどうかい。はーわーゆー?』

「I am fine thank you ……」と礼儀的に答えおくとしても、別にいつも通りですよ」

『そうかい? なにか、変わったこととかは』

「いえ、特には。変わったことなんて、何一つありませんよ」

『…………ふうん。いや、他意はないんだけどね。ほら、最近何かと物騒じゃない? 例えば、殺人鬼の一人や二人うろついててもオカシクないぐらいにさ——それこそ、リア充殺しのチェンソー男が現れたりしてね』

「大丈夫ですよ、今年はもう十三日の金曜日はないですから」

一度深く肺に吸い込んでから、全力で吐き出した。吸殻を携帯灰皿に落とし、二本目の点火作業に入る。

『そうそう映画で思い出したけど』

唐突な円居の話題転換に、真黍は訝しみながらも耳を澄ませた。

『全米のあちこちの下水道で、とある種類の魚だけが大量に発見されたという、奇妙な事件が過去に起きたらしい。その魚の名称は、カクレクマノミ。さて、ここまでの情報で何か分かることはあるかな』

数秒の間を置いてから、真黍は当てずっぽうで口にしてみた。

「……カクレクマノミと言えば、『ファインディングニモ』を連想しますかね」

『おや、いきなり核心を突かれちゃったよ。でも知ってんだね。もう十年以上も前の作品なのに』

「昔、金曜ロードショーでチラッと見たような」

とはいえそんな詳しくもないですけど、と真黍はかぶり振った。

『えーとじゃあ、大まかな概要を説明するとね——攫われた子供を救うべく、父親のカクレクマノミが奮闘する話なんだけど、その作中で子供の方が自力で脱出しようとして、誘拐された人間の家のトイレから下水を通じて海に帰るシーンがあるわけよ。その家は海辺

に面していて、下水が直接海に繋がっていたから子供は無事逃れたわけなんだけど、その場面を見た全米中の子供達が、いったい何をやらかしたと思う？』

電話口の相手は、もったいぶった調子で一拍置いた後、

『ペットショップでカクレクマノミを購入してね、そのままトイレに流しちゃったのさ』

「……………」

何とコメントすればいいやら、真黍はポリポリと後頭部を掻いた。
『子供ながらの拙い善意に過ぎなかったのかもしれない。でも実際は、単に大量の魚の死骸を下水に詰まらせたただけだった——ともあれ、これが事件の真相ってわけ』

「……いやはや、子供は無垢といえますか、残酷といえますか」

『その通りだよ、真黍くん。無垢が故の残酷さ。純粹が故の残酷さ。時にはそれが取り返しのつかない『失敗』に繋がることもある』

「で、結局先生は何が言いたいんですか」

ふふっ、と鼓膜をくすぐるような笑い声が響いた。

『現実と虚構を違えたとき、そこには滑稽な悲劇しか生まれないということだよ』

要するに、夢は見すぎるなってことさ。

「まあ、何ともリズムに富んだ高説をありがとうございます。にしても先生は、わざわざそんな話を俺に？」

『言っただろう、真黍くん。これは単なるお喋りだ。気の知れたもの同士で行う、他愛もないコミュニケーション。世俗の人間は、こういう交友関係を大切にするものだよ』

こーゆーこーゆー、と真黍はあえて口に出して唱えてみる。どうにも言葉遊びにしか聞こえない。

「はあ、そんなもんすか」

『まあ、そんなもんすよ』

感覚的に分からないでもないが、それが真に重要性の高いものなのかと吟味すれば、いかんせん真黍にとっては頷きがたい。

偏に、自分が他者という存在をそこまで必要としていないからか。結局のところ、他人はどこまでいっても他人でしかない。極論から述べれば、この社会も誰かを利用し、或いは誰かから利用されることによって成り立っている。例えば、自分と現上乃姍のような関係がそれであった。そんな殺伐とした現実には、ドラマティックな『繋がり』や、ロマンティックな『絆』といったモノを求めたって、枯れた井戸に釣瓶を落とすようなものである。

円居がのたまうように、夢は見すぎないほうが賢明なのだろう。そんな取りとめもないことをぼんやりと考えながら、真黍はもう少しだけ円居との歓談に花を咲かせてみるのだった。



小一時間ほどして、真黍は自宅に帰還していた。

しかしここで注意すべきは、携帯電話の通話状態が一向に継続したまま、ということである。

『――詰まるところね、昨今のラノベ業界の腐敗ぶりが取り返しのつかないところまできてるというのは悲しいかな事実なわけよ。マンネリ化してきた主人公しかり、設定しかり、お約束のようなハーレムしかり、みんな爆発しちまえと私は叫びたい。作者側のね、こう、『こういう展開やっとならばお前ら豚は喜ぶんだろ』みたいな思惑が見え透けるような、ないようなで腹立たしいねまったく。それは、まあいいよ。まだ許せるよ。でもね、最終的にさ、読者側に訴えかけるようなものが全然無いとか、思わず引っくり返すためのちゃぶ

台を探しちゃったよ。ふざけんなよ。ああ、もう。乙一さんがんばって！ 片山さん『紅』の続きをいい加減お願いします！ 『十二国記』の新刊はまだですか主上おおお！』

漫然とした緩い談話から、いつの間にか熱弁を振るっていた円居に、真黍は一抹の恐怖を味わう。

完全に、切り上げるタイミングを見失った。

そんな彼の窮地を救ったのは、来訪を告げる玄関のチャイムであった。

「あ、すみません、円居先生。誰か来たみたいなんで」

『——え？ ああ、そうか。うん、じゃあ次の診察を楽しみに待ってるよ。その折にでもまた語り合おうじゃないか』

「ええ、喜んで」

通話を終えた後に、鬱々とした深い溜息を吐く。鼓膜の疲労よりも、精神的な消耗が著しい。あの人のラノベ好きにも困ったものであるが、その点をすっかり忘れていた自分にも過失はあった。今後からもっと気をつけなければ、と反省しながら玄関に向う。

さて、いったい誰であろうか。

セールスなどの訪問販売は、こんな入り組んだ路地裏にある隠れ家みたいなアパートにまでやって来ないし、宅配便という可能性も怪しかった。何かを発注した覚えはないし、元々この住所は一部を除いて秘密にしてある。

ということは、飯をせびりにきた千五百さんか、はたまた説教好きの大家さんか。或いは、まさか——

いずれにせよ、真黍はチェーンをかけた状態で、ドアノブを捻る。

「やあ、真黍くん」

一瞬、あの殺人鬼が舞い戻ってきたのかと思ったが、

「乃姶……」

『現上財団』令嬢。

現上乃姶の姿が、そこにはあった。



「珈琲しかないが」

「あ、や、ども」

台所から帰ってきた真黍は、湯気の立つカップと、角砂糖の詰まった瓶をローテーブルに並べる。真黍が反対側に回って腰を下ろすまでの間に、乃姍は瓶から角砂糖を三つ、黒く波打つカップの中に沈めていた。相変わらずの甘党ぶりである。

乃姍は音を立てずに一口飲んで、

「うん、おいし」

「それは何より」

真黍はブラックのままですしただけ口に含む。じわり、と目の覚めるような苦さが染みわたる。

「真黍くんの家に来るのも、何だか久しぶりだね」

チラチラと視線を忙しなくさせている乃姍は、チェックのロングシャツと、ファアの付いたピージャケットを着込み、丈の短いプリッツスカートから伸びる長い足は、縞模様のニーソックスに包まれていた。

彼女にしては珍しく、何とも女の子らしい出で立ちである。

「そーいや、そうだな」

乃姍が最後に訪れたのは、かれこれと夏季休暇以前であったか。

「夏休み前か……夏休み前と言ったら、梅雨明けに起きたあの陰惨な事件も、なかなか印象的であつたけど」

「ああ、あのサバイバルランド……そもそも、あの事件で俺達が生

き残れたこと自体、かなり不思議な話ではあるが」

「そうかい？ 私は真黍くんと一緒なら、どんなことも不可能はないと信じてるけどね」

けらけらと、乃姍が人工的な笑みをこぼす。

それから真黍が相槌を打ち、乃姍がさらに話題を盛り上げようとする掛け合いが途切れ途切れに続いた。

決して核心には触れない、表面だけをなぞったような会話。

先程、円居が述べたような相互的コミュニケーションを図るための儀式。

けれども、真黍はいい加減うんざりしてきて、ぱっさりと本題に移ることにした。

「で、いったいお前は何の用できたんだ」

スウ、と真黍は目を細めて、正面の相手を見据えた。

「用がなくちゃ来ちゃいけない仲だったかな、私たち」

「少なくとも、俺はお前に『しばらくの間つきまどってくれるな』と宣告しておいたつもりなんだがな」

真黍の台詞に、今度は乃姍の顔から水で洗い流したように表情が消える。

「真黍くん……私には、どうしても分からないよ。私たちは、これまでよくやってきたじゃないか。数々の事件に遭遇し、幾度もの死線をかいくぐってきた。君との仲は、もう取り返しのつかないほどに深いものだと思っていたのは、私の独りよがりな勘違いだったとでも？」

息を殺したように押し黙る真黍に、乃姍は食い下がるようにして言葉を紡ぐ。

「初め、真黍くんには深い考えがあっただと思って、私も渋々とながらも従ったさ。でも今の君は、単に私を遠ざけようとしているだけにしか見えない。なあ、私の何が不満だ？ どこが気に入らない？ 至らない点があったのなら、ここでハッキリと言ってくれよ」

重い沈黙が、二人の時間を止めたかのように張り詰める。コチッ、コチッ、と壁時計の秒針がいやに響いた。しばし身動き一つ取らなかった二人ではあったが、やがて真黍の方からゆっくりと口火を切る。

「……違うぞ、乃姍。俺達はただ、元に戻るだけだ」

互いが互いを利用し、利用される関係。

つまり、『初期設定に直す』というだけのこと。

「だから、どうして今更そんなことをする必要があるんだいっ。何で、私を避けるようなことばかり」

「駄目なんだよ、このままじゃ」

掠れたような声音を吐き、瞳を虚ろに濁らせていく異端の少年。彼のどこか退廃とした、遣る瀬無いような様子に、乃姍は苛々したようにした下唇を噛む。

「いったい、何が駄目だっていうんだい」

「『正常』^{ひじょう}に、堕ちていくことが」

「そうかい」

乃姍は短く頷くと、四つん這いになって真黍ににじり寄っていた。両手を真黍の頬に沿えて、息をつく暇もなく口づけを交わす。舌を必要としない、単純な接吻。真黍もただ当然のことのように受け入れ、別段これといった抵抗を示さなかった。

数秒ほどで行為を終えた二人は、意味深な視線で互いを探り合い、あくまでも自然な動作で指を絡める。

「君も、つくづく不器用な人だね。そんなことは、別にどうだっていいじゃないか。安心しなよ、君は君以外の何者でもない」

私の愛した峰条真黍は、決して峰条真黍以外の何者にもなれない。耳元に唇を近づけ、妖しい笑みと共に囁いた。そのまま真黍に跨るような体勢で、頭部を胸に抱き、愛撫するようにして髪の匂いを嗅ぎ始める。

「……小麦が、さ」

「え?」

驚いたように身体を離し、訝しげに眉をひそめる乃姍。

「妹がさ、俺が髪を黒に染めた頃から、全然喋ってくれないんだ。でも偶に、突拍子もなく口を開いたと思ったら、警告じみたことばかり言うんだ」

——選択の余地はまだある。

これまで、その言葉が彼の胸にずっと引っかかり続けていた。真黍にとって、妹の発言は決して無視出来るものではない。そして、真黍からしてみれば現時点がまさにその岐路に立たされているのではないか、そう思わざるを得ないのであった。しかし、いったい何を選べばいいのか、どの道を進めばいいのか、正直なところ皆目見当がつかない。

故に真黍は後ろを振り向き、引き返すことにしたのだ。

『初心に戻る』というには多少意味合いが異なるかもしれないが、表層だけで言えばそれに近いものがあつた。

何物にも捕らわれず、縛られず。

何者とも繋がらず、馴れ合わず。

嘘吐き戯れ、狡猾に貪り、情け容赦なく踏み荒らし。

黒の群集に紛れた、白い鴉のような孤高を誇る。

「だから俺は、お前を含めた全てを切り離さなければならない」

五年前。あの暗い箱から解放され、眩い光の下に晒されて、初めて自分の色を識った時ように。

現在の自分は、余計な脂肪がつきすぎたせいで、羽ばたくことさえままならない状態であるのだから。従って、余計な重荷は唾棄せねばならない。

それが例え、自身の肉を直に削ぐことになったとしても。

「真黍くんの意向は、理解した」

でも納得までは出来ないよ、と乃姍は苦渋に染まった顔で、痛切にも言い放った。真黍はそんな彼女の表情を人形のような目で捉え、それを自らの返答とする。

乃姍は齒軋りでもしそうな勢いで口元を歪ませ、無言のままスク

ツと立ち上がった。

「……帰るよ、私」

「ああ」

その短いやりとりの中にも、二人の間にしか通じないテレパシー染みた何かが往復する。乃姍はなおも苦虫を噛み潰したような表情を作り、眉間に皺を寄せ、獣のような低い唸りを漏らした。

「……またね、真黍くん。愛してるよ」

玄関口まで見送りにきた真黍に、乃姍はもう一度だけ名残惜しそうにキスをする。

「俺もだよ、乃姍」

肩をすくめて苦笑する真黍の視界の先で、既に彼女の目は刃物のように鋭く、人としての温度を消失していた。

「――やっぱり、アイツには早々に舞台を降りてもらわうべきだったね」

誰の耳にも届かないような声量で、乃姍は呟く。無論、真黍も彼女の言動にはまったく気づかぬまま。

017 (後書き)

ジェットコースターはのぼりきった。

電熱式の湯沸かし器から、沸騰したお湯をドリッパースポットに円を描きながら注ぐ。香ばしい湯気が小さく揺らめいた。

もう随分と見慣れてしまった、勝手知ったる新聞部の部室から、窓の外を覗く。

静まり返った校舎。休日の学園とは、なかなかどうして薄気味悪い。今日に限っては部活動に励む連中も一人としていない。当たり前だ。そういう都合に合わせ、また仕組んだのも自分であるのだから。

それにしても、だ。どうして彼女は、自分に大人しく自首しろだなんて言うのだろう。自分は、ただ彼を守っただけに過ぎないのに。その際にうっかりと殺してしまったのは否定しようのない事実であるが、お前に指摘される筋合いはないと思う。

お前が同じ立場なら、ほぼ間違いなく自分と同等の行動をとったはずなのだから。

故に、彼女の思惑は見え透けている。結局は、自分と彼を引き離したいだけなのだ。あの黒猫の言葉を鵜呑みにするわけではないが、恐らくそうとしか考えられない。自分が豚箱にブチ込まれている間に、あの女は何か事を起こすつもりなのだ。自分の身動きが取れない隙に、彼を知らない場所へと連れ去る気なのだ。

ふざけるなよ。

お前の好きになど決してさせるものか。

いずれにせよ、舞台は用意した。後は役者がのこのこと壇上に登場するのを待つのみだ。

——と、噂をすればである。立て付けの悪い戸口を開ける音が、部室内に響いた。

「やあ、後輩くん。言われた通り来てやったよ」

自分は——掛井菊子はそれを笑顔で迎えてやる。



少しだけ時間をください、心の準備が出来るまで。

そんな台詞を抜け抜けと吐いたのが、十日前。私こと現上^{うつがみのあ}乃姍は、後輩さんの提示した条件をこころよく承諾してやった。

それで大人しく警察に出頭してくれるなら、と思つてのことだつた。

しかし、最後の最後に話し合いがしたいなどという招待状が入つたのは、今朝方のこと。

いったい、何を企んでいる？

「珈琲、要ります？」

なんて訊いたにも関わらず、彼女は私の応答を待たずして、半ば当然のように二杯分のコーヒーを用意し始めた。

「どうぞ、座つててください」

後輩くんは振り向きながら、楕円形のローテーブルを挟むようにして配置された二つのソファを指差した。彼女が不審な挙動をしていないか注意しながら、私は言われるがままに腰を下ろしておく。

程なくして、後輩くんが丸いトレイに手際よく砂糖瓶とカップミルクも載せてやってきた。静々と正面のソファに着座し、私の前にコーヒーを差し出す。

「そのコーヒー……毒でも入ってるのかい」

「ふふっ、面白いこと言うんですね」

そんなもの入っちゃいませんよ、と彼女は苦笑しながらミルクを投入して、ゆっくりとカップに口をつけた。自らを証人としてみせた彼女は、悪戯っぽく微笑む。私は警戒を解かないまでも、一応は

毒物への疑惑は晴らしておいた。

「それで？ 私をここに呼び出した理由は何かな、後輩くん？」

「……別に、これといった理由はないんですよ、現上先輩。ただ、自首する前にあなたと少しだけお話しがしてみたかった——ええ、それだけなんです」

至って謙虚な姿勢で後輩くんは返答し、私は自分のカップに瓶からスプーン三匙分の砂糖を移植する——だが、念のためもう一杯分を追加した。

ブラツクのままで飲用する真黍くんとは違って、大の甘党である私はこれでないとなったく飲むことが出来ない。

「お話し、ね。ふうん、いいよ。それくらいの要望だったら、気が済むまで話し相手でも何でもなあってあげようじゃないか」

ふーふー、と十分に温度を落としてから、口内に含む。多少癪ではあるが、悪くない味だ。

「ありがとうございます——と、まずはこれを」

と後輩くんは、テーブルに一円玉サイズのオモチャみたいな機械を無造作に置いた。

「あなたが、あたしの鞆の底に仕込んだ盗聴器です。ご返却しておきます」

「……別に、そのまま破棄してくれてもよかったのに。まあ、返してくれるんなら、ありがたく受け取っておくけど」

私は今更悪びれることもなく、盗聴器をポケットにしまう。これは、彼女の挙動を不審に思った私がこっそりと仕掛けたものだ。そこからもたらされる聴覚情報から、私は彼女を犯人だと断定した。しかし、まさか本当に彼女が犯人だとは流石の私も想定していなかった。あくまでも容疑者候補の一人としてマークしていたに過ぎなかったのであるが。

「現上先輩って、いつもこんなことやってるんですか？」

後輩くんの口調はさして責め立てるようなものではなく、純粹に興味として尋ねているかのようなだった。

「いつも、というわけではないが、まあ、ちよくちよくね」

私も開き直った口ぶりで応対する。元々この現上乃姍という人間に罪悪感なんて立派な代物は存在しない。単純に、必要だから行動した。

ただ、それだけだ。

「……ところで、一つ疑問なんだが」

「何でしょう」

と僅かに首を傾げた可愛らしい仕草をし、私を大いにイラツとさせる。

「君は、滋野井を尾行していた真黍くんを尾行していた。そして不意を討たれて窮地に陥っていた真黍くんを、君が滋野井を殺すことによって助けた。ここまでは当っているね？」

私が口にしたおおまかな推測を、彼女は笑って肯定した。

「はい。足下にあった大きめの石で、こう背後から、ガツンと。念のためもう一度ガツンってやったら打ち所が悪かったのか、なんか死んじゃいました」

「死んじやった、ね……で？　　いったいその死体はどうやって移動させたのかな？」

「ああ、それは簡単ですよ。しげのいすぐる滋野井選の死体は、彼自身の持ち物だったスポーツバッグに詰めたんです。バッグは子供一人分が丸々に入るようなサイズでしたし、ちょうど良かったですし」

なるほど——と、私は納得する。『子供一人分』とは大分アバウトな基準ではあるが、おおよその仮定として、小学生高学年、身長は150センチ前後とするならば特に問題はない。

何せ滋野井選の体格は、一般的な男子高校生と比較してみても遙かに小柄な部類なのだ。正確なデータは把握していないが、目測だけでも身長は150センチに届くか届かないという程度。もしかしたら、体重は自分よりも相当軽かったのではないかとも思う。

「それで、今はあたしん家の冷蔵庫に小分けして入ってます。遠くの山とかに埋めたりして、少しずつ処理はしてるんですが、なかなか

か重労働で」

「それは難儀だな」

だが、そんな徒労からも今日で解放されるわけだ。

心中でこっそりと皮肉ってから、私は手許のコーヒーで喉を潤す。

「そじゃあ、今度はこっちからも一つ訊きたいのですが」

何かな、と私は目線だけで返事をする。後輩くんはさりげなく居住まいを正してから、私をじっと見澄まして、

「現上先輩は、真黍先輩のことをどう思ってるんですか」

相手の質問の意図を探る前に、私は即答していた。

「無論、愛しているさ」

その一瞬だけ、後輩くんの目が冷やかに細められる。

そんな些事には構わず、私は畳み掛けるようにして続けた。

「君が知っているかは知らないが、私たち二人はこれまで数々の修羅場を乗り越えてきたんだ」

例えばそれは、隔絶された孤島からの脱出であったり、返り血に染まった聖夜であったり、封鎖された遊園地でのサバイバルゲームであったり、最後まで仮面に踊らされ続けた舞踏会であったり、罪業で彩られた人形達の戦争であったり、そして誰もがいなくなったとある田舎の惨劇であったり。

「私と真黍くんは君みたいな一般人の想像を遥かに超える死線を、これまでに幾度となく潜り抜けてきた。その中で築き上げた絆は、もはや断ち切るこの出来ないほどに強固なものとなった。要するに、だ」

そもそも私たち二人の間に、君の介入する余地など皆無ということさ。

脅しの意味もこめて、懷からバタフライナイフを取り出し、刃先を突きつけながら鋭く言い放つ。

後輩くんは、

「はっ」

と心底馬鹿にしたように、晒い飛ばした。

「わ……私は、何か君に可笑しなことを言ったかな」

別段動揺したわけではなかったが、どうしてか声が震えた。

「いえ——いえいえ、ごめんなさい。ふふっ。ただですね、くだらないなあと思って」

喻えるなら、幼子が懸命に描いた絵を取り上げて、『うんうん、がんばって描いたね。でもこれは価値のないただのゴミだね』と笑顔で破り捨てるような冷酷さが、その声音にはあった。

「く、くだッ、くだらない？」

加えて何故だか、呂律も回らなくなっていた。

「ええ、くだらないです。あなたの主張。あたしからしてみれば、『だから何？』って感じです。場数の多さ？ 時間の長さ？ そんなもの、ハッキリ言って関係ないんですよ——あたしと先輩には」

「な、何をい、言っ、ててっ？」

正面に向けたままの腕が、震える。ポロリ、と握っていたはずのナイフがあっけなく落下した。

「どうしたんですか現上先輩？ 顔色が、悪いですよお」

心臓が、荒縄によって締め付けられていくような感覚。私は必死に立ち上がろうとしたが、あえなくして派手に転倒した。

何が、どうして、私は倒れている？ まとまらない思考と共に、激しい頭痛と目眩が襲う。麻痺した身体はビクッビクッと痙攣ばかりを繰り返すばかりで、まったく言うことを聞いてくれない。

「あらら、大変」

やはり毒か、と見下したように微笑む彼女の言葉で私は確信する。しかし、いったいどこで混入されたのだ？ この女の挙動一つ一つに、私は細心の注意を払っていた。飲み物に異物を混ぜたような様子はなかったし、何よりこのコーヒーマーポットから直接注がれたものだ。ならば、最初に飲んだ彼女が無事なのは説明がつかない。

ハッ、と私は眼球だけを動かして、卓上の砂糖瓶を見据える。彼女がコーヒーに入れたのはカップミルクのみ。私は瓶の中身を多量に――

「さ……砂糖、か」

私は、自ら毒を盛ってしまったということか。

彼女の動向に神経を注ぎすぎていて、周囲への用心を失念していたとは何たる不覚か。

「やっと、自分の迂闊さに気づいてくれましたか。ふふっ。現上先輩もけっこうおマヌケさんなんですね。あ、でも勘違いしないでくださいよ。あなたを仕留める為の手段は、これ以外にもいくつか用意してたんですよ」

そう言って後輩くんは、某有綿漫画家が自画像で装着しているような、ゴーグルと吸入缶から成る――所謂ガスマスクをソファの下から取り出してみせる。

「珈琲作戦が失敗したら、この部屋に毒ガスを充満させる予定もありましたし、いざとなったら黒猫に始末をつけさせる手立てもありましたしね」

でもまさか、一番最初の罠にまんまと引っかかってくれるなんて、とんだ取り越し苦労でしけど。

ひとしきり愉快気に笑った彼女は、ガスマスクをソファの端に放り投げる。

「き、君は、いったい……何なんだっ」

「――そのクエスチョンにお答えする代わりに、一つ昔話でもしましょうか」

そう言っておもむろに起立し、窓際へゆっくりと進んでいく。私は床に伏したまま、黙って耳を傾けることしか出来ない。

「あるところに、芸術家を父に持つ女の子がいました。しかし、父親からすれば妻や娘は、自分の作品の一つに過ぎないのです。だから、駄作の烙印を押された女の子の母親は、父親の手によって壊されてしまいました。恐ろしくなった女の子は、ひたすらに父親の

作品であり続けようと努めました。母親のように、駄作として壊されてしまぬように。或いはどんな形であれ、父親からの愛を欲した結果なのかもしれませんでした」

そこまでの彼女の語気は抑揚のない淡々としたものであったが、次の瞬間にはガラリと豹変する。

「――そんなある日、父親は一人の上質な素材を連れてきました。一見どこにでもいそうな、普通の男の子でした。父親は言いました。『お前は、この子と対となることで初めて一つの作品になる。だから、この子が完成した時、この子とお前は間違いなく、僕の生涯で一番の最高傑作になるんだ』と。父親は女の子も初めて見るような興奮ぶりで、一睡もせずに制作活動に励みました。女の子は、その光景を毎日毎日飽きもせずに、ずっと眺めていました。眺めていたいと、思いました。女の子にとってそれは、甘美で、夢のような、とても満ち足りた時間だったからです。何せ、自分が完成されていく過程を鑑賞することが出来たのですから。絶対の絆で繋がれた、自分の対をなす分身が造られているのですから！」

まるで彼女は舞台の上にも立っているかのように、身振り手振りを交えながら物語る。しかしながら、私はその内容に驚きを隠せずにはいた。

だって、それは真黍くんの人生を覆した――

「かくして、徐々に男の子も作品として――あたしの片割れとして、完成に近づいていった。その髪は過度の恐怖とストレスによって根元から白く染まり、瞳は光さえも飲み込む虚ろさを孕んだ。けれども、あたしは確かに彼の中で煌々と輝く至高の『美』を見出した。

この世でもっとも美しい人間の真実を見つけたんだ！ ああ……あ、ああ、あああああそれなのにいいっ！」

ポニーテールの髪を振り乱して、後輩くんは狂ったように声を荒げる。

やはり、この女の正体は――

「もうちょっとだったのに！ あと少しで彼が完成していたはずな

のに！ 警察が突然乗り込んできて、お父さんを撃ち殺した。それから、あたしと彼は別々に引き剥がされてしまった……まさに、身を裂かれるような思いでした。ねえ、その時の痛みがあなたに分かりますか、現上先輩。覇^はヶ峰^{がみね}の庇護下にいるというだけの、現上のあなたに！」

「……き、きみは、三界院^{さんがいいん}の——」

辛うじて意識を保ちながら、私は目の前の狂った女をねめつける。

「ええ、察しが付いたみたいです。では、改めまして自己紹介でもしましょうか。掛井というのは母方の性で、便宜上そう名乗っているだけなんです。あたしの本来の名は——朽咲^{くちさき}」

三界院に連なる『五行機構』が一角、『朽咲諜報局』に属する朽咲菊子です。

018 (後書き)

他にも。

『壊道研究室』

『熾原戦闘団』

『舞泉経済部』

『鏡宮捜査課』

『五行機構』。

三界院に仕える五つの家系。熾原^{おきはら}、舞泉^{まいずみ}、壊道^{かいどう}、朽咲^{くちさき}、鏡宮^{かがみや}の五家を総じて『五行機構』と称す。

古くは陰陽師の一族として、この国の暗部に根付く権力の怪物。
覇^はヶ峰^{がみね}一門に属する現上にとっては、名目上の宿敵。

「現上先輩。あなたの敗因は、あくまでもあたしを一般人として認識していたことです。あなたは細心の注意を払いながらも、奥底ではあたしを取るに足らない存在として油断していた。それが、現在の状況に至るわけですよ」

そして、その朽咲の者が数年前に起こした騒動。

真黍^{マキ}くんとその家族を巻き込んだ、『芸術至上^{アートマン}』事件。

その事件の犯人、『芸術至上^{アートマン}』こと朽咲菊花^{くちさきぎくか}の娘が今、私の目の前にいる。

「い……いい、色狂いの朽咲、め」

私の精一杯の罵倒に彼女は律儀にも反応して、下腹部を思いっきり蹴り上げてきた。

「黙れ、覇ヶ峰の犬が——いえ、猿回しの猿とでも言い換えましようか？」

込み上げる胃液に咽ぶ私を俯瞰しながら、怖気立つような笑みを浮かべる朽咲菊子。

「いいですかあ、これからあなたは、あたしに殺されるんです」
仰向けに倒れている私に馬乗りしながら、乱暴に胸倉をつかまれる。

「あなたと先輩の『絆』がどれほどかは知りませんがね、あたしと先輩の『繋がり』に比べれば、あなたの言う『絆』なんて道端の雑草にも及ばないですよ。あたしと先輩は二つで一つなんだ。横から出しゃばっただけのあなたなんか、先輩は絶対渡さない！」

彼女の鬼気迫る表情と共に、私の危機も確実に迫っている。

死ぬのかなあ、私。

これまでしぶとく生き抜いてきたはずなのに、こんなあっさりと殺されてしまうのだろうか……ああ、違うか。訂正しよう。

真黍くんがこの手を掴んでくれたからこそ、今日の私があるんじゃないか。

絶体絶命の状況下に追い詰められても、彼と一緒になら無条件で大丈夫だと思えた。彼が諦めない限り、私も諦めなかった。彼が足掻くなら、私もいくらだって足掻き続けられた。

私は、真黍くんが傍にいてくれたからこそ生き残れてこれたんじやないか。元々冗談半分にしか生きていなくせに何が『死ぬのかなあ』だ。ふざけるなよ。死に場所ならこれまで腐るほど用意されていたはずだ。それを今更、この現上乃姍に上等な死があったたまるか。

『ぬーん。乃姍はさ、仮に大洪水が起こったとしても事前に船でも作って助かってそうだよね』

いつだったか覇ヶ峰本家の『零音様』^{れいん}から、そんなお言葉を頂いたことがある。

人の本質や内面を見抜くという《異能》を抱えて生れ落ちる覇ヶ峰直系の彼女が言うのだから、恐らく間違いはないのだろう。

ならば、やはり私はここでもそう簡単に死ぬわけにはいかないのだ。

まるで呪縛のような『生』からは、逃げたくても逃げられないのだ。

「なにを、笑ってるんですか」

朽咲菊子は私の首を万力のようにキリキリと締め上げながら、不思議そうに問う。窮地に追い込まれているはずの私が、余裕綽々と満面の笑みを浮かべているのが気に入らないのだろう。

「わ、私の『愛』が、君の薄汚い『独占欲』に負けるはずが、ないだろうっ——あは、はははっ」

ギリイツ、と彼女は顔を真っ赤にさせて齒軋りを鳴らす。密着させていた腰を上げ、両腕に満身の力を込めて、私に引導を渡そうとしてくる。だが、私の狙いはまさにそこにあった。

「肩に、力が入りすぎなんだよ」

正面の鼻面にめがけてジョブを叩きこむ。彼女は呆氣にとられたように目を見開き、私の首にかかっていた両手の圧力が弛む。その隙を突いてすぐに片足を折り畳み、相手の下腹部に押し当て、思いつ切り蹴り上げた。体重が軽いせいもあったのだろうが、彼女は面白いうように後方へ吹き飛んでいった。

多少相違点はあるが、俗に言う巴投げという技である。

「ありえない……」

後輩くんはそのまま山積みされたダンボールの群れに直撃したように、内容物であった資料の雪崩に巻き込まれていた。私は覚束ない下半身を鼓舞しながら、通常の三倍の時間を費やしてどうにか二本足で立つことに成功した。

「……な、何で？　だって、だって薬の効果が切れるにはまだ全然早すぎる」

彼女の驚愕に染まった顔を、思いつ切り鼻で笑ってやる。

「ある程度の薬物に対する耐性は、既に幼少の頃からずっと訓練されてきたんだ。現上の人間を、薬なんかで倒せると思ったら大間違いだよ」

フラフラと私はソファに残されていたガスマスクを手取る。彼女がガスを充満させることを懸念しての行動だった。ついでに自分のナイフも一緒に回収しておく。

「覚悟しろよ、朽咲。この現上乃姍が、君の胸に真っ赤な花を咲かせてやる」

私の宣告に、名高き色情魔の血を引く彼女は憎悪に染まった顔で、激昂したように私の名前を吼えた。

「さあ、決着をつけようか」



ポケットの中の携帯電話がシューベルトの『魔王』のメロディを奏でたのは、真黍がパソコンのデータ整理に励んでいた矢先のことであった。確認してみると、案の定『現上乃婀娜』と表示されていた。「……………」

受信されたメールには短く『学園 西棟校舎裏 助け求む』とだけ記されていた。真黍は不審に思いながらも、パーカータイプのジャケットをひっかけて家を出る。今にも降り出しそうな暗雲が太陽の光を遮り、どこか湿った空気が真黍を包んだ。

乃婀娜にアドレスを教えた当初は十五分ごとにどうでもいい内容のメールが絶えず送信され続けてきたので、真黍は必要時以外のメールを禁止させていた。

だからというわけではないが、そんな乃婀娜からの救援要請。加えて単語を並べただけの不親切な文からは、それだけ今の立場が切羽詰っているという事実を克明に語っていた。

過去の事例を検証してみても、乃婀娜が助けを求めるということ自体がかなり珍しい。ならばこちらもそれ相応の準備をしてから向かいたいものだが、いかんせんそんな悠長にしている暇はなく、状況もまったく掴めていない。ので、とりあえずは早急に乃婀娜と合流することが真黍にとっての最優先事項であった。

途中でタクシーを捕まえて、約十分ほどで神無森学園^{かなもり}に到着する。休日であるからして当然のことであるが、校門は閉まっていた。だが、真黍は何の躊躇いも見せずに門扉を乗り越え、西棟校舎を目指して駆け出す。

乃姍め、また何か厄介事に首を突っ込みやがったな。

恐らく、いや、十中八九俺に関わるトラブルを。

颯爽と風を切りながら、真黍は思考を巡らす。

今度は、何だ。どこの藪を突きやがった。まさかとは思うが、俺がお前から遠ざけた滋野井選の事件についてか。けれども、その問題は解決には至っていないものの、蛇が潜んでいるほどの深さはなかったはず。ならば、その過程で猛犬の尻尾でも踏みつけてしまったのか。いずれにせよ、援護を頼む事態にまで陥ってしまったその舞台が、この学園というのも妙に気になる。

真黍は走って、考えて、走って、考えたその果てに——一つの解答に辿り着く。

——否、それを解答と呼ぶにはあまりに凄惨過ぎた。年中無休で日陰をまっとうしている、西棟校舎裏。

真黍は、そこで現上乃姍^{うつがみのあ}の死体を発見する。



黒いアスファルトの上で、押し折れた首と、ひしゃげた腕を投げ出して、脳漿を撒き散らして咲かせている真紅の花弁。原形の無く

なった顔面ではあったが、真黍はその者が誰であるのか即座に理解した。

「乃婀娜……」

真黍は声を細めて、静かに彼女の傍へと跪く。そのまま彼女の体勢を仰向けにし、手を胸の上で組ませ、そっと開きっぱなしだった目蓋を下ろした。

常人では決して直視出来ないような酷い有様であったが、真黍は乃婀娜の割れた額に優しく手を置いた。

きつと彼女は、こんな結末であっても決して後悔だけはしなかったであろう。

真黍は一年程前に巻き込まれたサバイバルランドの一件を思い出す。何せ乃婀娜は、死ぬ間際でさえも『それもこれも、私の運が尽きたまでのことさ』と一笑に付すような人種であったのだから。

ならば反対に彼女は——自分達は、これまで運が良かったから生き残ってきたに過ぎない。境界線ギリギリの上を危なげに綱渡りして、幸運にも足を滑らせてこなかったただけであり、いつだって死は恋人のように寄り添っていたのだ。

従って、驚きはすれ不思議はない。寂しくはあれ悲しみはない。

現上乃婀娜は、精一杯に抗い生きて、胸を張りながら末期を迎えた。だから、

「おめでとう」

そして、おつかれさま。

真黍は上着を乃婀娜に被せてから、何気なく上空を仰いでみる。四階の窓が一箇所だけ全開していた。恐らくはあそこから落ちた——いや、突き落とされたのであろう。次に周囲を見回すと、少し離れた地点に彼女が愛用していたバタフライナイフが落ちていた。真黍がそれを拾い上げると、懐の携帯が再び『魔王』の旋律を奏で始めた。

『さあ、部室へ』

そう表記されていたメールの文面を閉じると、真黍はもはや振り返ることもなく歩み出した。

相手はわざわざ乃姍の携帯を使用してまで、自分をここへ誘き寄せた。

無駄に凝った招待状と、歓迎の赤い花束で出迎えて。

ああ、いいだろう、いいだろう。

「よろしい、結構だ」

その喧嘩、この『白鴉』ホワイトアウトが買ってやる。

かくして、真黍は無防備かつ無計画に猛進していく。それは慎重派である真黍にとってらしからぬ行動であったが、もはや彼に権謀術策といった小細工は一切必要ではなかった。感傷ではなく、感情でもなく、ただ単純に片を付けなければならぬという義務感じみた衝動だけが、現在の真黍を支配していた。

終わらせなければ、一刻も早く幕を下ろさなければ。

この茶番に終止符を打たなければ、ならないのだ。

乃姍の為にも。

自身の為にも。

それから果たして、真黍が辿り着いた新聞部の部室では、血溜まりを広げた後輩の亡骸と、さらにもう一人見覚えのある人物がこちらを待ち受けていた。

「やあ。しばらくぶりだねえ、真黍くん」

素敵で不敵な殺人鬼——各務奈直は、かがみななおその中性的な顔を綺麗に歪ませて、ニタニタとした薄ら笑いを無邪気に貼り付けていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4593n/>

嘘以下の回想

2011年12月24日16時53分発行